

【資料翻刻】高橋亨京城帝国大学講義
朝鮮異学派之儒学：講義案（下）

Notes for Lectures on Confucianism of the School of Heretics in Chosen(2/2):
Typing of Takahasi Toru's Notes for Lectures in Keijo Imperial University

権 純 哲*
KWON, Soon Chul

〔朝鮮〕異学派之儒学 【第一册】昭和十季七月
朝鮮儒学に於ける異学派

一 尹白湖

〔二〕朴世堂

〔朝鮮〕異学派之儒学 【第二册】昭和十年孟仲
夏

〔三〕沈白雲 ※以上、第52巻第1号に掲載。

朝鮮異学派之儒学 【第三册】昭和十年八月晦

〔四〕李白雲

〔一 事蹟〕(8)

〔今文学、公羊学〕

〔二 白雲の学説〕(15)

〔宋学、醇孔子の学に非ず〕

〔東夷の文化〕

〔孔子の政治的理想〕

〔公羊学派の儒教観〕

〔儒教根源、神道〕

〔五〕丁茶山

〔一 事蹟〕(20)

〔南人の学脈〕

〔著述〕

〔家系、星湖私淑、出仕〕

〔蔡濟恭〕

〔正祖の優眷〕

〔反対派の攻撃：西教案〕

〔西教獄、流配〕

〔茶山〕

〔賜環歸郷〕

〔醫術〕

〔士類生活〕

〔西教浸染か否か〕

二 茶山の經学 (8)

〔研經の態度〕

〔『易』と『禮』〕

1. 『大學』(16)

2. 『中庸』(22)

〔戒愼・恐懼、不睹・不聞〕

〔天命、性〕

〔『心經密驗』〕

〔茶山の性説〕

〔與猶堂集の内容と著作年代〕

3. 『周易』 【第四册】昭和十年臘月十九日

〔「括例表」〕(19)

一 推移

二 互體

〔三〕伏體

〔四〕辟合

〔五〕爻變

〔古今『易』學者の著述検討〕

茶山ノ筮法 (5)

土地共產説 (0)

〔六〕鄭霞谷

* くおん・すんちよる
埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授
韓国思想史・東アジア近代学術思想

一 事蹟 (10)

〔退溪の陽明學揮斥〕

〔最初の陽明學者、南彦經〕

〔鄭霞谷の陽明學標峙〕

〔人物、生涯〕

〔英祖の禮遇〕

二 學說 (16)

〔陽明學への轉向〕

〔師尹明齋の憂慮〕

〔衷情と信道〕

(續) (9) 【第五冊】昭和十一年一月五日

〔學名、一世を壓す〕

〔朴世采の「王陽明學辨」〕

〔文詞の才〕

〔從學門人〕

〔七〕金阮堂

〔一 事蹟〕(20)

〔朝鮮文化の掉尾の一盛代〕

〔朝鮮漢學の絶頂〕

〔出生〕

〔朴齊家に從遊〕

〔清朝名人との交誼〕

〔家禍〕

〔大靜に圍籬安置、北青に流配〕

〔晩年の書畫禪三昧と茶〕

二 經說 (19)

〔儒學に對する根本的主張、聖學・實學〕

〔程朱彈譏・陸王攻撃〕

〔禮：聖門に於ける普遍法門〕

〔卓識なる佛教論〕

(續) (17) 【第六冊】昭和十一年一月下浣

〔阮堂學術に反對せる學界代表〕

〔老論の李敏徳洞山〕

〔南人の李源祚凝窩〕

〔朝鮮思想界の異端無用之學〕

* (数字) は該当項目の概算ページ数

* 〔仮題〕は補充した仮題

〔四〕李白雲

〔一 事蹟〕(8)

朝鮮に於ける(非)朱子學派の儒學の最後として現存する嶺南の一學者、李炳憲白雲山人を述へんとす。従前叙來せる異學派は、或は古學、或王陽明、或は沈白雲の如く、獨創説を唱ふる者なりしも、李白雲に至りては實に公羊學派に屬し、所謂經書にありて今文を主張する者なり。古來朝鮮に於て學者と稱する者其數、林々不測なりと雖、公羊學を唱ふる者に至りては李白雲の外あることなく、恐らく將來亦之あることなかるへしと惟はる。是の意味に於て彼は、朝鮮儒學史に於ける罕觀の存在なり。

李炳憲、字は子明、~~慶州の人~~、陝川(の人)。~~に居る~~有名なる清儒(に於)李退溪の同時代に於て其の知友たる清香堂李源、竹閣李光友は其先人なり。今慶南咸陽郡瓶谷里に住す。本年六十六歳(昭和十年頃録す)。

元と南人の家學を治め、李退溪よりして程朱氏に溯る。而して既に朱子か『春秋』大義に則ると稱して胡漢の峻別を立て獨り漢人種を以て天の特別の寵命を受けたる者なりとなすに對して疑を懐く。會々大正二(一)年癸丑(壬子)支那に革命成り、軍閥の棟梁袁世凱(1858~1916)大總統の位に上る。而して支那學界の第一人康有爲南海(1858~1927)之に服せず、反對の意見を發表して南方に逃る。

白雲山人、學者の資を以て好むて經綸を論し、夙に東亞の和平に思を致す所あり。今支那に於て袁・康二氏の不和を見て大に中華の爲に(不)利を招く者となし、慨然として單身北京に遊して袁項城(世凱の出身地)の思想を探り、機會あらは之に會見せんと欲し、事成らず、轉して香港に至りて康南海に面會し、遂に其の學問政見人物に傾倒し、後大正五年〔第二回〕と七年〔一九一〇年：第三回〕と兩度、南海を上海の僑居に訪ひ

て曲さに儒教及經學に關する蘊蓄を敲き、其の介紹を得て杭州の浙江圖書館に赴きて漢以前の古籍の殘存する者を涉獵し、遂に確乎として立つ所あり。

返りて慶南山清郡丹城面培山洞先祖の住址に就きて培山書堂を建て〔1923.9 落成式〕、此に孔子を祀り、配するに退溪、南冥、清香堂及竹閣四儒を以てし、遙に曲阜の孔家より聖祠たるの承認を得、別に書庫をおきて其の上海より購來れる〔第四回〕所の今文經書及今文派の巨匠の著書を藏皮す。×

〔上面：×昭和四年十一月白雲の齋藤〔實 1858～1936〕總督に上れる『蹈海叢談』の第十編「千古奇事一生奇遇適所以自困」に於て南海門中自ら任する所を述へて曰く

「先生〔南海〕之門、聰明才辯之士、不爲不多。至於經學、獨稱余。言中國之士、未有其比〔其奇五〕也。〕」

白雲氏、數度渡支¹（買書）及土木に由りて元と裕なりし資産を多く喪ひ、且又其の（奉する）學說、朝鮮儒林と容れず、其の數次發表せる意見は皆嶺南儒生の激昂反對を買ひ、~~且~~又其の懷抱する檀君說も、初は日本民族に對して朝鮮民族の獨別起源を立て、其の特別使命を高調する結果、官憲よりして指目を受け、四顧煢然として失意の極に達す。數年前累次、齋藤總督に上書して其の所謂朝鮮の儒教の振興即所謂「儒教復原論」即儒教を宗教となし、孔子を教祖と）さんことを述へしも、特に採納せられて實施するに至らず。

頃ろ或は家郷に或は山寺に子然として（形影相頼り）讀書鉛槧に従事す。衰境、尤哀むへし。其の著す所『儒教復原論』『孔教大義攷』『叢書』『詩經（附註）三家說攷』²◎（上面：◎八卷合四本。『詩經傳註今文說攷』四卷合二本、『禮經今文說攷』十八篇合四本）『歷史地理談』『蹈海叢談』等あり。文章學問該博古今に涉りて而し

て畢竟公羊派の主張を固持し、文章亦明達にして而も古氣あり、筆冊亦見るへし。朝鮮現存の儒者として他に比肩すべき者少し。

惜矣哉。學風固陋なる是邦に生れて、而して白雲其人亦性格奇矯、立言の調、動もすれば鮮儒の反感を挑發す。其行動亦往々尋常を軼し、人の誤解を招き易し。例へば、本と學究に於て學究の窩を守らず、海を横きりて袁項城を干し、又康南海を説き、後齋藤皋水に頻次上書するか如し。其性格に明に不調の点あり。是れ、彼の其學說の朝鮮儒林に容れられざるのみならず、其の境遇の愈々孤立悄然、轉軻不振の極に陥るに至れる所以なり。

〔今文學、公羊學〕

今文學派³と謂ふは、清朝道光咸豐の頃に至り、漢の馬融・鄭玄以來、古文經書の研究、既に其の極に達せる後に至りて、漸く盛況を見たる經學の有力なる一派にして、近くは清末民國初の蜀の廖平〔1852～1932〕、廣東の鉅匠康有爲二氏は、此派の大家にして就中尤も南海を推す。南海は廣東の朱九江〔次琦 1807～1881〕に從學⁴（し、又廖平に參す）。

公羊派は、漢の董仲舒、何休に起る。即孔子を以て素王となし、孔子は天より帝王たるべき眞資格即聖徳を與へられしか、王位を得るに至らず、されど王の實即天下萬世の爲に歴史の事實を毀譽褒貶して以て王侯に向て賞罰を行ふことを許されたり。此に於て天命に應じ、素王の權を行ひたるなりと（主張す）。素王とは西洋語に所謂無冠帝王の義、位なくして空しく王⁵たるなり。故に『春秋』三傳中、此の大義に倚りて『春秋』を傳せる公羊獨り取るへしと。又公羊學派は說を成して曰く、三傳中獨り『公羊傳』のみか後漢古文派馬融・鄭玄の恣なる解釋に累されず、今文の儘に傳來れり。故に『公羊傳』獨り取るへしと。此に公羊派と今文派と合流す。

更に進みて『詩』『書』に及び、其古文を以て

前漢劉歆の攙改を加へし者なりとなし、『古文書經』及『毛詩』を取らず、『今文書經』及『三家詩』を取る。斯くて（先秦前代）漢以前（周秦西漢）の殘經子史中より綿密に摭摭して竄改以前の古形を採出す。是れ今文學派と稱する所以なり。

又孔子を以て素王と立つるか故に、一轉して儒教を頗る宗教的に觀て、孔子を以て教主にして天人合一の理想を完全に體現せる大聖となすこと、佛教に於ける釋迦、基督教に於ける耶蘇の如くせんとす。要するに今文派の學風は、頗るスペキュラチグにして一々の訓詁解釋にありては或は襯〔表現・表示〕せざる事あるも、所謂大義微旨を究めて古文派の想到らざる所を闡明せる所に特色あり。康南海の『新學偽經攷』『孔子改制攷』『大同書』等は其の標本的名著なり。×（上面：×南海「春秋註」あるも未見。）

〔二〕白雲の學說（15）

白雲は『詩』『書』『禮』『樂』『易』『春秋』を以て孔門六藝の教科書となし、之を孔經と稱す。而して『周禮』を以て後人の偽作に係るとなして取らず。『樂』は本と書なし、従て「樂經」滅ひすとなす。

「本有音而無書。孔子之正樂、乃所以正詩也。」
〔『孔經大義攷』総論〕

『易』と『春秋』とを以て二大經に於、聖人畢生の心血を此に傾注す。故に孔教の大義微旨所謂究竟地を諦めんと欲すれば、是二大經の外なしとなす。是の外『山海經』（『孔子家語』）漢代の緯書に於て取る所多し。

〔宋學、醇孔子の學に非ず〕

白雲は、先づ（宋學）朱子に依りて大成せられたる宋學を以て醇孔子の學に非ずとなす。

其の第一理由は、朱子か『通鑑綱目』に於て主張する胡漢の峻別か決して孔子の思想に非ざるか故なり〔程朱は中國人を以て氣の正を得る者、夷狄

禽獸は氣の偏を得る者となす〕。蓋し孔子の思想は、上帝の降衷、普遍不偏にして、決して支那の人々のみ私にする者に非ずとなす。『儒教復原論』に曰く

「春秋之曰華曰夷、皆在禹貢九州之内、因當時有文野之別。故夫子微寓褒貶之意然。但就事斷例、或夷以進華、華而夷之、初非以邦域而設畦畛也。」〔第三章儒教宗旨③答〕

更に『論語』を引きて

「子曰夷狄之有君、不如諸夏之亡也。」

とあり、又孔子九夷に居らんと欲し、其地に曾て君子居れることありとなす。（九夷は東方に九夷あるを指すなり。）皆夷狄たるを以て之を賤視せざるの意なり。×（上面：×又『孔子家語』失弓の喩を引きて曰く〔第五章儒教範圍④答〕

「昔者楚恭王、亡烏嚙之弓而（曰）楚王失弓、楚人得之、又何求之。孔子聞之曰、惜乎其不大也。不曰人遺弓、人得之而已、何必楚也。〔又曰聖人以天下爲一家、中國爲一人。推此以求、又何國界之可分、中外之可議者乎〕」

孔子の氣象、天下を以て一家となし中國を一人となす〔禮運〕を見るへし。何ぞ、華夷胡漢を峻別して胡夷を賤視するあらん。）

〔東夷の文化〕

白雲は『孟子』の「舜は東夷の人なり」〔離婁下〕とあるを根據として（帝）舜の東方夷國の人たるとなし、且つ又東夷に帝舜の生まるゝは、東夷の文化既に其の素地あること久しきに由るとなし、之を『易』の説卦に「帝出於震」又「震東方也」とあるを根據として、支那最古の帝即伏羲の亦東方夷國の人なり、伏羲氏の時、既に東方に治化布かる、是れ帝舜の此に生まるゝ素地を成せるなりとなす。

又『山海經』⁴の「大荒東經」「大荒南經」「大荒西經」「大荒北經」「海內經」に帝俊出つ〔『歷史正義辨證錄』帝俊考第三〕。古來、人多く俊の音通を以て帝舜に當つれど、帝舜の事は『山海經』

の外に記する所ある、一再に止らす、宜しく別人なるへしとなし。

「大荒東經」に「大荒之中、有山名曰合虛。日月所出、有中容之國。帝俊生中容。」とあるに由りて帝俊亦東夷の人なりとし、遂に檀君を以て之に當てたり。又東方の舟車琴瑟は、帝俊の子乃至孫に至りて作らる〔海内經〕。故に其の舜以前の聖君に於て亦東方文化の發達に功ありし人なり。⁵

是等の事實は、皆孔子の九夷に居られんと欲する〔論語〕子罕 理由を裏書するものなり。是説、朝鮮に於ては破天荒なるも、期せずして日本儒者華夷説と暗合し、正當なりと謂はざるべからず。竹添氏〔進一郎：1842~1917〕『論語會箋』卷第三「夷狄之有君不如諸夏之亡也」の箋に「伊藤仁齋曰、聖人崇實而不崇文。後之説春秋者、甚嚴華夷之辯、大失聖人之旨矣。得之。夫所爲賤夷而貴華者、以其貴於夷者存也。若使其不如夷則奚取於華。明之末季、其於外國、專以侮蔑爲務。或與之角、百敗不支、而誇張之意自若。殆如病熱幾死之人、讒語狂走、不可制。亦可憫歎。」

×（上面：×然れども、説卦を引いて伏羲の東方に生れたりと言ふは、説卦の本義を得たるに非ざるを思はざる能はず。説卦の語は、其次節に「萬物出乎震、☳東方也」と説明せるに明にして、此の帝は『本義』の説の如く「天之主宰」と見て、即上帝の萬物生々の大作用は東方より始まるを謂ひしに外ならず。

東方は（地）北半球にありては日出るの方、一日の始なり。而して春亦東方に配し、春光東風と共に來る。八卦に就て震の萬物か上帝の大化によりて現出るを表す卦に於て、而して之を方角に配すれば東方に當ると云ふ意味なるに外ならず。白雲の學、往々義解に牽強付會ありて衆の贊襄を得る能はざるものある、是の如し。）

〔孔子の政治的理想〕

第二理由として、朱子の政治學の帝王專制を以て政體の常道となすを以て孔子の思想に非ずとなす。此に公羊派の重大なる思想の活躍するを見る。

公羊派にありては『春秋』を三世に分つ。元と公羊疏には（魯）昭公・定公・哀公三公の世をは、孔子自身と父との舜時の事なるを以て（之を）「所見の世」と~~なす~~謂ひ、襄公・成公・宣公・文公四公の世をは、（孔子）王父の時の事なるを以て之を「所聞の世」と謂ひ、僖公・閔公・莊公・桓公・隱公五公の世の時の事を「傳聞の世」と謂ひて、『春秋』に三世を立つ。

然るに康南海に至りては、更に之を進めて、孔子の三世を立るの微旨幽義は、單に所見・所聞・傳聞の義に依るにはあらず、孔子の人類社會世界の進化の思想を寓せるものにして、即『禮記』禮運篇に孔子か子游に向て教へられし三世を意味すとなし、即「所見の世」は「太平の世」〔即大同世〕、「所聞の世」は「昇平の世」、「傳聞の世」は「據亂の世」となす。是れ、孔子の人生進化に對する眞の理想にして獨り子遊の聞くを得たる所なり。

白雲は、更に此の（南海の）禮運三世の意を今日の政體に當て、[×]「據亂の世」は「立憲政體」、「昇平の世」は即「共和政體」、「大同の世」は即「社會主義政體」なりとなす。故に君主專制政體の如きは、孔子の政治的理想に於ては眞に上代に於ける一時の政治的過程にして決して之を進歩せる政體にはあらずとなす。

（白雲は）『叢書』〔泣告朝鮮十三道儒林同胞〕「儒教政治思想之缺陷」に於て述へて曰く

「按今日稍知大勢者、皆以孔子爲尊周爲專制、而欲倒戈相攻。嗚呼、孔子果尊周而專制耶、否耶。此當明目張膽、精察而痛辨。夫孔子之大經爲春秋……孔子之作春秋也、惟子游・子夏得聞筆削之義而不敢贊一辭、其所傳之義則實夫子之辭也。若子游所傳、則於禮運大同之説可見、子

夏所傳、則公・穀・董子口口相承、師々相授、實不可誣也。至西漢末、劉歆承新莽之風旨、纂國語、爲左傳於春王之下、添入周之一字。至杜預則曰所書之王即周平王也、所用之曆即周正也、胡安國則目爲周平王四十九年。於是乎、一部春秋遂爲尊周之書。以公羊氏重國輕君、黜周王魯之嫌、爲不知君臣之義而廢之、則先聖改制立憲之統已絶、一部春秋遂爲專制之書。雖以馬・鄭・程・朱之賢、亦不免推波助瀾、縱風止火、使先聖改制立憲之統已受命之經、終爲歷代民賊輩所利用而止。此乃二千年儒者受病之源也。〔東儒之受病、比中尤甚。報界之痛斥儒毒、可謂切中其病、而不察先聖之志則抑惑矣。…如達春秋之義、悟先聖之心法、大興尊周專制者不類、則此等小節、當隨手而解矣。〕

〔公羊學派の儒教觀〕

南海を師承する此説、頗るスペキュラチブにして所謂『春秋』の大義微旨、士人の未だ窺得さりし所を啓くの概あり。公羊學派の得意の擅場に屬すと雖、孔子か自ら素王を以て居り、位を得ずして天子の權を行ひ、改制受命の義を行ふと云ふは、『中庸』の所説とも矛盾し、温良恭謙〔『論語』學而〕、(中庸を守り)苟も己甚を爲さざる〔『孟子』離婁下〕孔子の人格に照して之を肯定すること能はず。公羊其人等の孔子崇尊、極られる所、一種の(教主)理想觀と觀さるへからず。

又「禮運」大同思想は、古來儒家に於て取らざる所、恐らく道家の人、孔子を假りて其の政治的理想を述へたるものなるへし。孔子の平居、堯舜を祖述し文武を憲章し、其の政治的理想の世及君を上代におくを以て、遠き未來三世の後に始めて~~士~~理想の世來となすは不合なり。又孔子は、聖人の初代を以て徳ありて君に功ある者となし、其學説の中心に於て君と民を治者と被治者とを~~鑿~~立つ。其の國境なく君なく政府なき世を想像せんことは亦不合なり。寧ろ是れ、無欲無智虛無世界を理想とする道家の思想の一

個發展と視る方、合理的なり。況んや、萬國無比の國體を立て國君一體君民一家と立る日本に儒教を行はんとするに當つては。是の如き儒教觀は、到底成立を許すへからざるなり。

〔儒教根源、神道〕

次に儒教を以て宗教となし、孔子を以て教主となす。彼の齋藤総督に上書~~す~~(せ)る筈中にも屢々是意を述へて、儒教を宗教とし孔子を教主となさずんば、儒教と孔子の權威崇尊、滅びんと云ふ。白雲は『易』觀象に

「觀天之神道而四時不忒、聖人以神道設教而天下服矣。」

を引用して儒教の根源、神道にありとなす。

神道と云ふは、天地の大生大成、即化育妙用に~~シテ~~、説卦に「神也者妙萬物而爲言者也」と云ひ、又係辭に「陰陽不測之謂神」と云ふもの即是なり。而~~シテ~~此の天地大化の妙用の根本たる神なるものは、人に在りては(理氣を兼ねる)心の妙用に當る。

是の点、白雲の心性觀は、宋儒と大差なし。心の妙用は天神地の神に合し、之を盡して完うすれば、即所謂窮理盡性、天と一體たるへし。盡心の法は下學而上達にあり、日常倫彝の實踐より進みて仁義禮智、遂に云爲(行)動、常に天と一致するに至るに在り。『儒教復原論』に「孔子之所謂入神者、從此心、精研義理而入以至盡神窮神。神不外心、動必以天。如此而生、如此而死。何往而非天堂、何往而非極樂。」〔第9章儒教希望④答〕

畢竟儒教の宗旨、天に對する信仰にありて、其天は即神妙~~不可思議~~完全、宇宙の唯一主宰の實在なるか故に、孔子は未來世を説かずと雖、儒教に於て得道せる者は、現世に在りて天と一致す。天は過・現・未を貫く不變不滅の實在なるか故に、其死は天地の神化に歸するに外ならず。勿論死後猶靈魂あり苦樂の果報ありとは謂はざるも、決して死は苦痛にあらず、死後亦平

和なりと觀るを得へし。是れ、孔子の「朝聞道夕死亦可」と言ふ所。白雲、更に語を続けて曰く

「人能修養其心、使知氣日明則漸進於神矣。入神者、即感而遂通之謂也。天人感通、樂不可極、遯世無悶、夕死亦可。如此者、生而心與天地參、死而神與造化遊。此之謂天堂極樂、不亦可乎。若舍此而尋極樂於四十億土之外、訪天堂於冷大邑碧玉垣之内、則吾恐後〔死〕者或望之迷方矣。」

〔第9章儒教希望⑤答〕

白雲の儒教の宗教觀は正し。若し彼か儒教の修養方面及解經方面にのみ分限を守りて、其の漠然と沔捕捉すへからさるか如き「(舜)黃帝 東方出生説」、「帝俊檀君説」の如きもの及經綸論を出さゝれば、學術更に純粹に沔、其人物亦大に敬すへき者あるならん。

惜むへし。其の奇僻なる性格は、其の興味を脱線的方面に進めしめて、彼に接する者をして彼の常識を疑しめ、施いて其の(研)經の造詣(文章の所得)さへ輕蔑せんとするに至らしめしや。⁶

〔五〕 丁茶山

〔一 事蹟〕 (20)

〔南人の學脈〕

肅宗甲戌年、官界復た一轉回をなし、老論勝ちて南人敗績してより南人、最後の運命決定し、爾來復た往年の勢を得るに至らず。故に南人の家に生れし秀才(子弟)は、其の文學儒學乃至政治經濟の積工と逸器(文武秀才)とを以て遂に之を事功に試むる能はず。而沔柳礪溪以來、南人は殊に經濟即經濟民の學に留意し、支那及朝鮮の經濟政治歴史的研究より現在(朝鮮)の政治的改革に迄及びて活眼達識、到底現狀維持を之れ努めて之に要する才能のみの發達練磨

に汲々たる老論派の翻々たる者とは其選を異にし、礪溪に次きて李星湖あり、次て安順菴あり。其の論する所、空論を脱し、膠柱不通の固陋を離れ、鑿々として時弊に適中す。而沔李朝政府、之を用ひず、畢竟草茅危言として終らしめたり。

李星湖に従學するには至らざりしも、其の遺著に由りて私淑し、儒學に經濟に覈然として覺る所あり。一個の主張を打建てて之を一々筆にして等身の著述を後世に残せる者にかか丁若鏞茶山あり。

茶山の學、李星湖に承けて甚多方面なり。儒學・文學・史學(地理學)經濟・政治(醫學)に亘り、終に其の知識欲の旺盛に沔、研究(的)精神に豊める天主教理に迄範圍を擴げ、爲に反對派の乘する所となりて配謫の身となり、一蹶振はず。

〔著述〕

惟ふに、朝鮮古來、所謂學者と稱する者、雲の如く輩出せるか、其の後世に遺せる著述の量的並に質的に多くして優れたるは、茶山の右に出るはあらず。彼の前後、或は量に於て彼に優る(敵する)結集をなせる者なきに非ず又寫本以て傳ふる者なきに非ず。例へは宋尤菴の『宋子大全』二三四卷朴玄石南溪集正續別集一四三卷、近代の『郭俛宇集』[165卷、續集12卷]卷ある如し。然れども是二種は後に其門弟子か師の斷簡零墨迄廣搜して摺摭し附刊せる者にして、著述として茶山の什に比すへくもあらず。

茶山の著述、儒學經學に關する者二百三十卷、政治經濟歴史地理醫藥に關する者又二百餘卷と稱せられ、而も其原稿は皆手自ら繕寫して從頭至尾、字畫嚴正、金石の如しと云ふ。外に俚歌數百篇あり、其の傷世慨俗の意を寓すと云ふ。

今本學圖書館に有する茶山著述の目録を擧ぐれば、左の如し。×

(上面: × 『周易四箋』廿四卷、『易學緒言』十三卷、『尚書古訓』六卷、『尚書知遠録』七卷、『梅

氏尚書平』九卷、『詩經講義』十五卷、『禮疑問答』三卷、『喪禮節要六卷』『喪儀節要』六卷、『喪禮外篇』六卷、『春秋攷微』三卷、『大學講義』一卷、『大學公議』三卷、『中庸自箴三卷、『論語古今註』四十卷、『論語手筈』三卷、『孟子要義』九卷、『樂書孤存』十二卷、『經世遺表』廿三卷、『牧民心書』四十八卷、『欽々心書』三十卷、『民堡議』三卷、『大韓疆域攷』九卷、『朝鮮水經』十五卷、『編註廣孝論』一、『小學枝言』一、『小學珠串』三卷、『心經密驗』一、『風水集議』三卷、『雅言覺非』三十卷、外に詩文集)

〔家系、星湖私淑、出仕〕

丁若鏞の傳は(事蹟◎上面:◎は『俟菴年譜』に最も詳細なるも余は未見⁷なり)其精詳なること(先年)李昇圭の『丁若鏞傳』を推す。此に據りて大畧を記す(著す。年譜と稱すものなること)×(上面:×但し中に事實の信憑し難きあり。例へば、正祖乙卯七月廿六日、茶山は金井察訪に貶せられしは、『實録』(及『詩集』)に明記する所なるに、『傳』には谷山府使に謫せらるるとなす(し)、(又正宗の薨去庚申六月廿八日を八月となす)か如し)

字は美庸、茶山と號し又一に東園(俟菴又籀翁又鍊馬山樵)と號す。押海の人、牧使載遠の子なり。押海丁氏は南人の名家に屬す。彼の丁範祖海左亦同族なり(父に當る。×左脇:×母は尹氏、海南尹孤山の後也。孤山の曾孫尹斗緒は彼の外曾祖に當る)。茶山の兄弟四人若鉉、若銓、若鍾、彼は季なり。三兄亦皆才學あり、若鉉は進士、若銓は文科及第、官佐郎に止り×(上面:×文章聲聞、若鏞に下らす。純祖辛酉西教案に坐り黑山島に流され、茲に於て『茲山魚譜』の著あり。凡そ水族海草の屬を分類して説明せり。朝鮮學者の博物學的著述中、出色に屬す。)若鍾亦聰明、名あり、遂に(純祖)辛酉邪學に聯關して法に伏す。若し老論の家なりせば、四人皆宰卿相に至るべき資質を具ふ。惜むへし。茶山

の子學淵、西山と號す。亦詩文の名あり(醫術を父より傳へ名あり)、學淵の子大林、大林の嗣文燮、其子奎英、而⁷今は微々として振はず。

(現主、丁向鎮と云ふ。先年洪水に家屋田圃を流され、京城知人に流寓す。)

英祖卅八年壬午六月十六日、廣州の斗尺里に生れ、幼より穎悟出群、已に長老を驚かす。既に長して同邑の先輩李星湖の遺書を見るに及びて大に感動する所あり、常に星湖に私淑すと謂ふ。又星湖の從孫李木齋(森煥)に從遊し、木齋を先生と稱せること⁸、『與猶堂集』「西巖講學記」に見るへし。本記は、正祖十九年乙卯彼卅三歳の時十月温陽の西巖なる鳳谷寺に於て李木齋に侍して衆多の門生と共に李星湖の遺書を校し、因みに種々道學上の質疑をなせる記事なり。

正祖の七年癸卯增廣生員試に及第す。後太學に入學し、正祖の(退栗)四七論に就て諸生の意見を問ふや、東齋の諸生は皆退溪説を以て正しとなすに、彼獨り(南人の家子を以て)栗谷發(説)を主とす。正祖其の議論の公平にして俗に率かれざるを嘉す。正祖は彼の將來に期待を掛けたり。

十三年己酉殿試に魁となり、翰林を歴て修撰を拜す。壬子父憂に丁ひ官を棄てゝ廬墓す。時に正祖、將に水原に別都を築き蒐裘の處となさんとす。其の制、一に京城に依り堅緻之に過ぐる者となさんとし、茶山の經濟に明なるを知りて特使を遣して之を召し、茶山不得已出てゝ爲に起重引重の法を具陳し施行せらる。王、後、人に向て茶山の知識の爲に既に四萬緡錢を省得たりと云ふ。自是眷愛、日に隆。(彼校書廳に出仕して校書に任し、汎濫涵泳、學問文章並進む。)同副承旨、兵曹參議を超授す。皆清要職なり⁹。

正祖は元來蔡濟毅(恭)を重用せるか如く、南人をも並用せんとの意志あり、今茶山を得て將來の大用を期待せんとするなり。従て反對派の嫉憎、日夜に亦彼に集るも、已むを得ざる所。

〔蔡濟恭〕×

（上面：×肅宗甲戌南人一敗地に塗れしも、英宗は尚心して南人の心を係かんとし、南人の用ひらるゝ者亦少からず。其内、蔡濟恭樊巖は、氣概才華共に出群、夙に時派に屬し、陰に陽に（誠心）正宗の王世孫たるを保護し、以て祖孫の誼を全うするを得しむ。故に正宗即位するや、感眷特渥、遂に大臣つな（たること畧十年）なり、領議政に進み、一時南人の領袖（大）家の一支柱の任を擔當す。従て南人の才力學問ある者亦多く樊巖の傘下に羅致せられて此を依恃となす。驪州李氏一門及茶山の押海丁氏一門の如き即是。而して李氏に亦才人輩出し李家煥、李森煥×（右脇×森煥木齋は茶山の先生として敬事する所、家煥は當時の太なる才人の一人也。『文集』廿餘卷ありと傳ふるも、余は其の内僅に數十葉の一巻を寓目す。詩文十數章を収む。詩は既に幾分新體を取り、文は各體皆簡淨、其の才思の非凡なるを示す）等是也。丁氏では既に前に之を述べたり。茶山の父載遠亦實に樊巖の推挽に依りて出身せり。『與猶堂集』詩卷一「夏日挹清樓、陪睦正字祖永諸公飲」に

「臨水紅樓縱目初、綠波如帶繞王居。湖漕舊貢長腰米、浦市新餘縮項魚。帥府練兵須宰相〔訓鍊都監、乃柳文忠所設。樓屬別營〕、倉曹辟屬賴尚書。時家君爲蔡公所辟。（憑欄）小醉何傷禮、知故城南盡喫蔬。」

→追加文の左→とありて證す。

然るに當時蔡樊巖に對しては二派の反對黨あり。其一は老論の多數を占むる僻派にして、其二は同じく南人中に彼を喜はさる一派なり。沈煥之、金觀柱、權裕、金達淳等は前者の魁、洪義浩、睦萬中等後者の棟梁なり。彼等と常に虎視眈々として樊巖を排擠する機會を覘ふ。而して樊巖派の秀南人の秀才は其頭腦の優れ、知識欲研究心の熾なると、又居常、現状打破、局面打開を夢寐するか爲、新知識を求むるとの爲に→下面左脇→皆率ゐて天主教に興味を起し、其書を

耽讀し往々之を信するに迄進まんとなす。是事、正に樊巖打倒の絶好機なり。

西教×→次頁上面：×案、斯くして朝廷の大論案となる。而して正祖在位し樊巖用ひらるゝ間は、反對派の策動も大に成功する能はさりしか、樊巖正祖廿三年己未死し翌年正祖亦薨するに至りて、遂に僻派と反蔡南人派の陰謀図成し（垂簾）英宗繼妃と内外相應して西教斥邪の教獄となり、幾多の生靈殉教し、茶山一家亦此の禍中に没し沈む。

詳細は李能和〔1869～1943〕氏『朝鮮〔基督〕教〔及外交〕史』（1928年刊）及李晩采『關衛編』（1931年刊）を參見すへし。但し『朝鮮〕基督教〔及外交〕史』は南人の李能和氏の編にして茶山に尤同情と尊敬とを拂ふ者の筆に係り、『關衛編』は茶山の實に西教に浸染せり、大に排斥せざるへからずとなす立場より編せらる。是れ、看者の預め注意せざるへからざる所なり。

〔正祖の優眷〕

乙卯、彼か正宗の優眷を得て承上り要職に在りて如何に華やかなる生活をなせるか。『詩集』卷二「奉和聖製內苑賞花竝序」の

「駕自華城回、至三月、臣在奎瀛府、撰整理通攷。上御春塘、召閣臣十餘人蔡濟恭、徐有隣、李晩秀、尹行恁等及撰書諸臣李益運、洪仁浩等、皆乘內廐馬扈從。至石渠門、下馬賞花。既又至芙蓉亭釣魚、亦以志喜也。

上清花木關池臺、綺席金盤曲宴開。微臣幸與長纓飲、塵刹何由報此杯。」

又「奉和聖製夜登芙蓉亭小樓。復申甲寅詩。令與舟中嶼中人分韻口呼」の

「蓮葉輕浮太乙船、仙官總在鏡中天。珠徽度曲迷春水、銀燭成行透夕煙。千樹花枝承委佩、三山翠蓋壓芳筵。盈盈法醞猶餘醉、乘月歸來御柳邊。」

→次頁下左脇→『俟菴年譜』甲寅十二月條によれば、正祖は彼を行くへ内閣に入れんと計畫せ

るか如し。内閣は當時、清榮第一の顯職、老論派は以て其派の獨占となさんとする所、此に至りて益々彼の排擠の陰謀に苦心するも宜也。）

〔反對派の攻撃：西教案〕

偶に十九年乙卯、清人周文謨、蘇州より來りて秘かに天主教を布き、國人信する者日に衆し。

（上面：兩班の西教に投する者は皆南人、其心中怨國于失志の憾、此に現れ、時勢に反抗せんとする也。）遂に朝廷の問題となり、邪學の名目の下、其の弘布を禁遏するに至る。而して彼亦西學に浸染すと云ふ説、反對派に由りて流傳せらる。正祖、遂に已むを得ずして彼を（金井察訪に外補す。既にシテ（其年末〔詩卷二、伏聞内移有命、晚發離金井驛十二月廿三日〕）復た承旨を以て召さる。◎次々頁上面：◎然れども西教案と云ふ好迫擊武器を獲得せる反對派は、常に此を毒用するを怠らず、茶山の正祖の眷顧渥きに從て、其の西教に染まれるを言ふ、亦喧々たり。

茶山、終に正祖廿一年丁巳六月上疏して其の過去と現在との心事を疏明して自責し、貶鷲の命を乞ふ。要は、弱冠の頃、當時風習に倣て西學の書を読み、以て異聞を博めんとせるも功令の業に勤め、仕官するに至りては未嘗て復た心を此に用ふることなく、畢竟其の教學の到底朝鮮に行はるへからざるを信す。

「辛亥之變、不幸近出謂與持忠爲内外從〔尹持忠信教捨祠版〕。臣自茲而來、憤恚傷痛、誓心盟志。疾之如私仇、討之如凶逆。良心既復、見理自明。前日之所業、嘗欣慕者、反而思之、無一非荒唐恠妄。其所謂死生之説、佛氏之設怖令也、其所謂克伐之誠、道家之伏慾火也。」

是の自貶の疏に對シ、正宗は批答シテ曰く「善端之萌、如春嘘物茁。滿詆自列、言足感聽。爾其勿辭察職。」

以て君臣相信孚の情を見るへし。然るに反對派は此を以て大に不滿となし、右相李秉模〔僻派〕は奏言シ

「若鏞、若欲自首、則疏語必樸直無華、流出片々赤心、然後方見其直心改悔。而今乃以千言萬語、專事修飾。其所自謂改悔處、不過曰釋褐以後、何能游心方外而已、殊無一字痛切。」

斯くて正宗も朝鮮の空氣、茶山に利ならざるを見、未幾に谷山府使に調す。）西北（海）の寒邑谷山府使に轉せしむ。彼、此に在ること三年惠政、民瘼を除き民利を興し、惠政闔境に行渡りて民、之を愛すること父母の如く、之を敬すること神明の如くし、其の三月密旨を以て本職を以て黃海道按察使を兼帶せしめて監司守令の臧否を糾察せしむ。幾ならざる（己未四月）に刑曹參議を以て召還せらる（然れども時樊巖既に物故し反對派の）。時に亢旱に値ひ、訟獄山積。彼、令を受けてより（審理、神の如く）剖決、流るゝ如し。正祖の眷注、益々厚く入侍の夜分に至ること屢次なり。是に至りて悦さる者、益々之を忌み機會を伺ふ。于時樊巖既に物故し、反對派の陰謀益密（彈劾頻にシテ）、茶山、其職に安する能はず、彼の折角の召還の悦も束の間にして辭表を呈するに至る。

「遭臺參陳疏乞解日書懷」〔詩文集第三卷〕

「天地徘徊欲白頭、烏臺彈簡意悠々。三年去作山氓喜、一夜來添世道憂。久恨蘇張食相印、已從苕霅買漁舟。綠蕒紅蓼滄涼地、深信鳧鷗不我謀。」

翌年四月には京城を辭して郷に還り六月初旬復た京に入る、六月十二日夜、突然正宗王の直使、彼の（舊莊の）門を叩きて王の懇旨を傳へり。又『漢書選』十卷件を附す。『詩集』卷四に

六月十二日蒙賜漢書恭述思念並序

「是日夜、月色清澈。竹欄獨坐、忽有叩門者、視之閣吏也。手持漢書選十卷、因傳玉音云、鑄字所今既移設時奎瀛府爲春坊、壁圻未乾。俟少間入來、復爲予校書直宿如前日也。今降漢書選十卷〔イ件〕、宜書其題目、五卷〔イ件〕還納之、五卷〔イ件〕留爲傳家之物、可也。恩言

縷縷、眷念深重。蓋余自遭彈以來、蟄伏已周歲、故有此記響之眷也。厥明日不豫、至二十八日陟遐。即此漢書選十卷、乃君臣永訣之贈物也。抱書號泣、追錄當日之詩。

東出茗溪學捕魚、綠綈恩召到田廬。已移青瑣開唐館、別裹緇緘降漢書。聖主應嫌棄菅蒯、此生何忍憶樵漁。長拋李泌歸山計、妻子西來又奠居。」

斯くて卒哭日（盡室）茗川に歸るや、詠汙曰く「青門曉色雪飛飛、鳴馬悲鳴欲底歸。天宇今朝瞻廓落、玉音前夜夢依依。舊懷乞骨投田圃、不奈回頭戀禁圍。縱有長竿與小艇、何心閒適出漁磯。」

正祖昇遐より彼の希望ある生涯は此に閉つ。

〔西教獄、流配〕

既にして趙鎮華なる者（老論）僻派の魁沈煥之、主動となりて言官を指嗾して李家煥、丁若鍾輩、陰に西教を主として不軌を圖ると上變せしめ、純祖元年辛酉二月金（丁）若鍾、（若銓）、若鏞、李家煥、李承薰、李基讓、權哲身皆獄に下され、判官、死刑を以て論す。而して彼は鞫庭に於て「有臣不可以欺君、弟不可以證（兄）」の名句を吐き、又若鍾の家宅搜索に由りて押送せる（西教徒の）文書中に「勿令汝弟知之」と云ふあり、又若鍾の自書の文蹟中に「不能與兄弟同學、莫非己罪」と云ふあり。是等は皆彼か現在及過去、西教に心より浸染せる者に非ざる證據とせられ、死一等を減して長髻に謫され、次て（十月廿日又逮せられ、◎左脇：◎廿七日入獄、十一月五日若銓は×上面：×康津より黒山島移配せらる。）

康津縣に變更せらる初め康津に至りて民吏皆拒みて居を貸さず。城東一餅媪、憐みて之を受く。陋室、斗の如く纔に一榻を容れ、地亦低湫喧騒、到底常人の堪得さる所。彼、此に在ること八年、謹嚴自ら持し、只日夕著作に従事す。

是間の情懷は、彼の『詩集』に就て伺ふへし。「客中書懷」〔詩文集第四卷〕

「北風吹我如飛雪、南抵康津賣飯家。幸有殘山遮海色、好將叢竹作年華。衣緣地瘴冬還減、酒爲愁多夜更加。一事纔能消客慮、山茶已吐臘前花。」

彼も當初數年間は、日に夜に放宥令の來るを待ちしか、其の七八年に（なるに）至るにりては全く絶望し、（又朝廷の戒警の弛→左脇→も緩みて行動の自由を許され、遂に）此に終年せんとするに至れり。

乙丑春には偶然、當時湖南名僧（華嚴楞嚴に通曉し）卅歳に於千人の師となり、開堂阜皮¹⁰に坐せる惠藏師と相知るに至り、往來唱和、絶えず。藏公、屢彼に茶を送り名勝を案内し、謫裡の寂寞を慰せり。茶山に先^{これに先んじて}之僧に二友あり、青波慧苑及蓮譚有一、是也。今又慧藏を得。茶山の「憶昔行寄惠藏」〔詩文集第五卷〕に

「上與二公成三人、成我晚交如膠漆。」

丙寅の初と思はるゝ彼の兒學穉（淵）來る。從此彼に侍せる（此彼に侍仕し、又彼に學ぶ）か如し。「學穉（淵）來、携至寶恩山房有作」〔詩文集第五卷〕の長篇は此を詠せるなり。中に彼謫後の洌水の彼家の生理を述ふるあり。

「黽勉作言笑、漸及園圃思。茅¹¹〔芋？〕栗歲有增、漆林日已滋。菘芥種幾畦、葫蒜宜不宜。今年蒔葫蒜、葫蒜大如梨。山市粥葫蒜、以茲充行資。悽切復悽切、且置起他辭。」

思ふに、主人なき後の夫人、經理に才能あり、拮据、育兒と主人への送資に乏しきを訴へしめさりしなり。故に茶山、謫地に在りて閱讀すべき充分の書籍を備ふるを得て、其の大著を卒業するを得しなり。

〔茶山〕

既に在謫八年（戊辰）夏三月十六日、康津の（郊外なる）士人尹文學の茶山書屋に遊ぶ。彼の遠外戚、尹鍾河字公潤〔茶山の曾外祖は公潤の高祖父たり〕、靜養して此に在るなり、或は公潤は書屋主人と同族なるか。彼、此に信宿して

其の景致、大に意に協ひ、遂に滞在旬日を越え、漸く此に終焉の志を起す。二篇¹²を作りて公淵に示す。

「幽栖不定逐煙霞、況乃茶山滿谷茶。天遠汀洲時有帆、春深院落自多花。鮮々鰕菜堪調病、艸々池臺好作家。適意^{なるも}更^に愁^ふ、微分^{しく}濫^{なるを}、茲游莫向北人誇。

林僻山深臥起遲、冥栖幽賞勝喧卑。潮如春色來還去、花似朝權盛即衰。閒把宋詩謀手選、靜將周易託心期。只饒一事堪惆悵、不種芙蓉碧滿池。」

茶山書房(屋)¹³に移住後の彼の生活は頗る適意なるに至れり。而して逐年開墾して菜園を作り食菜に乏しからず。「茶山八景詞」、「茶山花史廿首」〔詩文集第五卷〕は皆此屋の勝概を詠せるもの。

(上面：一説に彼の號茶山は、大菴寺に山茶多く、彼、此處を愛して屢來遊し、遂に以て號となす。故茶山は山の茶山なり椿なり茶に非すと。是れ、恐らく然らず。何となれば、茶山書屋は彼の此に移居する前、尹氏の別業として既に茶山書屋と名けられたり。而して其の茶の眞の茶なることは、『詩集』卷五「茶山花史廿首」の内に椿は油茶と稱して一絶あり、又茶は別に又一絶あり。且又『雅言覺非』にも山茶と茶とを別に記し、其の山茶の章に「余在康津、於茶山之中多栽山茶」と謂て、彼か茶山書屋の主人となりし後に、山茶を此に多く栽培せしを記す。茶山に茶樹の多かりしは「茶山花史廿首」に茶を詠して「此葉些々放白花、墻頭虎掌始舒芽。山家種藥無多品、爲有山中萬樹茶。」と云ふに證すへし。)

彼の兒亦屢來りて彼に侍す。是に至りて心安定し、著工愈進む。

「寄惺叟三十韻」〔詩文集第五卷〕に曰く
「七年居城邑、悒々鎖樊籠。邇來徙茶山、所願粗能充。蕭然小茅屋、乃在松樹叢。細石疏清泉、密藤披群蒙。栽花與蒔菜、晨夕課小僮。研幾賴僻遠、塞兌兼閑聰。微茫象象旨、積力見昭融。」

彼畢生の大事業となせる『周易』の研究、漸く進めるを見る。故に(翌々)庚午の「元日書

懷」〔詩文集第五卷〕では

「茲丘可終老、何必丐還鄉。」

と云へり。×(上面：×『俟菴年譜』四十七歳春徙居茶山に曰く

「茶山、在康津郡南、萬德寺西、處士尹博之山亭也。公既徙茶山、築室穿池、列植花木、引水爲飛瀑。治東西二菴、藏書千餘卷、著書以自誤、石彫刻丁石二字以識之。於是、教諸生以推移爻變之學、々既通、又將易旨相與問難、作茶山問答一卷。又有茶山諸生贈言。」

以て彼か謫裡とは(云へ)格別の拘束も監視も受くることなく、優悠として灌園植花、觀るに書あり、教ふるに子弟あり、而して工夫を著述に費やすに充分の日月ありしを證す。)

〔賜環歸郷〕

歲月急逝、茶山の康津に謫せられて十九年。(屢次彼の爲に放宥を言ふ朝臣もあり、△(上面：△又十年庚午彼四十九歳九月には長子學淵、金を撃ちて強訴したれども、亦恩命に接するに至らず、純祖十八年戊寅彼五十七歳。)彼康津を以て故郷となし、既に賜環の望も絶つ。

偶々一日、彼の故舊金履素(左相、號庸菴)其の謫地南徼より宥されて還京の途次、久振にて彼を茶山書屋に訪ひ、其の鬚髮既に皓たるを見て執手泫然。別に臨みて一言を請ひ、茶山其携ふる所の扇に近體律一首を書して贈る。

金履素は安東金氏、時の勢道金祖淳の同族なり。一日、此扇を袖にして祖淳を訪ふ。祖淳、諦視久しうして驚て曰く此美庸の詩に非ずやと。南望愀然たり。乃駕を促して入闕上奏し、即時宥を蒙る。金祖淳は老論に籍すれども、其時論派なるに於て茶山と同班(類)なり。(其詩を見て)感凄を起すも所以なきに非ず。×

(上面：×是れ李『丁茶山先生傳』〔카톨릭青年〕の記す所なり。『年譜』には是事を記さず、反りて李泰淳の上疏に因りて宥命發せらるるとなす。然れども恐らく『茶山傳』の記事は實を傳へたる

なるへし。右：茶山六十一歳「自撰墳銘」〔自撰墓誌銘集中本『文集』16巻〕に曰く

「庚午秋某之子學淵鳴金、刑曹判書金啓沃請上裁、命逐郷里。甲戌夏停啓。戊寅夏應教李泰淳上疏言、臺啓停而府關不發、此國朝以來所未有者、流弊將無窮。相臣南公輒咎禁府諸臣、判義禁金義淳乃發關。某得還郷里、即嘉慶戊寅九月之望日也。」

金義淳亦祖淳の同族なり。其の敢て李泰淳の上疏を取次けるは、其の原と祖淳の暗指あるに因るなるへし。）

是時の彼の父兄黨族皆寒落し盡し、惟た伯兄若鉉尚存す。是より復た意を世事に留めず、伯兄に事ふること嚴父に事ふるか如く（一意鉛槧に従事し、違あれば）葛巾野服、山水間に逍遙す。△

〔醫術〕

（上面：△六十二歳の時、承旨の擬望（薦）に入りしも任官せず。六十九歳（庚寅）五月五日、翼宗の疾沈重せるに、特に藥院の請に依りて副護軍に叙せられて入闕診候し試薬煎進し、七十三歳甲午十一月、純祖の危篤に陥るや、復た醫術を以て召されしか、其の宮門に入るや王既に薨す。）憲宗二年二月廿二日を以て歿す。享年七十五。

李能和氏著『朝鮮基督教史』第三章朝鮮學對西洋學術之思想に、李圭景の『五洲衍文〔長箋散稿〕』を引きて茶山か牛乳種痘方を傳へて畧種痘の法を知れりと云ひ、又彼か康津より宥されて（放）還後、其の醫藥に精妙なるか故に特に醫藥同參の職に差せられ、（翼宗純祖◎上面：◎危篤に陥るや、特召を受けて進薬せしめらし、）又彼の子西山學淵は其の醫術を繼きて、醫學を以て闔國、名ありと。茶山の博學多藝、驚くべきなり。×

〔士類生活〕

（上面：×茶山は其の謫配十八年に亘りて能く

生理に窘塞を訴へず、優悠として著述篋越に従事するを得しは前述の如し。是れ彼の夫人乃至子女の治産の才能に據るべきも、又茶山其人の指導に俟つなるへし。

茶山は常に國家の經濟に留意すると共に士類一家の經濟にも攻究を怠らず。如何にして士類として官を離れ、落郷して尚能く拔雜迫下の卑事をなさずして生理を營み得べきかを工夫し、終に養蠶の一事、最利なるを發見し、謫中之を實驗し、屢次故舊家人に贈言して之を勧誘せり。『與猶堂文集』〔第十八巻〕贈言家誠の部に収めらる「爲尹惠冠贈言」に曰く

「貧士慮營産業、勢也。然耕作力倦、商販名敗。唯手治園圃、種珍果芳蔬。雖王戎鑽李雲卿、粥瓜、無傷也。須有名花奇竹以文其織齋、亦知謀也。每春雨初霽、持小鋤長鑿、斷礮鋤蒿菜、整溝畛別種類、播之時之。歸爲小詩數十篇、傲石湖遺韻。復種荊桑魯桑、須至數千株。別構蠶室三間、爲箔七層、令室妻勤養之。行之數年、米鹽醢醢之具、當不煩夫子也。」

尹輪卿の爲の贈言（『文集』十八巻）にも亦同様の事を云ひ、當に麥田に比沔其利十倍なるへしと云ふ。又生理原則として懶妻を大忌となすと云ふ。

又示學淵家誠〔◎家誠：庚午仲春書于茶山東菴〕にも是意を絮説して曰く◎右脇：◎

「謀生之術、晝思夜度、莫善於種桑。始知孔明之智、果無上也。賣果本是清名、猶近商賈。若桑不失儒者之名、而抵大估之利、天下復有此事哉。南中有種桑三百六十五株者、歲得錢三百六十五串。暮三百六十五日、每用一串爲糧、終身不匱、遂以令名終。此事最堪師學。其次爲蠶室三間、爲箔七層、共養蠶二十一間、令婦女無至游食。亦佳法也。今年樞熟、汝其毋忽。」

是れ、庚午仲春茶山にての所書なり。是等の書は當時朝鮮の士庶の生活を知るに好資料なりと謂ふへし。亦實に朝鮮士類生活の如何に簡素

なるあり證となすへし。)

〔西教浸染か否か〕

最後茶山^四は(眞に)西教^五に浸染するに至れるや否やを觀んと欲す。

正祖の(七年)癸卯冬、書狀官李東郁の子承薰、父に隨て燕京に入り、天主堂に於て天主教書西學書數十種を得て還る。李家煥は承薰の甥姪、金^六丁若鏞は妹婿なり。乙巳の春に至りて承薰、家煥、若鏞兄弟三人等、密に相集まりて西學書を研究す。彼等皆進士なり。表面、科文を習ふと稱して、陰に西學を講す。但し此西學なる者は獨り天主教のみならず、西洋の新科學に屬する天文地理(曆學)數學をも包含す。是れ、李星湖か「跋天主教義」に利瑪竇を贊して

「上距一千有六百有三年[自耶蘇]而瑪竇至中國。其朋友皆高準碧瞳、方巾青袍。初守童身、不曾有婚。朝廷官之不拜、惟日給不官之俸。習中國語、讀中國書、至有著書數十種。其俯仰觀察、推筭授時之妙、中國未始有也。彼絕域外臣、越溟海而與學士大夫遊。學士大夫莫不斂衽崇奉稱先生而不敢抗、其亦豪傑之士也。」『星湖先生全集』55卷「題跋」

と云へるか如く、星湖も深く西學の(物理)科學に深^七く(精到し)、到底支那東洋の古來の知識の匹敵すへきに非ざるを知れるなり。

されは、茶山の如き年少氣鋭、知識欲に燃ゆ、あらゆる當代の知識を吸収して以て他日大成の基となさんと願ふる者等は、是の新輸入の西學を黙過すること能はざるは當然なり。是れ、彼か後年正直に告白する所。前引正宗廿一年丁巳六月、彼か彈奏に逢ひて自引せる疏に曰く

「臣於所謂西洋邪說、嘗觀其書矣。〔然觀書、豈遽罪哉。辭不迫切。謂之觀書、苟唯觀書而止、則豈遽罪哉。蓋〕嘗心欣然悅慕矣、〔蓋〕嘗舉而誇張人矣。其於本源心術之地、蓋嘗如膏漬水染矣、根枝繁而不自覺矣。夫豈一番如是。此即孟門之墨者也、程門之禪派也。大質虧矣、本領誤矣。其沈惑之

淺深、遷改之遲速、有不足論。雖然曾子曰吾得正而斃焉、斯已矣。臣亦欲得正而斃矣、可不一言以自暴乎。臣之得見是書、蓋在弱冠之初、而此時原有一種風氣、有能說天文曆象之家、農政水利之器、測量推驗之法者、流俗相傳、指爲該洽。臣方幼眇、竊獨慕此。」

是れ、彼の衷情よりの辭なること、彼と正祖との關係に觀て疑ふへからず。×

(上面: ×少北申宅權の『樗菴漫稿』の内「從弟金獻納聖疇行錄補遺」に亦當時天主教と少壯朝鮮學人の關係を述へて

「西洋國所謂天主教云者、自宣廟朝以後、已有其說。而使价赴燕之時、或有與彼人相遇而話及者、迄未聞崇信其法者。近年以來、赴燕之使得其書而來、轉相傳播、士子之聰明修潔者、率多尊崇、而酷信者奔波傳染、莫可禁止焉。君著書論列、明辨而斥之以爲異端之害甚於夷狄禽獸。彼天主教爲名者、傷敗五倫、汨亂五行、以人之父列於第三件、以木與土黜於一五行。此其法悖於堯禹、豈可爲教於世、使一世之人化爲異物也哉。佛法本は無父無君、而西學之害甚於佛法。夷狄猶是人類、若崇此教則終爲禽獸而復已。豈不傷痛矣乎。涓々而至於漫漫則朝家必嚴禁、而鋤治之後必有罹其禍者。君歿後不滿十年、西學之禍果作、名家子弟、至有連被極刑者。君之先見、至此益驗、何其神也。」

少北亦此言あり、以て茶山の言の左券となすへし。)

是事、彼か長鬢に謫せられし辛酉年四十歳(謫裡に)製せる「自笑」[詩文集第四卷]の詩にも亦謂て曰く

「迷茫義路與仁^八(居)、求道彷徨弱冠初。妄要盡知天下事、遂思窮覽域中書。」

前後言ふ所、全く相同し。又康津に謫せられし三年目、甲子に「憂來十二章」「遣憂十二章」[詩文集第五卷]を製す。「遣憂」に亦此の衷情を述ふ。

「盡茹天下書、竟欲吐周易。天欲破其慳、賜我三年謫。」

是等、眞情の詩にして信すへくんは、彼の早歳西學に浸染し好みて同志と其書を講究せるは、~~勿論~~（主として）好新好奇の青年學徒の心理に據るもとて（基くものにして）必しも其教理の儒佛の未言はさる所を言ひて、其の宗教内意識の充足を與ふるか爲とは觀るへからさるか如し。少なくとも後年、彼は其の（責むべき幾多）經典の解釋に就て見るへきか如く、純眞なる儒教を顯明し、自ら孔子の直徒たるを以て居るか如きより、到底一點（内心）異教を信する内心異教に嚮ふ信心ある者とは視做すへからず。但し

且又當時、判官の皆反對派の人たるを以て、證據の捜査（の周到）尋問の嚴烈なる、想像の外なるか故に多少にても彼に疑ふべき物的及心的憑據あれば、決して彼を死罪より赦すことなかるへし。

但し縱令、彼は當時（眞實）西教の信徒たらさらしとするも、彼家は伯兄若鍾の明に西教に染まれるあるか如く、恐らく私に西天主教の家となるに至れるなるへし。其は後、信教の禁、解かるゝに至りて彼の子孫の天主教を奉せるとして以て現今に至るに見るへし。

（上面：昭和十一年四月號『가톨릭青年』は茶山（逝世）百年紀念欄を設け、先つ「丁茶山小傳」を掲げ、正祖八年甲辰彼廿三歳、李檠號曠菴[요안]に天主教々理を聽き兄若全と共に入教すと云へり。是れ何の記録に據るか詳ならず。又本號には茶山を以て天主教信者なりと斷定して、彼の長年竄謫を觀るに殉教的苦難を以てす。以て一派に偏する説となさるへからず。）

二 茶山の經學（8）

茶山謫居、十有九年。（年と共に）漸く賜環の希望も絶ゆ。又茶山書屋の境、彼の研究鉛槧に適するあり、遂に全く意を世利より脱して専ら一生の功名利福の心を擧げて著述に傾注き、此

に不朽の事業を遺さんと欲するに至れり。是意、彼の家書に頻述せらる。

嘉慶戊辰中夏〔與猶翁翁書于茶山精舍〕「示二子家誠」〔詩文集第十八卷〕に曰く

「余嘗謂趙括非不肖子。括能讀其父書傳、不既賢乎。余蒙被國恩、獲全一縷、窮居累歲、著述遂富。獨恨汝曹不在側、微言妙義、尠有傳聞。文理未暢、嗜好不入。強說一二、猶夫秦孝公之間帝道、尚有何意。吾子如此、千載難俟、巾衍之藏、其能抵後世之子雲否。吾死之後、雖潔其牲薦、豐其殽載、以祭以祀。吾之歆悅、不如讀吾書一編。鈔吾書一章、汝曹尚宜鑄記。」

×（上面：×「千載難俟」と云ふもの、彼の號俟菴の由來する所か。志哀むへし。後の子雲を俟つの意か。）

尚、嘉慶庚午菊秋〔書于茶山東庵〕「示二（子）家誠」に曰く

「君子著書傳世、唯求一人之知、不避舉世之噴。如有知我書者、若其年長、汝等父事之。倘與爲敵、汝等結爲昆弟、亦可也。」

如何に彼か其著書に生涯の全價値をおけるか見るへし。

〔研經の態度〕

茶山は、等身の著述中、自ら以て第一に心力を注ぎしとなすは、經（書）解にして、之に次くは經濟說なり。詩文に至りては、甚た以て自ら多く期待せず。故に彼四十七歳春茶山に移りて著作三昧の生活に入らんとするや、（其）夏「〔示二子〕家誠」に曰く

「大較著書之法、經籍爲宗、其次經世澤民之學。若關防器用之制、有可以禦外侮者、亦不可少也。若夫瑣細零星之說、苟取一時之詼笑、與夫陳腐不新之談・支離無用之論、徒費紙墨。不如手植珍果佳蔬、以博生前之生理也。」

斯くて彼は六經四書に亙りて一家の説を著し、漢魏以來の古說より明清及日本儒者の説に及ぶ迄、普く（綜合）參考して以て取舍を決し自説

を立つ。其の研經の態度は全く清朝經師に則る。

是れ蓋し、李星湖以來の家法にして朝鮮在來儒者の未だ著手し得さりし所なり。(故に)彼の主張は、清朝漢學派の其と符合し、舊説を捨てず新説に囚はれず、新舊相綜校して以て訓詁を正し義理を闡發、其の方法は、考據を先と(重)して史學(派)の長を取り、以て正確實證を期す。『論語手筈』『學而不思則罔』の節に彼、此の態度を明にして曰く

「漢儒注經、以攷古爲法而明辨不足。故讖緯邪說未免俱収、此學而不思之弊也。後儒說經、以窮理爲主而考據或疎。故制度名物有時違舛、此思而不學之咎也。」

故に學ひて而して思ひ、思ひて而して又學ぶ、是れ、彼の一切著述を一貫する所の主張なり。

『易』と『禮』

彼は以爲へらく、六經四書の内、『易』と『禮』との外は、大抵既に前人の闡明を歴して復た餘蘊多からずと。仍りて心力を『易』『禮』二書に傾注す。二書に付ては其の自期自任する所、極めて大なり。戊辰四十七歳時夏〔嘉慶戊辰中夏、與猶病翁書于茶山精舍〕、家に贈れる書に曰く

「明清以來、經學多歧、各有成書、殆無遺利。然易禮二書、已見有許多開荒可驗、天惜聰明、不肯歸美于一夫也。」

就中、『易』に就ては更稿五回、戊辰冬に至りて始めて『周易四箋』廿四卷脱稿す。彼の題箋〔題戊辰本〕に曰く

「余於甲子陽復之日〔癸亥冬〕在康津謫中、始讀易。是年夏始有筮録之工、至冬而畢。凡八卷。此甲子本也。甲子本、四義雖具、粗略不完、遂毀之。厥明年改撰之。亦八卷。此乙丑本也。乙丑冬長子學淵至、偕棲寶恩山房、以前本不取兩互及交易之象、悉改之。至春而畢。凡十六卷。此丙寅本也。丙寅本於播性留動之義、多有闕誤。故又令易稿、未卒而北還。令李晴竣工。凡廿四卷。此丁卯本也。丁卯本詞理未精、象義多誤。

戊辰在茶山、令次子學游脱。亦二十四卷。此所謂戊辰本也。」

次て猶『讀(周易緒言)』『易要旨十八則』『易例比釋』『大象傳箋』『說卦傳補』の著あり。彼の兄巽菴若銓は「周易心箋序」〔?〕を撰して(大易の義始めて明なり)、其の三聖の子雲たることを賞讚す。△(上面:△『禮』の學は余、未た之に達せず、姑く之を省く)。

而して彼の大業を成せるは、實に又巽菴の奨進に因る。故に彼六十一歳時「自撰壙銘」〔自撰墓誌銘集中本〕に曰く

「始某翫易研禮、以及諸經。每一悟解、若有神明默牖、多不可告於人者。其(系)兄某在黑山海中、每一編成、見之曰、汝之所以至此者、汝不能自知也。嗚呼、道喪千載、蒙之以百蓐、披之剔之。豁其翳蒼、豈汝之所能爲哉。詩云天之牖民如墳如篲」

茶山、研究の精力、最『易』と『禮』とに注かれしと雖、彼の儒學に對する見解、儒學を修己治人の道を究め及之を實踐する學問として、其の修養原理に對して彼が朱子學、陽明學、殊に朝鮮の官學朱子學に對して(立てたる)獨自の見解を端的明瞭に發揮せるは、四書殊に『大學』と『中庸』の解に在り。是は、此二書が朱子道學を組織する二大聖典にして、朱子道學(全部)は、此二書の序文及注解、乃至此二書に關する問答の裡に包藏せらる。此を組織立つれば、乃ち(朱子學の)一體系を成すか故なり。

余が茶山を以て異學派に屬すとすも多方、此二書の彼の解釋に因るに外ならず。故に先つ(彼の)此二書の解義を擧説す。

1. 『大學』(16)

『大學』は道學入門の書。然れども其の(朱子の説く所の)深旨に至りては、能く道學の蘊奧を道破す。朱子の(是書)解釋も一生の心血を灑くと稱せらるゝ所以。(故に)朝鮮の學者、是書を究むること尤慎重なり。

茶山『大學』に關する著述は、『大學講義』及『大學公議』二種あり。前者は、乾隆己酉正宗十三年、熙政堂上御前に於て講ずる所。故に専ら朱註を主とし、猶茶山一家の解を出すに及はず、往々~~後~~に附記して今は説變れることを云ふ。『大學公議』は五十三歳に成り、既に彼の經學、別に一家を成せる時に屬す。本書に依りて彼の『大學』解を窺ふべく、今其の朱子解と殊なる所を列擧す。

一. 茶山は『古本大學』を取りて朱子『章句』を取らず。是點に於て（同南人學者先輩、尹）白湖と相合す。故に王陽明、太田錦城、荻生徂徠、~~漢~~（朝）川善菴と合す。而~~して~~彼は是等諸士中にも優れて、古本を嚴守し、凡て後世に在りて改められし字句は皆、其儘なるへしと主張す。既に『大學』の書に於て古本を取るか故に『大學』の大義に在りても朱子~~と~~に従ふ能はざるに至るは當然なり。

二. 茶山は「大學」を以て周代の國學にして、天子の子は嫡庶皆入學~~し~~（より）諸侯以下卿大夫は~~唯た其の~~（の）胄子の~~のみ~~（を）入學せしむ。大司樂の司管する所。皆他日、御家御邦、或は天下に君臨し、或は天子を輔弼し、斯民を導きて太平を致さんとする者なり。故に「大學」に於て教ふる所も、治國平天下の道に外ならず。

三. 茶山は明德を以て（抽象的）心の靈能とはなさず、『周禮』地官師氏~~の~~上面：◎に至徳・敏徳・孝徳を以て教ふとあり、又鄭玄も注~~して~~「謂在明其至徳也」と云へるか如く）日常の徳行に屬する孝弟慈の三徳に外ならずとなす。『大學』

「治國必先齊其家」の説明に
 「故君子不出家而成教於國。孝者、所以事君也。弟者、所以事長也。慈者、所以使役衆也。」
 とあるものにして、家に於て~~家~~君侯卿大夫の御家の地に在るもの、能く孝弟慈を行~~は~~（へは）其家齊~~ひて~~、而~~して~~施いて教を其國に成し、國治むこと言を俟たす。平天下・治國・齊家・修身・

正心・誠意六階の修養の内、修身以下は、是れ我か一身内部の徳を崇うする事に屬し、齊家以上は、我か身内の充實せる徳か外に發して感化を他に及ぼすなり。故~~して~~修身の極致は、必ず外に發すと肯定せらるゝか故に、治人の事業其基礎、孝弟慈三徳に歸すと視るへし。是れ、茶山か明德を以て三徳なりと斷する所以なり。

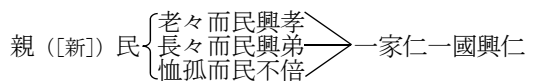
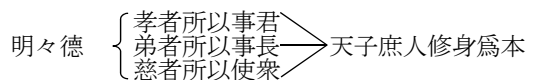
是に至りて『大學』の教、朱子の説に比較して極めて實踐の倫常的となり、空なる心性工夫に~~は~~馳すること停むに至る。明德を以て孝弟慈の三至徳なりと解するもの、茶山の外、我未た之あるを知らず。

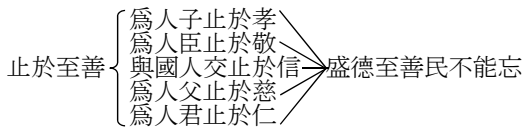
四. 「新民」と云ふより「親民」と解するを可となす。朱子は、心の本體、時に氣稟に拘せられ人欲に蔽はれて昏し、之を舊染と云ふ、故に之を新にするを新民となす。

茶山は、程朱氏本然氣質の思想を以て儒教に非ずして『楞嚴經』に出る佛教より取るとなす。況むや、「大學」の制度、八歳「小學」に入り、灑掃應對・射御書數を習ひ禮儀を~~涵~~樂に涵泳す、而~~して~~「大學」に進む彼等に舊染の汚の存する理由なしと。

五. 「止於至善」を以て人倫の至徳に至りて遷らすとなす。即人子となりては孝に止まり、人臣となりては敬に止まり、國人と交はりては信に止まり、人父となりては慈に止まり、人君となりては仁に止まるか如く、凡の人倫の外、至善なし。

斯くて彼は『大學』三綱領を以て皆人倫の説となし、之を圖示して曰く





五. 「格物致知」の章は、朱子學修養の基礎を据えし者にして、是よりして以て誠意正心(修身)以上、齊家治國に進むべき者。故に朱子は、最も之を力強く義廣く解して、先づ「格物致知」を注して

「格、至也。物猶事也。窮至事物之理、欲其極處、無不到也。」

と云ひ、更に「物格而后知至」を解して

「物格者、物理之極處、無不到也。知至者、吾心之所知、無不盡也。知既盡則意可得而實矣。意既實則心可得而正矣。」

となす。

是に朱子學の理義を主とする學問なることを明にし、物と心と共に共に理の存し、物理を究むるに従て心中の理亦従て明となり(→右脇:物理窮むること一寸なれば、心中理亦長すること一寸)。遂に天下の(重要)事物の理、漸く究め盡すを得るに至りては、一旦豁然貫通して、爾他の事物の理亦之を窮尋するを俟たずして自然に罣碍なきを得るに至り、所謂學成るの境に達すへしと云ふ。故に「格物致知」の説は、朱子學の大骨頭なり。此の解釋に依りて其人の朱子學を奉するや(將た)異學なりやを檢すべき者なり。

茶山は、固より「格物致知」の解に於て朱子の説は従はず。茶山(「致知在格物」を)解つ曰く

「致、至之也。格、量度也。極知其所先後、則致知也。度物之有本末、則格物也。」

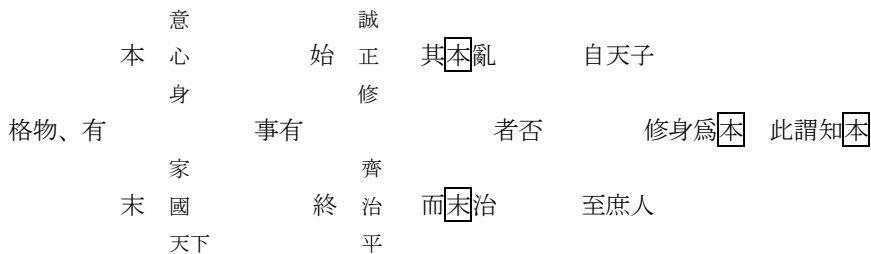
故に茶山の「格物致知」は、直に前章「物有本末、事有終始、無所先後則近道矣」を承けて、更に之を學者の側より(の心の働に就て)説明せるに外ならずとなす。何となれば、「大學」に於て教ふる所の(物)事は誠意・正心・修身・(齊家)・治國・平天下の外なきか故に、格物の物亦是の外に出るの要なく、汎く天下の物に即きて其理を知ると云ふか如きは、此に與るの要なし。寧ろ玩物喪志に導くのみとなす。

且又實踐の一段に至りては『中庸』に

「誠者、物之終始。始者成己也、終者成物也」

と云ふの始と云ふは、己を成すなり。終と云ふは、物を成すなり。故に成己は修身なり。成物は化民なり。故に(修身より治平に至る實行、)誠の外、又他の工夫あるを要せざるなり。但夫れ修身の工夫の實踐に入る前に與へられたる物事に對して深く其の本末先後終始の相互關係を熟量し審知(度)して、(而後)著手起工の認識を定め知に移らざるへからず。故に誠・正(を以て)は始事の前に於ける一段の工夫と立つ。然れども決して實踐すべき修身・齊家・治平以外の凡天下の物事に關係するにはあらず。

是に於て茶山、格致の圖を製す。



欲正者^先誠意
 欲修者^先正心
 先 欲齊者^先修身
 欲治者^先齊家
 欲平者^先治國

誠意者^先致知

致知、所

知所^{先後}則近道 此謂知之致

意誠而^后心正
 意誠而^后心正
 後 意誠而^后心正
 意誠而^后心正
 意誠而^后心正

物格而^后知至

斯くて茶山の「知止而后有定」より「物格致知」に至る迄、解釋貫通して終始し、別に「格物致知」章の存する必要全くなしとなす。

茶山「格物致知」の解釋は△（上面：△茶山か攷證の部に（徐氏『道脈敦流』を引きて）擧げしか如く、既に『王心齋語録』に同説あり張侗初、郝鹿野、晴巒居士等の解に既に同説あり、又）日本に在りても太田錦城の、朝川善菴の主張する所（にして）必しも古今獨徧の解釋とも視るへからず。

而^レ朱子學を一個の哲學體系として觀る時は、如何に彼等の反對に拘らず、其の解釋は之を枉くへきにあらす。但し朱子か格物を一切天下物事の理を窮格すとすか故に

「其本亂而未治者、否矣。其所厚者薄而其所薄者厚、未之有也。此謂知本、此謂知之至也。」の節中、「此謂知本」、「此謂知之至也」の二句を切離して「子曰聽訟」の章に移して、而^レ「此兩節、結上文兩節之意」と釋し、所謂經文なる者にまで改訂（更）を加へたるは、何としても其弱點を暴^{さら}すものとなさるへからず。

六、「所謂修身在正其心者、身（有）所忿懣則不得其正、有所恐懼則不得其正、有所好惡則不得其正、有所憂患則不得其正」の章の解に於て、朱子は、四者は皆人のなき能はさる所に^レ、一度之ありて察する能はされは心其正を失ふとな

し、是等の激情の發するに依りて心の湛然虛明、鑑空衡平を失ふものとなす。然れ^ト喜怒哀樂等感情等は、其の公情によりて發すれば、決^シ心病とならず。但た其の財色福禍の私に發する者に^レ、即其身[茶山は本節身字を以て心字の愆なりと見す]其正を失ふに至るのみ。

要するに、心の正とは、心の死灰槁木の如くなるを謂ふに非す。從て徒に靜坐看心に勤むと雖、正心を得へからず。必ず行事篤實の處より出發せさるへからず。是の處、彼の朱子學の佛學より來るを示唆する所以にして、彼の明白朱子學に對して異學に屬して而^レ自ら以て醇儒學と信する所以なり。

「忿懣等四情、不歸於不合理之物。而戒之以四有所、則槁木死灰、乃保真體。心體如是、定非活人。況真體本然之說、本出於首楞嚴。先聖論心、本無此語。總之四情、作於其心、害於其政。發於其政、害於其事、故曰身不得其正。正與不正、驗於行事、不止於真體之昏明也。真體之湛然虛明、鑑空衡平、雖亦可貴、必其行事篤實、乃保本體真。直把此物、求其空明、未有不內發心疾者。古聖人正己正物之學、朴實有據、不若是之幽虛也。」

朱子は、存心養性を以て持敬工夫の二大目と立て、常に湛然虛明、鑑空衡平の本體を存して^{ほろぼ}涙されさらんことを説くか、此の存心説、本と

『孟子』[㊦]に出て、而^レ茶山の存心解は、程朱と殊なり。此に茶山の學の積工累窮の餘に出てたるものにして、直に六經の源頭に於て其の根據をおくを證す。即茶山は(『孟子』)存心の語を以て朱子等の所謂存心即心(か他)物に奪はれて(其時)我か有とならざるの謂にはあらず、單に道心の微弱なるを強めて以て存在^い (せしめ)て其の機能を揮はしむるの義となす。

(「心不在處」の解に)曰く

「[考訂：朱子曰心若不存、一身便無主宰。心不在之解○蔡清云心奪於忿懣、不爲我有。○鑰案此存心之說也。]存心之說、起於孟子。今詳孟子所言、與先正所言、其趣不同。孟子曰人之所以異於禽獸者幾希。君子存之、小人去之。又曰操則存、舍則亡。其云存之者、謂道心微弱、故存其將亡以自別於禽獸而已、非謂心體善走、故捉留之腔子之内也。先儒看得有差、遂有靜存默存諸法。靜存默存、固亦有味、以時提掇、有補夕惕之工。但此經之心不在、必非此說。讀書心在書、發射心在射。方視、心在視。方聽、心在聽。方食、心在食。此之謂心在、非謂心在腔子之内乃可云心在也。大戴禮曰目不能兩視而明、耳不能兩聽而聰。蓋以心在此形、不能兼在彼形。心在此聲、不能兼在彼聲。故不兩察也。若有人著意點檢此心、捉住腔子中、于以視兩色聽兩聲、其不能兩察、仍與不點檢時、毫髮不差。若點檢捉住之工、更緊更密、則雖單視一物亦必不明、單聽一聲亦必不聰。何者。心在腔子内、不在其所視聽也。……易曰敬以直内。然敬者、有所向之名。無所向、亦無所敬矣。視文字而專心於字畫、則敬也。聽言語而專心於語脈、則敬也。推之萬事、莫不皆然。若收視息聽、瞑目凝神、棲心於空寂之地而命之、曰敬以直内、則所差遠矣。」

恰も朱子か禪學を斥關する所を以て、逆に朱子學の醇眞聖學に非ざることを指斥す。甚た味ありと謂ふへし。

是説、伊藤仁齋『孟子古義』告子章「孔子曰

操則存、舍則亡、出入無時、莫知其鄉、惟心之謂與」の注に

「操舍以方法而言、存亡以良心而言……違仁爲出、依仁爲入。」

又「夜氣」章にも

「此以山木之生喻人之良心、前後照應、句々比對、無復可疑者。蓋仁義之心存乎人、猶山之有草木也。放其良心者、猶斧斤之伐木也。……故孟子反復曉諭、欲使人擴充其良心、而先以枯亡爲戒也。而諸家皆解平坦之氣、作清明氣象。其說出於老莊虛無之旨、害道尤甚。」

全く茶山の説と符合す。但た茶山は程朱の説の専ら禪より出るとなすに對して、仁齋は是場合、老莊虛無の説に本つくとなすを異とす。

2. 『中庸』(22)

茶山に『中庸自箴』一冊あり、其の『中庸』研究の全體を載す。中に往々朱子説に對して獨自の解を出すものあり、外に正祖の出題に答へし「中庸策」¹⁴一篇あり(亦參攷とすへし)。

〔戒愼・恐懼、不睹・不聞〕

(先つ第一に)茶山の『中庸』解釋は、朱子に比して頗る宗教的なるを特色と觀さるへからず。是れ、茶山儒教觀の一本とも觀るを得へし。

「是故君子、戒愼(乎)其所不睹、恐懼乎其所不聞。」

朱子は以て

「是以君子之心、常存敬畏。雖不見聞、亦不敢思所以存天理之本然而不使離於須臾之頃也。」と解して、我か(未た)見聞せずして心未發の状態にある(りて而も猶敬愼を失はざる)ものとなし、所謂「養未發之中」とか、靜裡の涵養とかの意なりとなす。

是れ亦朱子學の骨髓にして人心未發、喜怒哀樂の情未た萌さず湛然と^レ鑑空衡平なる時即(に於て)本然性の體段、具現す。即天理を存して以て心、動時の正に逸せざるの素地を涵養する所以となし、此に敬の工夫(一字)、動靜を

一貫して（兼ねて）道人の生活を一貫する工夫たる所以、存す。然れども是の如き解釋、果して是れ古義なるか否かに就ては、猶多く研究の餘地、存す。

蓋し孔子迄の儒教は、頗る宗教性に富みて、孔子の認めし所の天は、明に宇宙主宰者〔絶対的）眞善美の當體〕にして、之を信し之に任す所に孔子の偉大なる聖者の生涯、開けし者なるか、朱子は、佛教思想に對して儒教の學的位地を高むる意識に由り、佛教思想を取入れて頗る儒教を觀念論的唯心論的に顧、遂に天をは理と解するに至り、天意と云ふも、人の理性道心と（其）内容を等しくするに至り、此に儒教本來の天に對する信仰頗る薄らき、彼の天を信し天に任するより來る安心立命の悠然たる境界は、之に達すること至難となれり。

天を理と解すれば（理か物の内面的條理なるか故に）、天か萬物を支配すと云ふは、單に當然必然自然と云ふ意義となりて、有意志的支配の概念は消失することとなり、此に宗教より哲學に移る。世に純粹自力宗門なる者は成立する能はざるものなるか故に、天を理と解するに至りて儒教の宗教性は極度に弱められて、儒教徒の心境に大なる變化を來すこととなり、遂に一知半解の徒は、儒教は單に社會及個人の道德を説きし者にして宗教には非すと稱し、儒教の道か（人の道に於て）宇宙の道、而も宇宙の道よりして人の道出て來り、道の本原、天に在ることを知らず、儒教の生氣、消失すること莫大なり。

茶山は、此の不睹不聞を以て、我の心未だ動かす（さるを表すと）は解せず、天の體と天の聲を形すものと解す。

「所不睹者何也、天之體也。所不聞者何也、天之聲也。何以知其然也。經曰鬼神之神爲德其盛矣乎、視之而弗見、聽之而弗聞、體物而不可遺、使天下之人齊明承祭、洋洋乎如在其上如在其左右。不睹不聞者、非天而何。民之生也、不能無

慾。循其慾而充之、放辟邪侈、無不爲已。然民不敢顯然犯之者、以戒慎也、以恐懼也。（孰戒慎也、）上有官執法也。孰恐懼也、上有寡君能誅殛之也。苟知其上無君長、其誰不爲放辟邪侈者乎。…¹⁵…君子處暗室之中、戰々栗々不敢爲惡、知其有上帝臨女也。今以命性道教、悉歸之於一理、則理本無知、亦無威能、何所戒而慎之、何所懼（畏）而懼之乎。」

×（上面：×「中庸策」にも亦

「戒懼之通貫動靜者。臣以爲、思想揣摩之間、罔非神目之所燭、造次顛沛之時、尤當此心之提警。宜乎其通貫動靜也。」

後に又、之を對越之工と謂ふ。）

更に天告天戒と道心との關係を述べて曰く「天命、不但於賦生之初、畀以此性。原來無形之體、妙用之神、以類相入、與之相感也。故天之儆告、亦不由有形之耳目、而每從無形妙用之道心、誘之誨之。此所謂天誘其衷也。順其誘而從之、奉天命者也。慢其誘而違之、逆天命者也。曷不戒慎、曷不恐懼。」

是に於て、天を恐れ獨を慎むの畢竟結局、道心の指導に循ふ生活と云ふの外、（別義）なきを闡明す。然れども道心なる者は、其の根蒂に天意と一致するし、天意の表れなることを假定するに由りて始めて、其の概念生（成立）したるものなるか故に、道心の概念は猶甚た宗教的なることを認めざる能はず。故に茶山、更に之を細説して曰く

「天之靈明、直通人心。無隱不察、無微不燭。照臨此室、日監在茲。人苟知此、雖有大膽者、不能不戒慎恐懼矣。」

次の段節

「莫見乎隱、莫顯乎微。故君子慎其獨也」

に至りて更に之を申明して曰く

「箴曰）隱微者、上天之載也。視之而不見、聽之而弗聞、豈非隱乎鬼神章。語其小則天下莫能破焉、豈非微乎費隱章。使普天之下齊明承祭、

洋々（乎）如在其上、如在其左右。莫見乎隱也鬼神章。發育萬物、使鳶飛戾天、魚躍于淵、以顯其造化之跡。莫顯乎微也費隱章。似隱而至現、故戒慎乎不覩也。似微而至顯、故恐懼乎所不聞也。若云暗處微事、是爲隱微、則暗處微事、有終身掩諱而未嘗發露者、下可以欺人、上可以欺君。小人習知其然、君子以空言怵之曰莫見乎隱、莫顯乎微。其肯信之乎。不信降監者、必無以慎其獨矣。」

正に我意を得たり是の如く天を宗教的に観て、日夜始終の照鑑を以て『中庸』を説く者、古來『中庸』解にありて余の未だ知らざる所¹⁶。或は彼か天主教に接して深く其の立つる所の天主天君の意義に感發する所ありしの思想的影響ならざるか。

兎に角儒教を斯く宗教性豊富に観るは、朝鮮儒者にありては破天荒の見識と謂はざるへからず。何となれば、天を理と観る哲學的見解を以て高尚なりと思ふ^{おもひな}か、宋儒以來の學者の普通の思想なればなり。×

（上面：×『心經密驗』周子學聖説に

「案今人欲成聖而不能者、厥有三端。一認天爲理、一認仁爲生物之理、三認庸爲平常。若慎獨以事天、強恕以求仁、又能恒久而不息、斯聖人矣。」

慎獨より（連絡して）次章「中和」の意を解して、以て中和は、朱子註の如く汎一般人の性情を指すに非らず、特に慎獨の功（工）到れる君子の（至誠）盛徳を謂ふものとなす。

「此節、即慎獨君子存心養性之極功、非通論天下人之性情也。何以知其然也。上節曰君子戒慎、曰君子慎獨、下節曰君子中庸、曰君子時中。此節、承上接下而忽論天下人之性情、必無是理。其爲慎獨君子之成徳、又何疑乎。」

慎獨、即至誠にして至誠に由りて中和を致すを得へし。

「慎獨之能致中和、何也。未發者、喜怒哀樂之

未發、非心知思慮之未發。當此之時、小心翼翼々昭事上帝、常若神明照臨屋漏、戒慎恐懼、惟恐有過。（矯）激之行、偏倚之情、惟恐有犯、惟恐有萌。持其心至平、處其心至正、以待外物之至。斯豈非天下之至中乎。當此之時、見可喜則喜、見可怒則怒、當哀而哀、當樂而樂。由其有慎獨之潛功、故遇事而發、無不中節。斯豈非天下之至和乎。」〔中庸自箴〕

然るに一般人は慎獨の工夫に缺くか故に、未發に（ありて）既に無過不及の中を得ず。從發して又和を得ず。故に慎獨の功は即ち至誠の基にして天と我と一體たる（人の）日常の生活か天の意思を畏み、之に合致するに至る基なり。故是の如き人、天を司く位にあれば天時順に、地を司る位にあれば、山澤動植の物亦繁榮して其生を遂げ、種族を蕃衍せしむへし。

儒教の道を以て（本原）天の道に出つるとなし、天を宗教的に観んとすれば、茶山の説、甚た正皓を得たりと謂ふへしと雖、若し『中庸』の字句に就て之を詮索すれば、未必しも茶山の解釋妥當なりとなすへからず。

案するに、（其の）所不睹を戒慎し（其の）所不聞を恐懼すると云ふ言表しは、如何にすると、其所不睹と其所不聞に對する意味にして、詳言すれば、其の所睹所聞にありて戒慎恐懼するは人情の常にして、小人と雖、皆是事あり、特に擧げて教となすを要せず。只夫れ其の所不睹所不聞に於て戒慎恐懼するは、獨り常に修道を心掛くる君子にして始めて之あり。故に『中庸』を讀む程の者は、此に意を用ひざるへからずと謂ふなり。若し所不睹（之を）天意天鑑と解すれば、天意天鑑は本來睹えず聞えざる者なるか故に、所睹所聞と對説する意味を没することとなりて（る）。是のれ本文の意に合すると思はれず。×

（上面：×太田錦城〔1765-1825〕の『中庸原解』に

「其所不睹其所不聞、言己所不被睹己所不被聞也、與其獨同。……雖佗人之所不規睹、戒慎其行、雖佗人之所不傾聽、恐懼而言。是乃慎獨也。所謂不欺暗也、言暮夜無知者反此義也。」と云ふもの正に適中す。）

本文は要するに、君子は他人の見ず聞かざる所に（己れ獨り知り聞く所）ありても猶戒慎恐懼すと、軽く解釋すべく、更に進みて、然らは何故に猶戒慎恐懼するかと究むるに於て、此に始めて天鑑照々、時として處として照臨せざるなし。我か人見ず人聞かす隱にして微なりと思ふ所、之を天より觀れば、反りて瞭然として大明、絲毫の心の動きさへ天鑑を逸する能はず。

木下順菴の門人雨森芳洲〔1668-1755〕の草せる『たわれ草』に師の行狀を録せる内に

「ある人、神は聰明正直にして一なると云ふ言葉を擧げて、聰明とはいかゞ云ひたる言葉なるか、と尋ねしに、一念、此に起れば、其儘、知り給へはこそ、と我師なりし人答へられしに、其座に侍りたる人共、何れも背中に水を注きたる様おほえ感悟したりき。今書きつけて見れば、さ迄かはりたる事にもあらねと誠に會得したる人の言へるは、言詞の外に人を感じる事あるにや、頭上三尺の天といへることは貴しと、我師は常に語りき。」

と云ふあり、正に『中庸』本文の如實至境なり。而して儒教徒の終極の境地、此の外に出ず。

故に茶山の思想は其の正鵠を得たるもて其の解釋、襪せざるを免れず。然れども解釋は（教學に於ては）寧ろ第二義なるか故に、是點に於て茶山の看到せる説は朱子學の足らざる所を補ひて以て千古なるへしと謂ふへし。

〔天命、性〕

『中庸』開卷第一「天命之謂性」の五字は、人（の）性の問題を提供して（其解釋は）朱子學に於ける根本原理を打立つ（る者なり）。朱子は解して曰く

「命猶令也。性即理也。天以陰陽五行化生萬物、氣以成形而理亦賦焉、猶命令也。於是人物之生、因各得所賦之理以爲健順五常之德、所謂性也。」

遙に孟子の性善説を承~~け~~（繼し）て又佛教の本性説の影響をも受け、明に人の性の理體なることを道破し、而して其説を進むれば、獨り人のみならず、物亦同じく、其本性は理を以て體となして假りに形質を超越して攷れば、人物の性、本と相違なしと謂はざるへからず。此に本然・氣質と二性の概念を含み、本然の性~~は~~（とは）仁義禮智信、是なりとなす。×

（上面：×『中庸自箴』卷之三「惟天下至誠」節の箴に

「人物同性者、佛之言也。易曰茂對時、育萬物。」と云ふは、即朱子性説との相違點を明示す。「中庸策」にも

「人物之五常同異者。臣以爲天命之性、物雖各得、此之言性只是人性。人性而後、方具五常、不當以物性混之也。）」

然るに之に對して茶山は、性字の本義に溯りて朱子の説に同意する能はずとなし、性を（は）極めて人間の日常生活に即して（解して）單に（自然的）嗜好に外ならず、好色を好み惡臭を惡むの好惡こそ、即性の本來の意義なりと云ふ。

「天性二字、始發於西伯戡黎不虞天性一語。易傳盡性之句、孟子知性之訓、皆後於是也。湯誥云降衷下民、若有恒性、~~は~~偽也¹⁷。此經天命之性、即祖伊所言之天性也。然據性字本義而言之、則性者、心之所嗜好也。召誥云節性唯日其邁〔古傳今傳、皆以爲食色之欲〕、孟子曰動心忍性、王制云修六禮以節民性、皆以嗜好爲性也。天命之性、亦可以嗜好言。蓋人之胚胎既成、天則賦之以靈明無形之體。而其爲物也、樂善而惡々〔余有先諱、每云樂善〕、好德而恥汚、斯之謂性也、斯之謂性善也。性既如是、故毋用拂逆、毋用矯揉、只須率以循之。聽其所爲、自生至死、遵此以往、斯之謂道也。但道路爲物、舍之不治則藜芥阻塞、

莫通所向。必有亭埃之官、爲之治之繕之、開之導之、使行旅不迷其方、然後方可以達其所往。聖人之牖導衆人、其事相類、斯之謂教也。教者、繕治道路者也。」

又更に古書を引きて曰く

「人方以靈明之全體爲性、其必以嗜好爲性者、何也。人有恒言、曰我性嗜膾炙、曰我性惡饅頭、曰我性好絲竹、曰我性惡蛙聲、人固以嗜好爲性也。故孟子論性善之理、輒以嗜好明之見告子盡心。孔子引秉彝好德之詩、以證人性。舍嗜好而言性者、非洙泗之舊也。」

〔『心經密驗』〕 ×

(上面: ×茶山、嘉慶乙亥中春、茶山東菴に於て脱稿せる『心經密驗』は、彼の學説の秘奥を發揮せるもの。其の第一章、専ら心性を辨す。性を以て嗜好の本義となすこと『中庸自箴』と同しく、終に(宋儒)心性の攷究の畢竟、空學なるを擧言す

「今人推尊性字、奉之爲天樣大物。混之以太極陰陽之說、雜之以本然氣質之論、渺茫幽遠(恍)忽夸誕。自以爲毫分縷析、窮天人不發之秘、而卒之無補於日用常行之則、亦何益之有矣。斯不可以不辨。」

又宋儒の性説の佛氏に本くを辨す

「佛氏謂如來藏性、清淨本然楞嚴經、謂本然之性、純善無惡、無纖毫塵滓、澄澈光明。特以血氣新薰之故、陷於罪惡。有宋諸先生皆從此説。」

心に三様の内容あるを擧げて古來の性説を綜合す曰く

「総之靈體之内、厥有三理。言乎其性則樂善而恥惡、此孟子所謂性善也。言乎其權衡則可善而可惡、此告子湍水之喻、揚雄善惡渾之説、所由作也。言乎其行事則難善而易惡行、此荀卿性惡之説所由作也。」

故に茶山の性善と朱子の性善とは、其説の内容を全〔く〕異にす。

〔茶山の性説〕

朱子は、性は五常となすか故に、性(の本質)即善に汙、性外に所謂善なる者、人生には(存するに)非ざるなり。然るに茶山は、性は只た善を好み惡を好(惡)む者にして、善其物には非すとす。故に茶山に従へば、善は性以外に存在する物に外ならず。

善は性外に存在するも、其は性と能く調和する性質を有し、(性の)善に對する時に當りては、(必ず)快感を發生して善に従はんと欲す。而して性か快感を感じて(其の快とする儘に)一步一步、善を實踐し行くを道と稱す。故に道は而して此場合に善を實踐するは、性の本體(働)と謂ふよりも、寧ろ心の能と稱すべきものなり。(性の働は、善惡の判斷、換言すれば、善惡に對する自然的快不快と解すへし。) (斯くて)道に由りて(彼方にある)善と此方に在る性と聯絡せられて人間確實に善を實踐するなり。然らば則、是の意味に於ける善は、是れ人性に非ざるか故に(す、人性)以外に在りて定められたる物なる◎(上面: ◎天の定むる所と謂ふへし。若し更に之を學的に推究すれば)故に、或は之を聖人の定むる所と謂ふか、或は人類社會生活内に自然に發生せるものと謂ふべきか。兎に角、人の性に適するを以て本質となして(打立てられたる社會公認の)人倫の關係の規定なりと謂はざるへからず。

是意味に於て茶山の性説は、甚た王陽明の良知良能説と似通ふ所あるを認めざる能はず。陽明の良知は、専ら是れ好惡に基く判斷にして『傳習録』に

「良知、只是個是非之心。是非、只是個好惡。只好惡就盡了是非、只是非就盡了萬事萬變。」と云へり。故に陽明の性も、茶山の性も、只た善惡を好惡汙誤らざるに過ぎざるか故に、性善なりと云ふも間接の沙汰たるのみ。

之に對す『孟子』の性善(説は其)の證(據

を)は、心か外界に對するト、何等の作爲乃至勉強を用ひずして極めて(自然に)發する心の動に就て觀_レ之(發見して)之を(打)立てたるなり。例へは、赤子の井に陥らんとするを見て、怵惕惻隱の心を起すか如し。此の心は其人の性に本具の心と謂はざるへからずして、善なること勿論、(之を擴充すれば)博施廣濟の仁と迄發展すへき可能性あるものなり。

然るに茶山は、赤子の井に陥らんとするを見て、之を防きて救ふは心に快く、捨てゝ顧みざるは心に不快なるを以て性善なりと説かんとす。然れト怵惕惻隱の心_を其物を以て性の本質と認むるには非ざる也。故に常に常に善其物は性外に存在すとなさゝるへからず。△

(前頁上面：△若し斯く見ずして尤單的に(善の本質を)性の嗜好の一事に歸すれば、善の客觀性全く喪はれて禪家の作用即道となり、道とは総へて心の爲さんと欲する儘に行ふの外、何物もなき事となる。既に陽明學に是弊あり、(理論としては成立すへきも、實行的教としては甚た危險なりと謂はざるへからず。)茶山、此の踵を履むとは攷ふる能はず。)

茶山も性(の)好惡_をに循ひて善を實踐する心を道心と稱す。

「率性之謂道、故性之所發、謂之道心。性生於心故从心从生。道心常欲爲善、又能擇善。一聽道心之所欲爲〔循其欲〕、茲之謂率性。」

茶山は、人の道心に循ふは、單に道德的義務たるのみならず、又宗教的義務なりと認む。

「辛未録曰、天賦我性、授之以好德讀作善之情、畀之以擇善之能。此雖在_レ我、其本天命也。凡人認作自己本性、所以慢之不遵道心之所告戒。一番推究、認得此性本係天賦、茲乃赫々天命、違此性之所欲行、此性所愧、此是慢天逆天。〔天〕命罪通乎天矣。◎(上面：◎故曰尊德性。)

其他、章句に於て「無憂者其惟文王乎」の一節か「武王周公其達孝矣」の一節と連りて一章

となるへしと謂ひ、又「誠者天之道也」の一節は上に連るへく、別けて一章となすへからずとなし、又「子曰愚而好自用」説の箴に「愚而好自用」より「不敢作禮樂」に至る迄、孔子の言となし、又「是故君子動而世爲天下_レ筭道」とより「惟天下至聖」まで皆孔子を贊する所以となす。皆一隻眼ありと謂へし。)

〔與猶堂集の内容と著作年代〕¹⁸

與猶堂集

- | | |
|------------------------|----|
| 一. 詩集 | 八册 |
| 一. 議、疏、筭 | 一册 |
| 一. 原、説、啓、狀 | 一册 |
| 一. 論、辯 | 一册 |
| 一. 箴、銘、頌、贊、序 | 一册 |
| 一. 記、題 | 一册 |
| 一. 跋、墓文、祭文、遺事 | 一册 |
| 一. 書牘 | 一册 |
| 一. 對策、策問 | 一册 |
| 一. 西巖講學記〔乙卯〕、陶山私淑録〔乙卯〕 | 一册 |
| 一. 雅言指瑕、群經瑣言、勸孝文、餽餽録 | 一册 |
| 一. 餽餽録 | 一册 |
| 一. 風水集議三卷道光五年乙酉孟春 | 一册 |

〔以下續集〕

- | | |
|---------------------|----|
| 一. 對策、策問、事大考例題叙 | 一册 |
| 一. 序、記、跋、題 | 一册 |
| 一. 贈言、家誠〔庚午仲春までを収む〕 | 一册 |
| 一. 書牘 | 三册 |
| 一. 禮疑問答 | 一册 |

嘉慶乙丑冬十月、學淵來觀于康津謫中〔九月十九日、自西山離發、取路自京、十月初三日乃至康津〕。既數日、謂之曰余所不朽、唯禮與易、余其授汝。然喧卑不可以專精、汝其從我。初九日〔十月〕、至寶恩山房高聲菴、居僧只九人。學易學禮、夜以繼日。或有疑晦、隨有質問。録其所答、名之曰僧菴禮問。僧菴、在縣北五里。〔僧菴禮問序〕

- | | | | |
|--|----|------------------------|-----|
| 一. 論、雜文 [戲文]、儷文 | 一冊 | 一. 孟子要義 | 三冊 |
| 一. 墓誌、行狀、傳贊、紀事、碑銘、誄偈 | 一冊 | 一. 小學珠串 | 一冊 |
| 一. 耳談續纂、雜評、汕水紀行 | 一冊 | 一. 論語手筭 | 一冊 |
| 耳談續纂引 | | 一. 論語古今註 | 一三冊 |
| 王氏耳談者、古今鄙諺之萃也。經史所著、頗有脫漏、今復收錄。石泉申承旨綽、亦以十餘語採而助之。 | | 一. 孟子要 中庸自箴 | 一冊 |
| 因念星翁百諺、即吾東鄙諺、而皆不叶韻。今取可韻者韻之、因又收其脫漏。先仲氏在茲山海中、亦以數十語寄之。今會通爲編、名之曰耳談續纂。嘉慶庚辰春鍊馬山樵書。 | | 一. 大學講義、小學枝言、心經密驗 | 一冊 |
| [申綽と茶山と親善に於研究上相助けし事可見] | | 一. 大學公議 | 一冊 |
| 一. 檀弓箴誤上下 | 二冊 | 一. 經世遺表 | 一五冊 |
| 一. 喪禮外篇 | | 一. 牧民心書 | 一六冊 |
| 一. 正體傳重辨[純祖乙亥] | 一冊 | 一. 欽々心書 | 一〇冊 |
| 二. 典禮攷 | 一冊 | 一. 民堡議 | 一冊 |
| 三. 弔尊考・古禮零言・禮考書頂 | 一冊 | 一. 大韓疆域攷 | 式冊 |
| 一. 祭禮攷定、嘉禮酌儀 | 一冊 | 一. 編註廣孝論 | 一冊 |
| 一. 喪禮四箋 | | 一. 雅言覺非 [?前出と異同] | 一冊 |
| 一. 序目・始死・襲含 | 一冊 | 猶『俟菴年譜』によりて彼の著作の年代を記す。 | |
| 二. 襲含・小斂・大斂 | 一冊 | 一. (正祖) 乙卯夏爲谷川府使 | |
| 三. 既殯・葬 | 一冊 | 冬『麻科會通』成 | |
| 四. 葬・虞祭 | 一冊 | 一. 正祖廿二年戊午四月 | |
| 五. 卒哭・耐祭・既葬・小祥 | 一冊 | 進『史記英選集註』 | |
| 六. 大祥・禫祭・附録・奔喪・方喪 | 一冊 | 一. 正祖廿四年庚申 公卅九歲 | |
| 七. 喪具 _{上下} | 二冊 | 是歲『文獻備考刊誤』成 | |
| 八. 喪服 _{上下} | 二冊 | 一. 純祖元年(辛酉) 公四十歲 | |
| 九. 父子・母子・出母 | 一冊 | 三月被謫於長鬢 | |
| 一〇. 承重・出後 | 一冊 | 夏『百諺詩』成 [『耳談續纂』は庚辰春成] | |
| 一一. 出後・出嫁 _上 | 一冊 | 一. 三年癸亥 公四十二歲 | |
| 一二. 出嫁 _下 ・夫妻・祖孫・嫂叔・諸父・娣 | | 春『檀弓箴誤』成 | |
| 姒・昆弟・舅姑 | 一冊 | 冬『禮箋喪儀匡』成 | |
| 一三. 嫡母・慈母 | 一冊 | 一. 四年甲子 公四十三歲 | |
| 一四. 宗子・外親・雜敘・師友 _上 | 一冊 | 春『兒學編訓義』成 | |
| 一五. 師友 _下 ・改葬・臣僕・變禮・兼親・緒 | | 一. 五年乙丑 公四十四歲 | |
| 論・追服 | 一冊 | 夏『正體傳重辨』成 | |
| 一. 朝鮮水經 | 四冊 | 冬「僧菴問答」 與學淵問答周易 | |
| 一. 閻氏古文尚書疏證鈔 | 一冊 | 一. 七年丁卯 公四十六歲 | |
| | | 冬『禮箋喪具訂』成 | |
| | | 一. 八年戊辰 四十七歲 移茶山書屋 | |
| | | 冬『祭禮攷定』成 | |
| | | 冬『周易心箋』成 | |

- 著「讀易要旨十八則」
 述「易例比釋」
- 一、九年己巳 四十八歳
 春『禮箋喪服商』成
 秋『詩經講義刪録』成
- 一、十年庚午 四十九歳
 春『詩經講義補』成
 『冠禮酌儀』成
 『嘉禮酌儀』成
 冬『小學珠串』成
- 一、十一年辛未 五十歳
 春『我邦疆域攷』成
 冬『禮箋喪期別』成
- 一、十二年壬申 五十一歳
 春『民堡議』成
 冬『春秋考徵』成
- 一、十三年癸酉 五十二歳
 冬『論語古今註』成
- 一、十四年甲戌 五十三歳
 夏『孟子要義』成
 秋『大學公議』成
 『中庸自箴』成
 『中庸講義補』成
 冬『大東水經』成
- 一、十五年乙亥 五十四歳
 春『心經密驗』(及)『小學枝言』成
- 一、十六年丙子 五十五歳
 春『樂書孤存』成
- 一、十七年丁丑 五十六歳
 秋『喪儀節要』成
 『經世遺表』 起稿而未卒業
- 一、十八年戊寅 五十七歳
 春『牧民心書』成
 夏『國朝典禮攷』成
- 八月因李奉淳上疏發關。九月離次茶山、十四日始入次列水本第
- 一、十九年己卯 五十八歳

- 夏『欽々心書』成
 冬『雅言覺非』成
- 一、廿一年辛巳 六十歳
 春『事大攷例刪補』成
- 一、三十四年甲午 七十三歳
 春『尚書古訓』『知遠録』改修合編共廿一卷
 秋『梅氏書平』改正 【第三册⇒第四册】

3. 『周易』(19)

『孟子』に『孟子要義』、『論語』に『論語古今註』あるも、其の製作の要領、『大學』『中庸』と同軌に歸するか故に、今姑く其の解説を畧す。朝鮮の儒學乃至經學研究せんとする者に對しては必攻の書なり。

茶山の『周易』研究か其の最力を注ぎし所に於て、甲子に著手して戊辰に脱稿し、稿を更ふること實に五回なりし事は前に之を言へり。蓋し『易』に就ては自ら任する所、甚重く以て前人未發、(能く)四聖の微意、奧を闡發すとなす。

茶山は『易』を以て占筮の書なりと觀ること、朱子に合致す。從て『易』(卦爻)の諸係辭は皆吉凶悔咎を教へて人事の指針たるべきものなり。但し易辭は皆卦象に循りて製せらる。卦象を窮めずしては一々の詞を解する能はず。

然るに漢易、其傳を失し、王弼専ら理に循りて『易』を説きしより、探象の法門混ひて晦蒙に歸す。人々只た其臆見に由りて(象を離れて)空に易辭を解するに至る。是れ、古來内外(幾多)の易解も、遂に學人をして首肯せしめて疑なきに到らしむる能はざる所以なり。而して易象は只た一卦面に現はるゝ陰陽剛柔の排列を取るのみならず、更に種々の變化を博渉して巧に之を取る。其事は、漢易(荀爽虞翻等)及先秦諸子史文獻(左史國語卜史の言)に斷片的に傳へらるゝ占辭に就て徵するを得へし。故に茶山の『易』を述ふる先^{さきだ}つ其の取象の範疇を列擧せざるべからず。

〔「括例表」〕

茶山「括例表」に曰く

「文王周公之撰次易詞 其一字一文、皆取物象。

舍說卦而求解易、猶舍六律而求制樂。」

一 推移

『易』は陰陽の消長交錯に由りて成立するか故に、先つ卦を、陽の長するものと陰の長するものとに分ては、復[☱]、臨[☱]、泰[☱]、大壯[☱]、夬[☱]、乾[☰]の六卦は、一陽生より六陽成をなし、姤[☴]、遯[☶]、否[☷]、觀[☶]、剝[☶]、坤[☷]の六卦は、一陰生より六陰成をなす。~~之に對して重坎小過[☱]、中孚[☴]は夫坎、夫離にして、坎は一陽中に居りて安定し、離は一陰中に居りて安定し消長を受けざるもの、兼卦なるか故に亦~~

而して此の陽長する五の本卦は、其の陽の位地の變化に由りて推移を生し、一陽の卦は師[☶] [復に對して一、二に之き、剝に對しては上、二に之く。以下之に準す]、謙[☶]、豫[☱]、比[☶]、剝[☶]五卦を生し、一陰の卦は同人[☶] [姤に對して一、二に之き、夬に對して上、二に之く。以下之に準す]、履[☱]、小畜[☱]、大有[☱]、夬[☱]五卦を生す。故に是等一陽五卦に對しては復、本卦たり。一陰五卦に對しては姤、本卦たり。

同様の變化に由りて二陽の卦には十[☱] (四) 卦あり、二陰の卦にも十[☶] (四) 卦あり、三陽の卦の推移には九卦、三陰の卦にも九卦あり、~~合計五十卦~~之に乾坤二卦を加へて六十四卦となる。×

(上面：×故に乾・坤と師復・臨・觀(泰)・大壯・夬、姤・遯・否・觀・剝、合計十二卦を以て辟卦と稱し、之を十二月に配す。外に小過[☱]、中孚[☴]の二卦は大互體に坎と離とを成し、~~坎は陽中正をに居り、離は陰中正に居り消長する所なし~~(離は日、坎は月なり。◎左脇◎一月廿日(二月小)となせは、必ず一年六日を殘す。六日と云ふは、日と月とより成る故に、小過と中孚とを以て十二月三百六十日以外の閏に象り、十四

卦を用ひて四季一巡、皆含みて殘す所なし。) 故に五歳再閏の閏月の卦に當[☱] (て) 亦辟卦に入る。

復[十一月/子]、臨[十二月/丑]、泰[正月/寅]、大壯[二月/卯]、夬[三月/辰]、乾[四月/巳]、姤[五月/午]、遯[六月/未]、否[七月/申]、觀[八月/酉]、剝[九月/戌]、坤[十月/亥]

六十四卦中、辟卦十四を除けば、五十卦となる。五十卦を衍卦と稱す。大衍之數五十と云ふは、是を謂ふなり。総て衍卦は常に辟卦に本くか故に、其の取象の詞も常に辟卦を對照することを忘るへからす。)

二 互體

大凡一卦の二より四に至る三卦の成す所を下互體と謂ひ、三より五に至る三卦の成す所を上互體と云ふ。

大凡一卦の一より四に至り、一より五に至り、一より上に至るを大互體と謂ふ。又大體とも謂ふ。例へは、鼎[☱] (☱) 一至五の大坎となり、屯[☳]の一至五の大離となるか如し。

大凡一卦の一、二、三、四、五、六、を兼ねて成 [す] ものを兼互體と謂ふ。例へは、臨[☱]の大震、小過[☱]の大坎なるか如し。

大凡一卦中連三爻倒にして八卦をなすを倒互體と謂ふ。例へは、坎[☵]の二三四倒にすれば艮[☶] (☶) をなし、三四五倒にすれば震[☳] (☳) を成し、大過[☱]下 (三) 倒にすれば兌[☱] (☱) をなし、上三倒にすれば巽[☴] (☴) を成すか如し。

大凡一卦に他の (四) 卦の下互體、上互體を含むを兩互體と謂ふ。此に十六卦あり。例へは、大過[☱]か離 (小過、豐、旅) の下互[☱]、上互[☱]、小過[☱]のを含み、既濟[☵]か解、睽、歸妹、未濟の下互[☱]、上互[☱]を含むか如し。

是の如く一卦内に上互・下互の二互體、大互體、兼互體、倒互體あり、更に他の四卦と關聯して兩互體あり、各々象を取るか故に一卦面の現はす所の象、多種多様に汚複雑となる。

(上面：×易象に互體~~を~~及旁通より取るは虞翻の『易』に本づく。茶山の『易』、故に虞『易』に得る所多しとなす。是點に於て于茶山(阮堂)の易説と相容れず。茶山と(阮堂)同しく漢學派に屬するを以て彼は『易』の彖象及大象は唯た義を本卦に取るとなす。『阮堂先生全集』卷一「周易虞義攷」¹⁹に詳なり。)

〔三〕伏體

大凡一卦の(上下)大體に於て離(☲)と坎(☵)とを含むを伏體と稱す。例へば震(☳)の一より四迄か離をなし、二より上までか坎をなし、兌(☱)の一より五迄か離をなし、三より上までか坎をなすか如し。又乾坤の二卦は爻に陰陽の差なきも位に寄偶の差あり、亦下離上坎を含むものとす。²⁰

〔四〕辟合

易象に姤(あり)て兌は(少)女たり、艮は姤(少男)たり、震は長男たり、巽は長女たり。故に婚姻の占にありては倒互體を取りて占を立つ。例へば、漸(☱)の下は正艮なるも上は巽なるを倒にしては兌となして象を取り、女歸者と謂ひ、又歸妹(☱)の下は正兌なるも上は震なるを倒にして艮となして象を取る、婚姻の占となすか如し。²¹

〔五〕爻變

爻變の一法、茶山以て前人未發となす。茶山は畫と爻とを區別す。

「卦畫之一二三四、謂之畫亦位也、其一二三四之變者、謂之爻。爻者、交也、謂陰陽交易也。今人認畫爲爻、頭腦已誤也。」

故に凡て卦の爻辭なるものは、其の變爻に係けしなり。例へば、乾の九五と云へば、☰乾の九五の畫の筮詞には非ず、其の變して☱となり、所謂乾大有に之きし大有六五の畫の筮詞なり。故に乾九五の象は大有六五の象を取りて説かさるへからず。

蓋し陽の九は、是れ老陽なり、故に陰に變せ

さるへからず。陰の六は、是れ老陰なり、故に陽に變せさるへからず。各卦の初九、九二、九三、九四、九五、上九と云ふは、各畫の老陽なるを意味す。故に筮して其の爻に當れば、各變して初六、六二、六三、六四、六五、上六とならざるへからず。陰の場合亦然り。

茶山は曰く

「筮法、三掛皆得天數一三五七九、則其數爲九參天故。三掛皆得地數二四六八十、則其數爲六兩地故。此其所以爲老也。天地之間、不可一刻而無陰、亦不可一刻而無陽。故純陽則直變爲陰、純陰則直變爲陽。其曰初九者、謂初畫動而爲陰也。其曰初六者、謂初畫動而爲陽也。則周公撰詞之初、原主既變之體而用其物象如潛龍爲變巽之物、履霜爲變震之象。不知爻變則不可以讀周公之詞也。」

×(上面：×『周易四箋』卷之二十に「春秋官占補註」の一巻あり、『左傳』に據りて古筮法を攷證して以て彼の易説の根據を明にす。其内、彼の最以て千載未發となす爻變は、昭公廿九年蔡墨對龍の言を取りて之を明にし、先秦時代皆是法を用ひしを證す。

「秋、龍見于絳郊晉。魏獻子問於蔡墨。々對曰周易有之。在乾之姤(☱)初九變、曰潛龍勿用。其同人(☲)九二變、曰見龍在田。其大有(☲)九五變、曰飛龍在天。其夬(☱)上九變、曰亢龍有悔。其(坤)☷乾六爻皆變、曰見群龍无首吉。坤之剝(☶)坤上六之變、曰龍戰于野。若不朝夕見、誰能物之。)」

然るに此の爻變の説、漢より以來絶へて傳はらず。是れ『易』の晦蒙に歸せる所以なり²²。彼れ其の理由を三項に分ちて説明す。

〔第〕一、爻不變、則推變之迹、亦不可通。此推移之所以廢。

此を説明して曰く

「爻之既變、又執之卦之卦者爻也、溯其推移。假如乾之九四、小畜也。小畜自姤來一之四、故其象爲躍巽股超于上。若不知爻變者、不知小畜本自姤來。故推移之法 因亦不明。此推移之所以廢也。」

第二、爻不變、則說卦物象、亦皆不合。此說卦之所以廢。

此を説明して曰く

「乾既變^{せるに}巽^に、尚以乾看、不^レ亦執鷄而疑馬乎。坤既變震、尚以坤求、不亦瞻龍而疑牛乎。坎既變兌、嗔舍豕而談羊。離既變艮、慨去雉而論天。此王弼之所以起也。九家[荀(虞等)氏九家]不知爻變、猶執說卦。故其說傳會穿鑿、一往不合。唯彖詞得合也。九家見彖詞之巧合、而不忍捨說卦。王弼見文詞之不合、而不欲用說卦。苟究其故、只坐爻變之不知也。」

第三、爻不變、則互體之物、亦皆不合。此互體之所以廢。

更に説明して曰く

「試論屯卦六二變、則互坤變而爲互震矣。周公方且談龍、王弼怪其非牛。互體不廢乎。屯六三變、則互艮變而爲互離矣。周公方且執雉、王弼嘆其失犬。互體不廢乎。故曰互體之廢、由不知爻變。」

是等、茶山の前人未發と信する『易』説の攷據は『易學緒言』に詳なり。

以上の「讀易要旨」に據りて茶山の解『易』の方法、眞に徹に入り細に亘る。中に傳會の疑を免れざるもありと雖、其の巧なるものに至りては、象と詞と確然契合し、理義明白、雲霧を開きて天日を瞻るか如きあり。

「乾☰(用)九、見羣龍無首吉。○象曰用九、天德不可爲首也。○乾元用九、天下治也。○乾元用九、乃見天則。」

茶山、之を解して曰く

「此、乾之坤也蔡墨云。著卦十八變。成卦之時三十六爲十八、其十八卦之策、皆得天數一三五七九、則六位盡變皆老陽。此之謂用九也。○乾本六震義見前、見羣龍也見音現。乾亦爲首說卦文、龍有首也。變而爲坤六盡變、遂無乾剛無一陽、見羣龍无首也。龍而无首則神龍也張氏云神龍見尾而不見首、故吉。○本是乾卦、固天德也。雖曰天德、今既无乾無

一陽、不可以爲首也乾爲首。○天下者、坤也卦今坤。本以君德卦本乾、施以異教初之變爲姤、以漸濡潤六陽次第變爲陰、丕化坤民卦今坤。化民曰治、天下治也。○天道好變。四時萬物、莫不變易。此易之所以主乎變也。今六陽皆變變之極、天道天法、於此乎可驗神變而無形。乃見天則也。○按春秋傳蔡墨對龍昭二十九年、以此爲乾之坤朱子曰六爻皆變者、即此占之、則乾坤之有純變、審矣。然六爻純變、則用之。其或雜變者、皆所不用詳見著卦箋。故謂其所用者、曰用九也。」

〔古今『易』學者の著述検討〕

『周易四箋』廿四卷の外に『易學緒言』十二卷あり。彼の批判的研究法の當然の産物にして、彼か『周易四箋』の自説を立る前に博く古今の『易』學者の著述を検討して之を批判し、其の採るべきは之を取り、其の駁すべきは之を駁せるなり。

其の擧る所、漢唐より明(清)に至る清~~は~~り、李朝には星湖の易説も之を検討せり。即唐李鼎祚の『集解』[集むる所子夏、孟袁、京房より崔輿、孔穎達に至る迄、卅餘家(の説を集録す。)]十七巻中只十巻を傳ふ]、鄭康成易註[鄭玄の經解は清朝に至りて俄然、解經家の金科玉條となり、遂に之を漢學と稱する迄に至る。而して茶山は、鄭玄易解を以て雜に汚純ならずとなし、駁論する所甚多く、採る所寧ろ少なし。此に彼の清朝經學に對する獨自地歩を示す。×上面：×是點、茶山(阮堂)か極力鄭康成を推尊して鄭説は一に皆師承に基き家法あり。後人妄に一知半解の臆説を以て之を批評是非すへからずとなすと相異す。畢竟茶山阮堂は、茶山に比して一層漢學派なり。一層多く一層明かに清朝斯派の學術の風氣に感染す。阮堂は朝鮮に於ける純漢學派の唯一代表者と謂ふへし。「與丁茶山書」に茶山の鄭註に對する疑問に對し一々以て鄭義不可從となさんとするの非理を答へ「大抵、鄭注之可疑處甚多。然此皆師說也、家法也。雖有不合於今人見聞、若以成化之磁、萬曆之窠、致疑於鳳羽波沙、大不可也。後人所以駁鄭者、以己之一知半解、偶有新奇可喜處、毅然奮起而攻之、不遺餘力。

反以思之、己之所攻者、別無師說、又非家法也。」、王輔嗣易註〔王弼に至りて『易』の象學、廢して専ら道家風の理を説く者となる。彼の之に反對するは固よりなり〕、韓康伯玄談〔韓は王弼の弟子◎→◎彼に至りて愈『易』は道家と混す〕、朱子本義〔朱子『本義』は『易』を以て占筮の書となし、象を揆らず、又互體等の變化をも觀んとす。只其の精評なる能はさりしのみ。彼は之を公平と批評せり〕、邵子先天（易）説、沙隨古占〔程迥、『古占』十二篇を著す。邵子先天易に本づく、彼其の誤謬を辨す〕、草廬『纂言』〔吳草廬の學、禪習ありと稱せられるも、『易』に於ては往々古意を得たるあり〕、（明の）來氏易注攷〔來知徳の『易經集注』十六卷所説、易家の下乗にして誤多し〕、李氏折中〔李光地、康熙帝の命を受けて『周易折中』二十二卷を撰す。『本義』を進めて本注となし、『程傳』を其次に録す。然れども卦變爻變互體物象を用ひず。畢竟王弼一流の理の易を脱せず〕、外に陸徳明の『經傳釋文』中の古易、唐の郭京易舉正、王應麟、蔡西山の胡玉齋、李星湖の論せる李光地互卦説を批判す。

（上面：『易學緒言』卷十二「茶山問答」内

「問、箕子明夷、明是周公之詞。周公之時、箕子不在中國乎。

答、左傳秦伯曰唐叔之封也。箕子曰其後必大僖十五。唐叔之封、在於成王之時、而箕子猶有是言。則箕子之東出朝鮮、蓋晚矣。」）

茶山の筮法（5）

茶山の筮法は、朱子等と大に異なり、全く一家の窠案に出づ。此に亦其の沈潜覃思の學風の發揮せらるゝを見る。『周易四箋』卷の廿三「著卦傳」に詳なり。

著數は五十衍卦（數）に則りて五（十）本となし、其の一を抽取りて數の本に象る〔之を太極に象るとなすには贊成せず、太極に宇宙未判の本原なるか故に著を櫃に藏して未だ開かざるに名くへきのみとなす〕。四十九著を任意に左右に分ち持す。而して其の陰數なる分より一本を抽出して（贛帶に）掛く〔朱子は右手の分より一本を取ると云ふ〕。掛とは、

茶山は以て手に从ひ卦に従ふ、卦を結ぶの實となす。斯くて左手右手の著共に奇數なり。先つ右手の著を下におき、右手以て左手の著を四以て櫛す。四時に象るなり。其の零す所、一に非れば三なり。◎（上面：◎之を左手に扨す）。次に左手の著を下におき、左手以て右手の著を四以て櫛す。零す所、一に非されは三。左右の零分、合計四なり²³。左右櫛了れば、扨著四を扨して他著を席上左右に分置す。次に所扨四枚に就き任意其一枚を抜き、他三枚を棄つ前に、偶數の著束より抽取りて掛けし一枚と此一枚とを合して（無私意に）摩轉して其の一本を抽取る。之を正掛と稱して前の權掛に對す。即、此の一枚の著より卦を産出する故なり。而して各著には一より十に至る迄の一數を刻す。今、此の正掛を得るに至りて其の所列の數を觀て之を版上に書留む。

以上の如き方法を三回繰返して初めて一畫を成す。即、其數、一寄二偶なれば陽となり、一偶二奇なれば偶となり、三陽（偶奇）なれば純陽即老陽、三偶なれば純陰即老陰となる。斯くて全十有八遍を経て六畫現れて一卦成る。²⁴

而して筮占は、變爻に依りて定まるか故に、若し六畫中一畫、純陽若くは純陰なる時は、其の畫は爻變をなして之卦を生し、其の爻辭に依りて占成る。され又乾坤二卦に限りて六畫共に或は純陽純陰なる時は、用九、用六の係辭に依りて占定まる。然るに若し純陽二以上、乃至純陽と純陰相備はる時は、更に之に就て（變）爻を定めざるへからず。傳に

「乾之策、二百一十有六、坤之策、百四十有六（四）。凡三百有六十、當期之日。」

の辭あり。乾（老陽）は數九也。而して之を四櫛するか故に四倍すれば廿六となり。乾は九六畫なるか故に（總計）二百十六となる。老陰は數六、之を四倍して廿四となり。坤は六六畫なるか故に總計百四十四となる。²⁵

是に則りて初九、九二、九三、九四、九五、上九の筈の右廿六枚、初六、六二、六三、六四、六五、上六の筈の右廿四枚を作りて之を亦贖に納む。

今若し老陽二畫(初九、九二)なる時は、初九廿六枚、九二廿六枚合計七十二枚を合同滾轉して、亦之を其儘四牒し、最後の四枚を取りて數回摩轉して手に任して其の一を抜き、若し是れ初九なれば則初九の變爻となし、初九の辭、占筮となる。老陽老陰各一の場合には、~~其の~~之に相當する九廿六枚、六廿~~六~~四枚を合同滾轉して四牒し、最後四枚より一枚を抜きて以て變爻となす。²⁶

土地共産説²⁷

〔六〕鄭霞谷

一 事蹟(10)

〔退溪の陽明學揮斥〕

(明宗)宣祖の~~初年~~頃、陽明書、朝鮮に將來せられ、退溪及西厓(月川)等に由りて讀まれしか²⁸、退溪深く以て聖學に非ずとなして之を揮斥し、次て又陳建の『學蔀通辯』の朝鮮學者に讀まるゝあり、愈々新建の學は禪學の變形、所謂外儒内佛、最危險なるものと視做し、爾來朝鮮儒士の公然之を唱道する者なし。況や、宋尤菴の如き堅き朱子信者の現れて學界~~を~~の權威を執~~る~~(り、學説と黨論と結付くし)に至りては、~~直に~~陽明學を奉するか如きは直に其の官界の~~生命~~進路を杜塞するのみならず、又其の兩班たる地位(を失墜せしめ)、甚しきは其の生命さえも斯文亂賊^{かど}の廉に由りて危殆に瀕せしむ。故に爾來朝鮮儒學史に在りて色彩の明白なる陽明學派の學者を見出すことなし。

〔最初の陽明學者、南彦經〕

(上面:朝鮮に於て最初に王學を奉せる人の誰なりしかに就て、『青丘學叢』第廿五號、李能和氏の「朝鮮儒界之陽明學派」の一雄篇、之を釐明すること詳なり。氏は『李朝實録』宣祖朝を検討して遂に其の南彦經及宗室李瑤二氏なることを發見せり。廿七年甲午七月癸巳に

「慶安令瑤以請對軍上疏。上引見瑤、々曰小臣前日以愚妄之見、冒犯天威。其後意或召對、常欲進言而未能矣。上曰爾既云學書則心學亦爲之乎。瑤曰臣嘗聞治心之人、無不往見。今之名士亦皆遍識。如柳成龍、往來退溪門庭有學而未能詳知。金謹恭乃李仲虎弟子、而嘗教授生徒。臣嘗與之從遊矣。上曰金謹恭李仲虎、予初聞之。瑤曰雖中朝人若有心學則願見而不得、王守仁之書亦嘗見之矣。上曰所見必高矣。守仁何如人耶。瑤曰其言云晦菴之心與△次頁上面:某同而格物之說與程子有異。上曰陽明之說是乎。瑤曰臣嘗見陽明及象山書、臣之心以爲好矣。上賜瑤內饌。瑤曰願以此遺彦經之孫。上曰無妨。」

慶安令瑤は、西厓の宣祖に上言する所に依れば、行實孝友なるを以て時名ありし人なり。而して西厓も既に南彦經の陽明學を以て從遊者に授くることを知り

「今人學於彦經者、亦多尚陽明矣。」

と謂へり。次て弘文館應教柳拱辰、副修撰鄭曄等、上書して王學を指斥し、因みに李瑤の亂言を以て上聞せるを非議せり。是等の記事に因りて南彦經か當時一代學界の風潮に逆て陽明學を以て門徒に教授せるを證すべく、其の既に宗室に迄浸灌せるを見る。

南彦經は、字は時甫、東岡と號し、~~京城~~の漢陽の人、宣寧の人、南在六世孫、花潭門に次々頁上面:入り、又退溪に學を問ひ、南冥とも往復あり。明宣兩朝、經明行修を以て薦められ官吏曹參議に至る。壬辰の役起るや、義兵を京畿に起す。然れども特に記すべきの功なし[燃黎室記述

(卷)十六]。後迷源書院に享せらる。今『東岡集』なる者傳らす、彼の陽明學に就て多く知る所ある能はず。

但し『退溪集』卷十四「答南時甫書」九篇ありて彼の退溪との文誼の密なりしを示し、又彼の修學の志篤かりしを見る。其中、彼の心學の×次々々頁上面：×醇朱子學を軼きて、^{やや}動もすれば、尊徳性頓悟の一路に馳せ、陽明に心向する者あるを證すへきあり。例へは第一書別幅に

「見諭。涵養體察、吾家宗旨、天理人事、本非二致。善矣。但悟之一字、力主言之。此則蕙嶺帶來頓超家法。吾家宗旨、未聞有此。」

と云ふは、彼の頓悟を力説して禪に近きを見るへく、第四書に

「夫無意無欲、乃聖者事。一超恐難到此地位。詳此段語意、微有禪味、得無看白沙傳習、未免有少中毒耶。」

と云ふは、彼か無意無欲を努めて陽明の(致)良知を宗旨となさんとせるを見るへし。

東岡の後、陰に陽明學を好看、張溪谷あり、崔遲川あり、而して終に鄭霞谷に至りて略ほ公然、斯學を以て標峙す。)

〔鄭霞谷の陽明學標峙〕

然るに此に肅宗より英祖にかけて少論の名家迎日の鄭氏齊斗霞谷なる者あり、夙に尹明齋に従遊し、又朴世采、閔以升、崔錫鼎、李喜朝等とも學交を締し、長年覃思潛研の結果、陽明の心學を以て孔孟の正意を得たりとなし、之を以て所奉となし、匿れず畏れず、學友と往復辨難して色彩を明瞭にし、聲名齡と共に高まりて少論名家の子弟の來學者亦少からず(尹淳、沈鎔の如き)、又官路爲に枳塞せられず、君眷年と共に隆、遂に曩に宋同春堂の叙せられし所の王世子贊善となり、成均館祭酒となるに至れり。眞に是れ萬緑叢中一點の紅、大に朝鮮儒學史の單調を破れるものなり。

而して爾來陽明學、少論家庭に根を^{おろ}卸し、其

の名家の俊秀にして家庭にありて私に『傳習録』を玩讀して(心中)老論家庭の朱子崇拜を白眼視する者少からざるを致せり。されは霞谷は、博く之を朝鮮思想史より觀るも、一の大なる存在と謂はざるへからず。

『霞谷集』は刊本なし、其子孫私に之を藏せり。今年夏、之を閲覽するを得、一本を謄寫して大學圖書館に藏することゝなせり²⁹。其第十冊に「年譜」を載す。

〔人物、生涯〕

霞谷、字は士仰、文忠公鄭夢周第十一世の孫に當る。父尚微、成均進士、~~早~~彼の五歳時に歿す。祖父維城、官右議政、忠貞と諡せらる。少論中の名家の一なり。仁祖の廿七年己丑漢城に生る。

幼にして聰明好學、最記性に富み、大凡書一度過眼すれば輒ち忘れず。廿四歳別試初試に中る。然れ~~ト~~弟齊泰、場屋に聲名あり、彼、兄弟共に科第を取りて功利を謀るは不可なりとなし、母に請ひて科業を廢し、杜門謝事、専ら道學を治め旁ら諸子百家に泛濫す。×

(上面：×而して勉學窮理、其度を過き肺を病み、卅四歳には殆と危く、身後の事を手記して弟に託~~するに至れり~~し、又南溪に告別するに至れり。然れ~~ト~~大夫人、大に之を憂ひ、~~此~~に刻苦此に至るを見ては、寧ろ爲學を願はずと云ふに至りて、翻然として悟る所あり。爾來自ら保畜愛養し、中年以後、精力強健、少壯時に勝り、終に大壽を得たり。)

肅宗六年領議政金壽恒、彼を朝に薦めて司圖署別提に除、辭~~テ~~就かず。然れ~~ト~~此事、既に彼に官吏資格を與へしなり。爾來卅六歳には工曹佐郎を拜し、四十歳には平澤縣監を拜し、翌年(二月)任に赴く。され~~ト~~其年は即己巳にして南人等盛返し^{もりかえ}の時に當り、嚮に文廟に従祀せられし李栗谷、成牛溪二賢も黜せらる。彼、四月官を棄て~~ト~~歸り、父の墳處安山の楸谷に室を築

きて居る。既にして西人復た勢を挽回するに至りて彼を推薦する者相踵き、内外の諸職に叙せらる。然れども彼辭して出でず。

肅宗卅三年丁亥、彼五十九歳には山林蔭仕としては無上の光榮なる司憲府執義に叙せられしか、三疏して就かず。然れども既に（此に依りて）通清を得しか故に任官愈々順調にして六十二歳には江原道觀察使に拜し、辭し許されず、次て病に依りて遞せらる。

六十六歳には『程門遺訓』を編纂して「定性書」に注を施す。霞谷は、明道に於て最心折敬服し、居常其言を誦味し其風格を慕悦せり。二程中、明道は氣を重し伊川は理を重す。故に陸象山王陽明の學脈は遙に明道に在りて、朱子は伊川を祖述す。霞谷の明道を尊崇するは、陽明を奉する彼と沚は洵に當然と謂はざるへからず。

肅宗四十五年、彼七十一歳嘉善に進階し、同知中樞事に除せられ、漢城府左尹に任せられ、辭す。景宗即位するに至りても老高齢宰相を以て優遇衰へず、大司憲に拜せられ、吏曹判書に進む（み、其四年祭酒に拜す）。

英宗即位に至りて其（三年に王世子侍講院贊善に任せられ）、四年八十歳には右參贊に拜せられ、出でずと雖、國禮に關する大事に當りては史官を遣して意見を徴せし、賜藥賜食（食）等絶えず。十年八十六歳には崇政大夫に進められ、右贊成に拜せらる。翌年元子輔養官を拜す。十二年八十八歳には世子貳師を拜し、崇祿大夫に進めらる。其八月正寢に卒す。後七年諡を文康と賜ふ。

〔英祖の禮遇〕

『霞谷集』に「筵奏」の一篇あり、英祖四年戊申（彼召されて）三月廿五日より五月初二日に至る迄滯京し、一旦辭して退城して復た十一月十八日王世子緯の薨去に際し、服制につき意見を徴するか爲、復た召され、遂に大王大妃、王大妃の服制、彼の議に依りて決定せり。本筵

奏は、彼か遺逸參贊兼世子贊善を以て特に召されて三月廿五日、四月初三日、四月十七日、廿四日、廿八日、五月二日の六次に襄憲王の下問に對して啓上し、之に對し英宗は（一々）眞情を籠めて嘉納し、實に彼に對する禮遇の意躍然と見るへし。

是時、彼の啓する所は黨論蕩平に關するもの、祖宗の成法を遵守すへきの意見等にして（並に）當時朝廷に於ける大問題なり。五月二日の奏に曰く

「頃日東宮進對時、見祖鑑中聖上親撰序文、而其中有欲法堯舜當法祖宗之語。臣以爲聖言如此、宗社之福、仰達於東宮矣。雖有好政令好法門、祖宗已行之法爲三百年至治之根。若悉復舊制則豈有今日之弊乎。上曰此言甚好。鄭曰人存則政舉。既看三百年致政之具、盡善盡美。今日惟舉而行之而已。世宗大王、制禮作樂、爲東方聖人。法制具於經世六典、禮文具於五禮儀、明白可行。後世儒者、多言當行某事、當行某禮、而國家惟當行祖宗之法、行祖宗之禮、然後可免家異俗而人異禮。若一國之内、家々各禮、則非大一統之義。今日盡去枝葉、悉復祖宗之舊、以聖學立本領、專行祖宗之政、則有要領可據、力行不已、豈不能致治平乎。……壬辰以前、祖宗之法、無所變更。壬辰以後、國家幾亡、仍遭光海之亂、且南北邊憂孔劇。而仁祖龍興、非徒重恢宗社、祖宗之法亦幾盡復。孝顯兩朝重熙累洽、朝有名臣能維持國家。而南人者當國、多致紛更。其後舊制盡亡、幾於蕩然。」

是説の如きは、彼の如き陽明學者の主張としては頗る微温的に沚、王陽明の眼裏、古迹前例なく、惟た我か一心良知の判斷に循りて可なるは従ひ存し、不可なるは罷めて更新すへしと云ふ説に合せず×（上面：×陽明の説引用）。霞谷は道學として陽明を取るも、其の政治論乃至思想の傾向に在りては猶朝鮮の傳統を脱することなかりしものと視るへきか。而沚英祖は之に對して

宣醜を命し、彼の辭ことわらんとするや、更に近く前すましめて手つから一封書を賜ふ。蓋し老臣の今後復た召に應じて入廷すへきを懇命せしなり。

二 學説 (16)

霞谷の學説を究むるに參資とすへきは『霞谷集』の外、崔鼎錫の『明谷集』、李喜朝の『芝村集』、宋『尤菴集』、尹拯の『明齋集』、朴世采の『南溪集』、金壽恒の『文谷集』及『英祖實錄』等なりとす。『霞谷集』に據れば、彼は閔以升、李世弼、(朴鐔)と(も)屢々往復辨難せるも、今其集を傳へず〔『誠齋集』はあるへけれど、余猶寓目を得ず〕。而して是等參攷資料中、彼と最學術的に交渉を有し始終相辨して譲らざりし者は、朴南溪を第一に推さるへからず。

南溪は、彼と共に少論に籍し、親交ある先輩なり。彼の四十七歳の二月に歿す。訃至るや、彼爲に位を作りて哭し加麻し、又葬儀に赴會せり。『南溪集』中、陽明學を揮斥せる論篇あり、或は暗に霞谷に示さんとする者歟。

〔陽明學への轉向〕

霞谷か科業を廢し、杜門謝交、道學に沈潛して斷然世學よりして新建に轉向し、之を信奉して疑はざりしは、~~癸未五十五歲十一月~~ (癸酉四十五歲) 崔明谷に與へし (答ふる) 書中に

「又謂僕之所以信於王氏之說、豈無其源本。必有誠信而樂之者。不推原其所自而徒觝排之、不能以服其心者。其於論人之情、(不)可謂切矣。」

〔答崔汝和書① 編冊〇宛西〕³⁰

とあるに見るへし。

霞谷、何故に朱子に叛きて陽明を奉せるか。今『霞谷集』に就て檢するに、朱子の性理説の源頭、心性の説に於て肯する能はざるに因る。

朱子は、性と心とを區別し、性を以て純理體となし、心を以て氣理を兼ねるとなす。故に嚴格に言へば、性か形而上なり、經驗を超越す、但た心湛然として微動せず、(七) 情の萌芽未た

起らず、鑑空衡平なる状態、殆と氣伏して作用せざる時に當りて暑ほ性の姿を認むへしとなす。少くとも朱子は、心の動は性の動に非ず、心の動の外に更に一點惡の(黨) 習氣を帯ひざる本性の動を認めたる者となさるへからず。

霞谷は則、是の如きを以て具體的な人間の心性を論ずるには合當せず、人間に在りては未發亦心、已發亦心となさるへからず、靜なる時は是心靜なるなり、動く時は是心動くなり、決して靜にして未發なる時は是理に於て、動きて已發なる時は氣なるには非らず、人心にありて猶理時氣時を分觀んとするは(未た) 如是人心の全體觀に到らざるものなり、故に人の修養も決して是心を超えたる形而上の性を養ふか如き超絶架空の工夫を用ふるを要せず、(動靜) 體用(を一貫し) 現前歴然として存在する是心の本體を養ひて其の靈明をして昭々として當時雲翳することなからしむへし。其の本體とは即良知にして、而して其か獨り判斷の知的作用に止らず、實行の能力をも具有し、原則的に知行合一なるに觀て、又良能の二字を加ふ。甲申五月彼五十六歲、明谷に答ふるに曰く

「臺教曰天命之性、指其不雜形氣者而爲言耳。此甚切至。此一句外、更有何說。但未知其靜處、獨非形氣耶。其未發、獨非其心乎。若必要無形氣而以爲靜、何所得有無形氣獨立之靜、可以爲不雜形氣之性耶。靜之爲說、恐未得爲究竟極致也。若自其不雜形氣也、雖酬酢萬用、無非性。自其不離形氣也、雖寂然無感之時、無非是形氣。故其所賦於性善者、無靜動而其善一也。其所蔽於形氣者、無靜動而其不善一也。何獨於未發無形氣而至發爲形氣、靜時心性貳而動時心性一也、而特以靜爲性耶³¹。……動亦此心、靜亦此心。性者其源³²、於何見得靜爲源而動靜異致也。愚竊以爲動靜者心也、非所以形氣天理之分也。其天理純則俱純、蔽則俱蔽、不是有先後者。今者若曰靜中形氣未動、姑可見天理體似則固可也。

若以靜爲純於天理則未可。」〔卷三書三崔汝和⑤〕

故に良知は即心の本體にして『大學』の所謂明德其物に外ならず。×（上面：×堯舜にありて一分を加へず、吾人にありて一分を減せざるなり。）「答李君輔世弼問目」に

「心者、身之主宰、人之神明爲萬變之主者、是已。其體也妙、是之謂明德、性之主處也。然則明德可以心言之、非可以理之無形者單指而言之者也。」〔④〕

而して良知なる者は、即（同時に是れ）良能にして、知行の根本に徹して觀れば、善を知りて而_て行善を行ふべきものなり。陽明は、知行合一を出来る丈^{だけ}心理的に説明せんとして愛好色、悪々臭を引きて好色と認むるは是れ知、之を愛するは是れ行、悪臭を認むるは是れ知、之を惡むは是れ行と説明すと雖、斯くては遇々本能的行爲と道德的行爲との區別を没して反りて其説の成立を危くす。

霞谷は、知行合一をは哲學的に思索して、心本體に良知良能存し、（能く）其本體を實現せる聖人の生活に於て常に善と知り之を行へるに看るべきか如く、本來人心の本體に於て善惡に對しては知行合一なりと主張す。◎（上面：◎換言すれば、本質的には知行は合一すべき者なりと言ふなり。）是れ、彼の工夫の密にして深きを證する者なり。乙酉春〔五十七歳〕「答明谷書」に

「至於知行先後之說、前書亦畧舉其概矣。……若自其致乎本原者言之³³、則乾坤易簡之體、知能體用之理、不可以或得。其又可以爲兩事耶。蓋其惟一之體、衆人固不能盡有、則其能知行之一者、鮮矣。以衆人之不能、謂之能知行之一、固非也。又以（其）衆人之失而遂疑其本體之不能爲一、則豈得爲原本之論乎。」〔與崔汝和書⑦ 乙酉〕

斯くて霞谷は、心性論にありて陽明を採り、次に理と物心の關係に於て亦朱子に従はずして陽明を取る。

朱子は、心にも理ありて物に亦理あり、心中の理は決して空に之を實現すること能はず、物に就て理を究むるに従て心中の理亦實現すとす。是點に於て朱子は寧ろ科學研究者の態度を取る。

然るに陽明は物に就て~~心~~理を究むることを認めず、理は獨り心に存するのみとなす。故に書を読むを云ふは實際には書を究むるに非ず、心を究むるに外ならず、六經は吾心の註脚たるのみとなす。

而して霞谷は更に朱王二氏の理觀につき覃究して結局、是れ理の概念に於て相容れざるなり、而_て行儒家の古義は則、陽明の所謂の理なりとなす。癸酉年「答明谷書」に

「至夫即物窮理之語、未知見於何經。孔孟之書、未之見也。程門亦嘗疑之。」〔答崔汝和書② 癸酉或疑甲戌〕

又「答誠齋書」に

「先儒、總以物之性謂之理。如天地物我之稟、是也吾性通同於物性中。陽明、專就吾之性謂之理。如仁義禮智之德、是也物理即統於吾性內。此即其言理之不同者也~~此即其言理之不同者也~~。古聖人所言理、未知其指果出於何說。然仁義等字、既單指吾性、則理字之義、恐亦無異也。」〔書二④〕

是れ、正に朱子學者の理の概念の根本に對する深遠なる疑議を呈せる者なり。心中の理と物理の理と同通一體なりとすれば、理は即當然必然の概念に統へらるへし。而_て單なる當然必然か即、道德の本源たる人性の本質と立てらるゝ仁義禮智信等と同通一致して相移して何等支障なき所の者なるか、大に疑問とせざるへからず。之を共通一致となすか故に、此に先儒の鳩に貞操（性）、鶡（虎）に孝行、虎に孝等性、蜂蟻に忠性ありと云ふか如き窮説を出すに至る。

且又先儒等か認めて物理となす所のものも必しも絶對的ならず、人の心に依りて別様にも觀られざるに非ざるなり。畢竟人か認めて以て物

の理となす所のものも、實は人心の理にして絶對的なる物の理にてはあらず。霞谷、語を續けて曰く

「來喻云、牛可耕、馬可馳、鷄司晨、犬司吠。斯固亦所謂物理也。然古聖賢所爲性理之學、恐不在此也。牛固可耕也、馬固可馳也、牛亦有時而有騎者、馬亦有時而有載者、鷄有時而煮、犬有時而皮。斯亦無非所謂物理也。凡此（之）類、元未嘗有一切之法、定在物上、人可得以學之也。惟存其逐件條制、因時命物之理、實惟在於吾心而已。然則天地萬物凡可與乎人事者、其理參有外於人之一心乎。」³⁴

且又、之を道德上に立返りて觀れば、人として馬牛雞犬等を取扱ふに當りて、緊要點は耕馳晨吠か果して馬牛雞犬の備ふる物理なりや否やの問題には非ずして、其耕馳晨吠を道德的に用ふるか不道德的に用ふるかに存するのみなり。「謂牛可耕而耕之於不當耕、謂馬可馳而馳之於不當馳聖賢固乘之以馳、盜賊亦馳之以爲冠。他皆類推、如攘鄰人之鷄、玩西旅之契者、皆不可謂之理也。必於此等物事、察乎眞至之義、極夫天理之正、然後方謂之理也。凡此眞至之理者、其果在乎馬牛雞犬而可求者耶。」³⁵

霞谷の心即理と主張する理路、洵に整然として反駁の間隔を與へずと謂ふへし。×（上面：×「重答朴大叔問目」に

「中庸註既曰性之德而具於心、則何不本諸是心性之善、而必欲求之於事々物々各有者而求之也。）」

是外、『大學』に於ても王氏説を取りて「親民」を「新民」と訓するに反對し、又性と天命とを區別して、命と云ふは（形象なき天か命したりと信せらるゝものにして）單なる觀念的存在にして此こそ形象を超絶する者と觀るへきも、性は則心の外に求むへからずとなす等、皆陽明學者としての明白なる主張と謂ふへきなり。

〔師尹明齋の憂慮〕

然れど彼の陽明學を奉するの聲聞、傳はるや、世論頗る平ならず。彼の師尹明齋亦之を患ひ、屢々其門人と談、此に及びて太息す。事は『明齋集』に出つ。×（上面：×『明齋集』卷十八「與鄭士仰」の肅宗廿三年丁丑五月〔即彼四十九歳時〕に曰く

「前日、陽明之書爲士友之所憂者、未知今已捨去否、無由一得盍簪、慰此離索。」

以て明齋に取りて其高弟の一人、彼か姚江に奔りしは、老來常に憂愁措く能はざる所なりしなり。其後六年甲申二月書に更に一層切なる衷情を述へて彼の反省を促せり。

「書中貽累之語、不覺發笑。果使左右終陷於陽明、不能自還、則吾輩在朋友之後者、雖一不通書、安能免後世之責乎。所媿、自家意思、已闌珊廢弛。爲人爲己都無著實工夫、以此不能窮討、到底相與求得眞是非而取捨之。」〔與鄭士仰 甲申一月十二日〕

彼の呈師の書中、亦彼の轉學に由りて累を師門に貽すを未安となせる、見るへく、又明齋か、彼か斯の如く異學に轉せるは、一には師たる自身に責任あるを感し、深く憂慮せる心情を見るへきなり。

但し明齋の學風は、之を尤菴等老論派の其に比較すれば、極めて綿密にして實踐を尚ひ空理空論を排せることは、彼の門人等との往復書に見て昭なり。所謂着實工夫なるもの、其の一生の受用なり。其門下より→下面→霞谷の如き一層是方面に進める學者を出沔、其極朱子に慊らず陽明に歸するも必しも怪むに足らざるか、而沔霞谷歸王の後も明齋猶之と絶つに至らず。亦其の學術に一脈相通するあるか爲か。）

〔衷情と信道〕

而沔彼猶其の所信を改むる能はず。壬申〔~~四~~四歲〕四月「答尹明齋書」に其衷情を述へて曰く「所謂王氏之説亦自有本源、雖云不同於程朱、

其指歸則固是一程朱也。然於其一二之間、容有不得不審察者。此所以難言直棄、亦難於爲說。數百年間、凡諸儒紛紛、實以此也。苟非正有不得已者、豈敢徒爲異說、甘自歸於悖亂哉。此惟在仁人深諒而熟察之、誠不敢以口舌縷々也。」

彼の衷情と信道の厚きを見るへし。

蓋し彼か一世に抗して敢然陽明を奉せるは、一には其處世の方針、既に廿四歳科第を弟に譲りて科業を廢せる時に決定し、官途名利に意を斷ち、只た是道に於て自得の境に到りて聖學に於て慊焉たる法悦生活に入るを得んことを欲せり。是に至りて彼の身に取りて國中恐るへき者なし。名門の出を以て官途に意さへなくは、此ばかり許の異學に依りて酷刑に罹るか如き事、萬なるへし。³⁶

【第四冊⇒第五冊】

〔學名、一世を壓す〕

されど霞谷、學名漸く揚り、又官位齡と共に隆きに及びて、彼をおとし擠れんとする者、亦黙視するなく、英祖二年七月に至り持平李廷樸（啓沔）彼を誣誑す。王固より聽かず。遂に三啓に及ぶ。啓に曰く

「程朱以後、道學大明。知行兩進之工、有如車輪鳥翼之不可偏廢。而陸九淵頓悟之說、王守仁致良知之論、背馳吾道、深爲世害毒、餘烈至今未已。此所謂昔之害、近而易知、今之害、深而難辨者也。祭酒鄭齊斗、全背程朱之學、粗襲陸王之說、乃敢曰陸王程朱、雖可謂偕入於大道、而陸王之學如崇禮門、程朱之學如敦義門。此蓋以陸王爲正道、程朱爲旁歧也。其不學無識全昧頭腦、若是之甚已、嘗見斥於先生長者也。特以出入大家稍自修飾之故、節次推遷、濫躋宰列、至玷師儒之席。事之駭笑、孰甚焉。彼固不足與論於道學蹊逕。而如此昧正道尚異教之類、若不嚴加隄防其流之害、安保其不爲馴致於惑世而誣民乎。此誠非世道之細憂。請祭酒鄭齊斗、亟命改正。」〔19日己酉〕

而沔英祖終に聽かず。後憲府復た申啓すれど、

允さず〔李朝實録〕。

蓋し是の啓文の霞谷の人物を批評沔「出入大家稍自修飾云々」と云ふは當らずと雖、既に李朝か國初以來、程朱學を以て官學を立て來りし國民教學統制國家を以て、其の大學の教頭に沔學生の學術と訓練とを主管し、其の學徳に於て彼儀表となるへき不常置の顯職祭酒に、彼の如き（内實）陽明學を奉する學者を任すへからすと云ふは、合理的主張なりと謂はざるへからず。而沔英祖の終に之を聽かざるを以て觀れば、當代彼の學問閱歴及年齢の既に蔚然として一世を壓する者ありしなるへし。

〔朴世采の「王陽明學辨」〕

されば彼か四十三歳肅宗十七年辛未七月に、彼の先進たる朴世采は「王陽明學辨」を作りて陽明學の根本に徹見して之を攻撃せり。是れ、玄石の歿前四年の事なるか故に、其學問、充分成熟の境に到れる時なり。

案するに玄石は本辨中、一言も鄭霞谷の名字を出さずと雖、彼の眞意は則、當世霞谷其人の如き名聲ある壯年學者にして猶私に陽明學を奉する者あるか故に、斯學の或は朝鮮に流行することなきを保し難しとなし、之を障防するか爲に此辨を作れるならん。而して當時、能く陽明學に對して此程迄の理解を有して而して學的に之を反駁する者、玄石の外之なし。玄石の文廟從祀の典に浴せるもの其の所以あるか。

玄石の辨は一古本大學、二大學問、三致良知、四朱子晚年定論の四項を立てて辨す。但し其の所論、畧ほ陳獻（建）の『學蔀通辨』より得來る。陽明學の根蒂に向ての論駁は、第三致良知に在り。

陽明の良知説の『孟子』に本もとつくを擧げて其限に於ては朱子と毫末も相悖る所なし。彼の朱子の致知格物の間に答へて

「孩提之童、莫不知愛其親。及其長也、莫不知敬其兄。人皆有是知而不能極盡其知者、人欲害

之也。故學者必須先克人欲以致其知、則無不明矣。

又曰、窮理者、因其所已知而及其所未知、因其所已達而及其所未達。人之良知、本所固有。然不能窮理者、只是足於已知已達、而不能窮其未知未達。故見得一截。不曾見得一截、此其所以於理未精也。」

と云へるか如し。

而沔陽明は一切窮理を斥けて單に良知を致すことを謂ふ。是れ、淺薄にして未及なる(我か)知識を以て至極となして斜二無二、之を貫通徹して以て知行合一を得んとする者にして危險、此上なし。玄石曰く

「如致知之知、所謂心之神明、妙衆理而宰萬物者。既爲此心之知覺而主於別識、間亦不免眞妄之錯、則自當因是格物之理、致吾之識以底于全體大用之功矣。」

又陽明の四言教

「無善無惡是心之體、有善有惡是意之動、知善知惡是良知、爲善爲惡是格物。」

を擧げて「無善無惡是心之體」の禪宗の提唱する、完全に善惡なる觀念さへ超越せる如來藏佛性の意に外ならず、陽明學は本と禪學なり、頓悟を以て宗となす。但し此を些末の差異を擧げて粉飾するに過ぎず。

「今陽明處中國之地爲吾儒之學、始蓋不勝於一箇厭煩趨簡之念、務欲自託於禪佛之間、而顧視倫常禮樂之懿、亦有所不敢離而去之者、遂乃別立門戶。既以孟子濂溪明道象山爲道統、又以良知爲宗旨而並於致知以一心理合知行爲要法見退溪文集、而又稍摘佛氏之微細處以示異同。仍以道德心性之奧而眩之、文章論說之工而亂之。變易經訓、狂肆震耀、不翅加象山數層。此實禪家頓悟漸修之法、而正亦黃勉齋所謂守虛靈之識昧天理之本、借儒者之言以文老佛之說者。」

蓋し陽明學を、儒教の原旨を述へ儒教内の一學派として觀れば、其の儒教の正軌を逸するこ

と、朱子學に比して更に數層多きことは、古來の學者の充分論盡せる所、復た此に朝鮮に於て反復するを要せず。但た之を一個の獨得の學派にして爲學修養の道を説きし者と觀れば、格別之を是非し誹譏するには及はざるなり。

〔文詞の才〕

霞谷又文詞の才なきに非ず。殊に其詩に往々物理を詠し得道の境涯を詠して讀む者をして反覆諷誦せしむる者あり。

無題

「不外吾心性、天人自一元。如何求物理、轉使亡其源。」〔霞谷集卷七詩 拾遺 [失題]〕

是れ、心即理を二十字に表せるものなり。

暮雲、四首の一

「小戶能容月、虛簷自引風。夜涼還獨坐、清意也無窮。」

山齋

「朝日上東嶺、烟靄生虛牖。不知山外事、抽葛寫科斗。」

〔從學門人〕×

(上面: ×霞谷從學の門人(李匡師)李泰亨、全州人、官洗馬。李匡呂、亦全州人、號月巖、參奉[詩に於て(唐を學ひ)近代名家と稱せらる]。李忠翊は詩文共に妙、殊に佛教に淹貫せるは、近來無雙。

~~李匡師は圓嶠、(英祖卅一年乙亥)其の宮寧に謫せられし後の詩文を集めし『斗南集』中師を祭る文あり。如何に其學と徳とに敬服せしかを證す。~~

李匡師、圓嶠の『斗南集』に「書贈稚婦蘭紙」の一文あり、丁丑十二月八日の作なり。此に於て彼か如何に霞谷に敬服敬事せるかを見る。圓嶠亦一代の才人、眼高く識秀り、容易に人に許さず。而沔霞谷に於て斯の如し。亦霞谷か時學に叛きて獨立獨尊して獨殊の修養を積み、深く人を感化せしむる者ありしを想はしむ。△前頁上面: △

「余慕霞谷鄭先生德義、積歳年而居稍左。辛亥春[英祖~~十一~~六(七)年]始入江都、拜先生牀下、聞實學之要。其明歳復入留屢月、益有聞。後或往來。丙辰八月[英十二年]盡室入江都、專爲卒業計。舟次田津、聞先生已觀[飯?]化、麻經趨哭、至觀墓。……蓋先生之學、專於内實於己、如喬岳之蓄、大海之藏、榮華不顯於外。待接人、言辭詳盡、仁和旁暢而人自畏之也。余識淺、不敢知造道至何地、而概其去外誘、存實理、則無餘境矣。古所謂篤恭者、先生其幾矣。德者之闕、愈久而愈悦服、不能忘者、獨先生耳。」

斯くて圓嶠は霞谷の胤の女を其子に娶せり。本書に依りて當時霞谷か時學に對して自ら實學を以て標榜せるもの見るべく、此にも其の王學の骨髓を看破せるものあるを知るへし。而して當時少年英俊、傳統舊型に嫌らさる者の悦を其の教を聴きし者多かりを想望すへし。×前前頁上面：×高弟三人皆少論に屬す。

椒園の子勉伯觀水居士、觀水の(勉伯の)子は遠沙磯、沙磯の子象學、象學の子即建昌〔1852～1898〕寧齋なり。而して沙磯以來、江華に移住す。江華の全州李氏、其の學問文章を世々にし、其の奉する所は即陽明學なり。寧齋の詞友開城の金澤榮〔1850～1927〕の滄江稿中「李建昌傳」あり。其中

「建昌於文章、猶飢渴而尤長於古文、潔淨剛深、得於曾鞏王安石之間者爲多。經理則多主王守仁。」と云ふもの、實際なり。

寧齋は李朝末少論第一の文章作家、又憂國至情あり、黨中俊髦皆仰て領袖となし、其の驥尾に附する者多く、是陽明學の少論家庭に行はれしこと想像するに難からず。東萊鄭萬朝氏は彼の家と世誼あり、萬朝茂亭氏の長男は寧齋の女を娶ると。其家庭の學専ら陽明學なりしと云ふもの淵源、洵に來るあり。

李忠翊、號椒園、又一號水觀居士。昭和十二年五月に至りて始めて其家に秘傳する所『椒園

遺藁』乾坤二冊を閱る前前頁上面：図得たり。坤は文、乾詩集なり。文集に「從祖信齋先生家傳」の一章あり、李令翊字幼公の行狀なり。信齋は即員嶠李匡師の子なり。彼の同袍攻學の誼あり、尤も親善なり。是文中、椒園の初に陽明を學ひて後に略朱子に歸正せるを證するに足る文辭あり。

「忠翊、少先生六歳。幼而乖發、幾十歳而復相見。時忠翊駭肆不可詔告。先生憐愛鑄責如同胞。小別復會、夜輒媿々達明、在旁者亦不知爲何語也。每有辨論辨、始鋒厲守己不相下、久乃各惘然可、無不同者。忠翊嘗喜王氏致良知之說。先生曰王氏之學浮高染禪、須學晦菴爲正。忠翊久而復信其然。先生疑尚書古文之贗、忠翊不然。先生往復辨詰甚苦、忠翊遂服。先生謂、大學格物即指物有本末、而致知者致知所先後之知也。忠翊謂、格物即誠意之方、而若以物有本末之物知所先後之知、指爲格物致知之物與知、則文義未協、竟未相合。而同謂古本無錯脫、同謂一篇專言本末先後而知所先後爲其要、則亦未爲不同也。」

則椒園の「大學說」は、或は朱子に循ひ、或は陽明に循ふ者なり。）

〔七〕金阮堂

〔一 事蹟〕(20)

〔朝鮮文化の掉尾の一盛代〕

朝鮮人士の清朝廷に對する敵愾的感情、漸く緩和せられ、清朝の民は即三代宋明の漢民族にして、其の優逸なる文化は其儘之を茲土に遺存することを知りて、清朝文化の眞相理解せられ、彼我の學者詞章家の風雅交際亦漸く開け、清朝崇拜の時代再に移れるは、英・正二王の治世にして、亦是れ朝鮮文化の掉尾の一盛代を現出す。

前に叙せる丁茶山其人の學問の如きも亦實は

其の時代の一産物にして、單に朝鮮在來儒學の窟裡に在りて飛躍的に其の事業を成就せるものには非ず。彼の爲に新しき研究の道及新しき資料を提供せるは、皆清朝學者の著述に外ならず。

されは是時代清朝の學者及名人と國境を超越せる心交を締結せる者は、前後其人に乏しからず。例へば洪大容、洪良浩を始として（朴齊家、李德懋、朴趾源、柳得恭、南公轍）李尚迪、朴珪壽、申綽等は皆是れ、清朝有識者の爲に重せられし者なり。而して其の學問、文章、詩に在りて清朝の影響を受けざるなく、彼等に由りて朝鮮の儒學及詩文は明白に一時期を劃す。×（左脇：×彼等は皆在來朝鮮の學者文人に對して新人と稱するを得へし。）

〔朝鮮漢學の絶頂〕

而して我が金阮堂は、是等韓末新人間に在りて尤傑出せる者なり。其の儒學其の文章及其の書畫皆際立ちて（悠然として）清朝の第一流者の藩籬に闖入し彼地の彼を親しく識り、若くは文辭を通して識る者をして瞳然として張膽明目（して推）敬措く能はさらしむ。若し（朝鮮に於ける）清朝風の學問學を以て之を言へば、阮堂は正に其の第一人者にして、彼に到りて朝鮮の漢學は其の絶頂に達せりと謂はざるへからず。

但し彼の博學識見及文章の卓逸、彼の如きを以て一生一個の纏りたる著述を遺すに至らず。畢（彼の學問は）彼の短き辨攷乃至親知門友の問目に答へし書牘の外、之を見るへきなし。是點に於て丁茶山とは全く其の蹟を異にす。◎（上面：◎彼の門人閔奎鎬〔1836~1878〕は『阮堂全集』巻首の「阮堂金公小傳」に於て「彼著述を喜はず。少日纂言する所のもの之を焚くこと再。今流傳于世、不過爲尋常往復之書、而道義之正、心術之明、經禮之發揮、可見公大畧也。」と云へり。其焚きし所のもの恐らく一部の著述を成すものには非らん。→下面左脇→「與權敦仁」第十八書に亦

「小人之於平生、不欲以著述自見。如此文字、便不欲留稿。」）

是れ恐らく資性の相違に因るなるへし。

阮堂は、其書の示すの如く彼以前の書家に就きて覃思沈潛、書道を究め、而して終に之を擺脫して阮堂一個の書を出し、前に阮堂なく後に阮堂なし。而して専ら一流の書なるか故に縦横自在、變化神幻、端倪すへからざると同時に謹嚴檢束、一劃一筆に~~兀々として~~細心するの迹なし。

學問亦之に類するか。清朝諸家の名著殆ど皆之を讀破し、漢學に對する確乎たる認識を得。而して此の博識と識見とを以て縦横に（清朝）宋學、明學（及清朝諸家より更に進みて佛教まで）を批判して~~聖學の眞髓を發揮~~（以て）自個の立場の高きを示し、此を以て満足し、又此に於て時と力とを費して他に一部の纏りたる經解~~弊~~（經）說を（に着手し、又之を）竣工するに至る能はさりしならんか。

彼文章亦然り。其の短篇小品尺牘³⁷等に在りては文字の豊富、語句の自在、而して飽く迄洗鍊して首尾中間、緊張して一字の無用虚飾なく、完全に鮮習を蟬脱して~~殆ど何人も~~之を清朝人文集中に交ふるも、殆ど何人も之を甄別する能はずと雖、未だ金石文の大作を遺さず。是種の所謂館閣體古文、莊重典雅を尚ふ文種に在りての彼の力量を知る能はず。

故に彼の博學見識を以てして其の著作に就て批評すれば、經學者、道學者と云ふよりも寧ろ文人風の學者或は博學多才なる文人と看るへきか如きに至れり。

彼の畫亦然り。謹嚴なる山水花鳥に就ての才筆は吾人、之を知らず。其の蘭梅（竹）石に在りては眞に清韻神思、古人を思はしむ。要するに亦文人畫の範疇に出ず。

此にも亦、丁茶山の南人學風を代表して其の第一人者たるに對して、彼は老論學風を代表して洒落自在、識見を以て自ら足れりとなして

兀々として一書に註し一經を解くか如き鉛槧業を長所とせざる、自然の性格の然らしめし所なるか。

〔出生〕

金阮堂、慶州の金氏、名は正喜、字は元春、號は阮堂、又秋史。戸曹判書金魯敬の子なり。魯敬は頤柱の四男、頤柱は漢蓋の嗣。頤柱の兄漢柱の三男〔文脈不明〕。漢蓋は領議政興慶の子、英祖の第二女和順翁主に尚し月城尉に封せらる。父魯敬は、字は可一、酉堂と號し、彼は酉堂の長男³⁸なり。明喜、相喜は二男三男なり。彼は正宗十年丙午六月三日、忠南禮山郡新巖面に於て生まる。(上面：母俞夫人懷妊廿四月に産生まると。)

〔朴齊家に從遊〕

(傳に曰く) 幼より聡英絶群、性亦孝友。既に家庭に在りて群籍を博覽す。後京城に来るや、當時の最新の知識朴齊家に從て遊び、大に清朝學術に就て知見を開くを得たり。然れども果して朴齊家か阮堂の學問の師と謂ふべきか、或は單に從遊せるに過ぎざるか。

鄭寅普〔1893~1950〕は『阮堂全書』の序に於て、阮堂は家庭に在りて父酉堂の教を受け、酉堂既に閑識博學、充分に彼の師たるべき人なりと云ふ。~~今阮堂は~~朴齊家は其師朴燕巖と同年純祖の四年五十五歳にて死せり。于時、阮堂僅に十八歳なり。されは縱令、朴齊家より學問文章を學ひたりとは猶其の蘊奥に到るべきに非ず。されは朴齊家~~と~~と彼の關係は、師弟と云ふよりも、屢々其家に入出入して諸種の學問詩文上の話を聽きし程度のものなるへし。×(上面：今『阮堂集』中、彼か朴齊家を師とし事へし證左なし。)

而して當時は、獨り楚亭のみならず、燕巖を始め、柳冷齋亦生存して彼等の新知識を通して清朝の學問、京城學人間に紹介せられつゝある時なれば、阮堂か宋明心學の外に(別に)漢學の一域あることを知るに至れるは想像するに難

からず。故に彼か夙に朝鮮の清朝文化に憧憬を懷き嘗て志を述へて曰く

「慨然起別想、四海結知己。如得契心人、可以爲一死。日下多名士、艷羨不自己。」〔此詩、藤塚教授「金秋史の入燕と翁阮二經師」〔『東方文化史叢考』1935〕の論文に引く。『覃研堂詩集』に見えず、不知其出所〕

〔清朝名人との交誼〕

適に(純祖九年)彼二十四歳、父酉堂~~四十四~~^{たま}歳冬至使兼謝恩使行の副使として燕行す。彼幸に一行に加はりて北京するを得たり。于時酉堂四十四歳。彼是行、北京に留ること三、四旬、盛に名士と締交し、筆談を上下して其半生の學問上の懷抱を發す。清朝名人、愕然として海東此の神駿を出すを驚く事は、前述藤塚氏論文に詳出す。

而して是等名人の内、翁覃溪と阮芸臺二氏は、當代清の學界耆宿、四海の仰きて以て泰山北斗となす所、而して尤阮堂を認識し、其の交誼一生^{かわ}淪らす。阮堂後來の研學の二氏に負ふ所(極めて)多し。×(上面：×阮元の『皇清經解』成るや、先づ其の答に其抄本を寄來れるは有名なる美談なり)

其外、曹玉水、李墨莊、吳蘭臺、朱野雲、李心蒼、金宜園、近園兄弟等の名人あり。今阮堂詩に〔『阮堂先生全集』卷九〕「我入京、與諸公相交、未曾以詩訂契。臨歸不禁悵觸、漫筆口號」の長古一章あり。中に詠する所の心交名士翁蘇齋、阮芸臺、朱野雲、翁氏樹培・樹崑の二子、李心蒼、曹玉水等あり〔三山、夢竹、介亭三氏未詳〕。其の末句に曰く

「却憶當初相逢日、但知有逢不有別。我今旋踵即萬里、地角天涯在一室。生憎化兒弄狡獪、人每喜圓輒示缺。烟雲過眼雪留爪、中有一段不磨滅。龍腦須引孔雀尾、琵琶相應蕤賓鐵。黯然銷魂別而已、鴨綠江水盃中渴。」

彼歸來、研究益々進む。既にして十年を經過

し、純祖十九年己卯生員試に及第し、辛巳文科に及第し、説書檢閲より内閣待制に進み、大司成より兵曹參判に至る³⁹。

〔家禍〕

（上面：傳に曰く、純祖十九年己卯、趙萬永の女を揀擇沔王世子となすや、金魯敬、貪官の女を王妃に冊するとは何事そやと言ひしと云ふ。是事、評判となりて彼は世の攻撃を受け古今島に謫せらる。然れども既に沔王世子との關係も悪からず、王世子、本と文學を尚ひしより、阮堂亦親愛せらる。而沔是間、敵黨の魯敬か金璐の走狗となりしと云ふか如き事實も生せるか〔×→右側→ 是事は、恰も彼の金龜柱〔英祖繼妃の兄弟〕か、正祖か王世子を冊せらるゝト逆賊の子を以て後嗣となるやと云ひしと傳へられ、後正祖朝誅せられしと同性質の事件なりと見るべく、當時黨論盛なる時代の一言一行の戒愼すへきを見るへし。萬永は寅永の兄に沔貪官職の孫なり。〕）

然るに純祖庚寅五月王世子急逝し、從來王世子を取巻きて勢力を張りし洪起變、金璐、趙寅永〔洪は趙曠外孫、趙寅永は曠の孫、神貞王后の父豊恩府院君萬永の弟。金璐は王世子に勸めて神貞王后と内寢せしめて以て憲宗を生むに至らしめしと傳へらるゝ嬖臣也。〕然るに憲宗の妃（孝顯王后）は安東金氏祖根の女、十歳王妃に冊せられしか、神貞王后、性悍擊に沔己か前に純祖の妃安東金氏明敬王后の爲に虐待せられし事ありとて、此の幼少なる孝顯王妃を甚虐待し、嚴寒三冬早朝、母后を晨省するや、火氣なき廣殿に久しく坐せしめて歸るを許さず、遂に十六歳にて死するに至らしめしと傳ふ。故に安東金氏と豊壤趙氏とは同一老論なるも甚た相悅はず〕に對して俄に藥院醫官の責任を本に激烈なる彈劾出て、殊に金璐は、殆と聞くに堪へず見るに堪えざる言辭を以て劾せらる。恐く又實に璐は、從來其の勢威を利用して貪贓度なく私富を積み居住を奢にし、一世の指彈を買居たりしなり。

然るに璐に對する彈劾は、一轉して金魯敬に

移來り。（上面：純宗庚寅六月〔→八月〕副司果金遇明疏沔魯敬を彈劾して曰く

「噫嘻、前監司金魯敬之罪、可勝誅哉。渠以禁衛之餘、實無寸長於人、而歷敷華要、罔非家世之所無、滾到崇顯、亦豈本分之近似。則其所以感激圖報、宜倍他人。而惟其貪鄙之性、得失是患、内外居官、循私恣虐、平生能事、機利趨勢。及夫丁亥代聽之初、大生惶樹、計在固位。奴顏婢膝、向金璐而乞憐數十年、生死不得抑情仕宦之說、是何凶悖而肆發於人家宴席稠集廣會之中。聞之者或曰、狗彘不若、白首殘年、何所不足甘自爲此。人若問之、亦不敢分疏、而恬不知愧、貪進不已。……⁴⁰及長、度支數十萬官儲、隨手罄竭殆本。是預下排年而剩歸於私橐。」

彼か璐に攀縁して阿附度なく以て亦私利を得、判書に進み監司に至るを彈劾す。純祖頻に調停すれども、三司聽かず。又首相南公轍等亦三司に應して之を劾し、遂に（古今島に）配島せらる。所謂彼の家の禍、是なり。

魯敬、島にあること四載。阮堂、是間毎夜、天に祈り、亦寒暑裘葛を易へさりしと云ふ。爾來彼の家、振はず、世は復た安東金氏の勢道に歸す。

憲宗庚子に至り、又曩に純祖庚寅年、副司果尹尚度なる者上疏して、金璐の彈劾と聯關して戸曹判書朴宗薰〔少〕、前留守申緯〔少〕、御營大將柳相亮〔 〕三人の失行を極口彈劾す。朴宗薰に對しては其の金璐の腹心たりしを強調す。其言極めて陰毒に沔到底士君子の口に筆にすへきに非ず。況や人君の供覽すへきに非ず。終に温厚たる純祖も之に批して

「（教曰）爾則當處分矣。又教曰、人心雖曰陷溺、猶當有一半嚴畏忌憚之心。所謂尹尚度者、獨非朝鮮之臣子乎。其論三人、語極陰慘、至曰爲人所不忍爲者、此果何謂也。如渠郷愚蠢之類、豈能自辦。必有叵測指使之入、欲爲乘時煽亂之計、固當嚴鞫得情、以正人心、以息邪說。而屢

回思量、不欲索言、反傷事面。姑從惟輕之典、尹尚度楸子島定配。」

然るに（十）年を歴て憲宗の治世となるに従て尹尚度上疏問題、尚鎮定せられず、其八月尚度は復召鞠せられて凌遲に處せらる。

〔大靜に圍籬安置、北青に流配〕

而して其の翌月三司合啓に曰く「賊度庚寅兇疏 即亘萬古所未有之劇逆大慙也。而暗地授意者、正喜也。指使粧出者、曰成賊陽淳也〔金陽淳〕。」

右議政趙寅永筭請沔（遂に）正喜を大靜に圍籬安置することゝす。（上面：若し阮堂か尹尚度の本疏の黒幕なりしとせば、其の狙ふ所は、金璐及其腹心朴宗薰を強く弾劾して以て、魯敬か金璐の爪牙婢僕たりしと云ふ反對派の攻撃を無謂に歸せりめ、兼ねて魯敬一派に深く仇せる少論申緯等を劾して以て憤懣を漏し、所謂一鳥二石の妙手となさんとせるか。）

（上面：阮堂は安東金氏の中、楓阜の子弘根と相合はず、種々怨憤を重ね、弘根常に之を殺さんとす。爾他の安東金氏とは必しも悪からず。金炳學の如き是なり。）

當時は黨争激甚に沔、正に刀箭鋒鏑の飛閃せざる亂世なれば、敵も味方も神謀鬼計、到らざるなし〔朝鮮歴代諸王中、非命に殞落せりと謂はるゝ者、宣祖、景宗、正祖、憲宗、哲宗あり〕。阮堂、果して尹尚度の疏文に授意せるか否か、余は判断すること能はず。終に阮堂は大靜に謫せらるゝこと十年。◎（上面：◎此間の辛酸は、彼の京城知友殊に權彝齋に送れる書中に詳なり。充分に所謂南海の瘴氣の爲に苦しか如し。）

宥されて歸るや、哲宗辛亥（六月）彼の老友、時の領議政權敦仁、~~純祖憲宗の（入）廟の論に由りて斥けらる~~（の爲に眞宗を祧するか否か△上面：△禮論起れるト、方便説を執りて、哲宗に取りては眞宗は曾祖なるか故に祧すへからず。但し之を存すれば~~至~~（六）室となりて諸侯五室

の禮に反す。然れども前例に依りて是場合には室數に拘せざることゝなして附祧せざるへしと主張し、世論大反對を惹起す〔但し實際は此説用られず、眞宗は祧せられたるなり〕。）

而沔阮堂、實に其の背後の人なりと言はれ、復た北青に謫せらるゝこと二年放還して丙辰卒す。壽~~七十一~~。是時の兩司の啓文には、頗る阮堂の當時多く反感者を其學術上の主張に因りて有せるを證すべきあり。

「噫嘻、痛矣。國綱雖曰漸頹、世變雖曰層生、豈有如金正喜之至凶且妖者哉。蓋其賦性奸毒、宅心回曲。薄有才藝、一是背經而亂常、工於揣摩、不出~~一~~兇國而禍家~~一~~、世濟其惡。是父是子、陰結匪類、如鬼如蠅、爲世不齒、亦已久矣。其父追奪罪人魯敬、干係何如、負犯何如。渠輩之得道收司、渠身之止於島置、已是失刑。而年前宥還、特出於先大王好生之聖念。渠若有一分人心、一分臣節、則固當歸守先壠、縮伏自靖、含戴沒齒。而猶復縱肆無憚、跳踉惟意。兄弟三人、偃處江郊、出沒城圍、廟堂事務、無不干與、朝廷機密、百計窺覘、鑽刺曲逕、締結掖屬、情踪閃秘、無所不至。乃與平生死友權敦仁、合而爲一、朋比固結、暗地慫恿、謂渠父可以伸復、謀脫逆名。」

◎（上面：◎是の如く（當）世の官學派の人々は阮堂の學術に對して早く異學たるの（疑惑的）耳目を聳動せり。是れ阮堂か著述を好まず、又其の折角卒業ある著述をも再焚せる、一個の有力なる原因か。）

謫にあること二年に沔放還せられ、丙辰卒す。享年七十一。『實録』十月に史臣記して曰く

「前參判金正喜卒。正喜、吏判魯敬子。聰明強記、博洽群書。金石圖史、窮徹蘊奧。艸楷篆隸、妙悟眞境。時或行其所無事而人不得以雌黃。與其仲弟命喜、填箠相和、蔚然爲當世之鴻匠。早歲蜚英、中罹家禍、南竄北謫、備經風霜。用舍行止、世或比之於有宋之蘇軾。」

棺を掩ふて事定まる朝鮮に於て亦然り。流石『實録』の史官も彼の溘然として長逝するに至りては、いと公平に其一生を月旦せり。以て彼の評となすへし。

大院君は、彼の書畫の高弟なり。彼の没後九年に沔攝政となりて、蛟龍の雲を得たるか如く、世は彼の物となれり。若し阮堂、猶生存して其時に及ひたらは、或は掉尾一振して半生の寂寞を轉換せるか知るへからず。

〔晩年の書畫禪三昧と茶〕

（前頁上面：彼晩年、漢江對岸冠岳山下の果川に閑居し、書畫禪三昧に入り、尤も茶を愛し、智異山の僧草衣老等に囑督して每期茶を遠送せしめ、之を喝して病を忘れ、嗒然と沔日月を送れり。『阮堂集』卷五に「與草衣書」廿八篇あり。其中、督茶の書甚多し。例へは第卅四

「有書而一⁴¹見答。想山中必無忙事、抑不欲交涉世諦。如我之甚切而先以金剛下之耶。第思之、老白首之年、忽作如是可笑。甘做兩截人耶。是果中於禪者耶。吾則不欲見師、亦不欲見師書。唯於茶緣、不忍斷除、不能破壞。又此促（茶）進不必書、只以兩年積逋並輸、無更遲悞、可也。」

又第卅五に曰く

「忽從轉遞、見書並茶包。爲茶香觸、便覺眼開。書之有無、本不足計也。第齒疼可悶、獨喫好茶、不與人同。是檜中泥佛、亦頗靈驗、施之→下左脇：一律耳。可笑。此狀、不得喫茶而病、今且茶而愈矣。可笑。」×→次頁上面：

×且彼、遂に茶に依りて禪進み、遂に茶禪一味の三昧境に入る。「與草衣書」廿六書

「僧來得草槭、又得茶包。此中泉味、是冠岳一脈之流出者、未知於頭輪甲乙何如。亦有功德之三四、亟試來茶。泉佳茶佳、是一段喜懽緣。…⁴²…且於近日、頗於禪悅、有蔗境之妙、無與共此妙。諦甚思師之一與掀眉、未知以遂此願耶。）」

二 經說 (19)

阮堂の耽羅に謫せられしは、既に老（六）旬老年なれば、彼の學問も立つ所ありし時代なり。×（上面：×是事、戊戌八月廿五日、權敦仁の名を以て（~~汪慈~~）孟汪孟慈に贈れる所の「海外墨縁」の雄篇に就て見るへし。）而沔彼は爾後十年、完全に讀書工夫の時期を恵まれたり。

由來朝鮮の中央の大官の生活は非常に多事繁忙にして、官廳の事務は大抵之を吏屬の手に委すれども、所謂官場裏面の不斷の劃策運動、之に伴ふ（來訪往訪の）奔走と嘸宴、加ふるに宮中に於ける儀式は、之を公故と稱して毎月數次あらさるなく、あれは全一日を銷す。故に老論名家の子弟の如きは一旦科擧に及第すれば、輒ち此の忙しき生活に没頭して一生讀書究理や鉛槧の時期なし。但た彼等か一朝君譴を負ひて遠謫せらるゝや、始めて無事多閑の歲月を恵まれ、有志の者は靜に書硯を伴とする生活に入るを得へし。但し其の罪甚重く彈劾烈しくして身命朝夕を測られざる者に至りては到底是の餘裕なし。

我か阮堂は、始は金弘根等外戚の私怨に由りて危地に在りしも、漸く年所を経るに従て安定に入り、且又其の寄宿の主人も頗る人情ありて旅思を慰め、(彼の)家必しも貧寒にも非ざるに往々知人の月に節に米鹽を送來るあり〔『全集』に)彼「與張兵使寅植書」二十篇を収む。寅植、字は公賓、號默菴、玉山人、武科、官左尹に至る。當時濟州に在官せるか如く月に彼に食資を贈れり〕て乏しきを訴へす。

又在京學問文筆の友等は、彼ならてはならぬ諸件あるか爲に繁頻に彼に書簡を送り（て所問あり）。彼れも亦遠慮なく彼等に向て新書奇書をの燕京よりの購求を託す〔例へは「李藕船に送る書」參攷〕。従て讀書の興、寂寞たらず。宥還して未幾に復北青に謫せらる。（賜環）晩年に入り果川に退老沔終る。

故に彼は六十以後、其の學問及書畫詩文共に

大に進める者と視るを得べく、但た其の著述の前舉の理由に因り纏まりたる著述の畢業せらるゝなく、當時清朝學者に比して甚た事業の寂寞なるを遺憾とす。今奎章閣に藏する所の彼の著は『阮堂集』、『覃壘齋詩集』及『阮堂尺牘』の三種あり。

而シテ昭和八年癸酉、玄孫翊煥、積歳其全什を^{あつ}哀めて九年工を卒へ、『阮堂先生全集』五冊本となす。集むる所尤多しと雖、編纂の工密ならず誤字少からずして、之を讀むに安心をおく能はず。且尤大なる失態は、卷一「實事求是説」の後に清朝の『閔杞園魯行』作する所の文を附して以て「附後叙」となし、亦彼の作に係かるとなせるに在り。蒐集積工、稱すへしと雖、粗漏の缺典多きは惜むへし。

阮堂は朝鮮に於ける漢學派の最高峰なるは前述せり。彼は尤、翁蘇齋と阮芸臺とに傾倒す。而シテ蘇齋は、漢學派中にありて尤窮理の一門を棄てず、經訓は漢儒に取るも理義は程朱の法門に循ふ人なり。阮堂は、蘇齋の是説に耳熟眼熟せり。而シテ阮堂の經學の立場は、蘇齋に比して一層醇漢學派なるを認めざる能はず。阮堂是點に於て彼は芸臺の學風より接近す。其の自ら阮堂と號して思慕の深意を寓するも此に存す。

〔儒學に對する根本的主張、聖學・實學〕

彼の儒學に對する根本的主張の見るべきは、先づ「學術辨」一篇を推さるゝへからず。本篇に於て彼は支那儒教學術の大凡四變を述ふ。冒頭に曰く

「學術之在天下也、閱數百年而必變。其將變也、必有一二人開其端而千百人譁然攻之。其既變也、又必有一二人集其成集而千百人靡然從之。夫譁然而攻之、天下見學術之異、其弊未形也。靡然而從之、天下不見學術之異、其弊始生矣。當其時、必有一二人矯其弊、毅然而持之。及其變之既久、有國家者繩之以法制、誘之以利祿、童穉習其説、蓋〔→耄〕蓋不知非而天下相與安之。天

下安之既久、則又有人焉、思起而變之。此千古學術之大較也。」

斯くて西東兩漢は各經各々學官ありて前代よりの師承を繼述して敢て喪はず、是を一人に集成せる者、鄭康成なり。魏晉以還、永嘉〔晉懷帝西三〇七—三一二〕に至りて西京玄學書、所謂漢學遂に地を掃て空しく、此に至りて學術の第一變現る。王弼の『周易』、杜預の『左傳』、梅賾の『古文尚書』の如きは是の代表なり。

唐に至りて貞觀年間、孔穎達等『五經正義』を撰するに至りて『周易』に王弼韓康伯の註、『尚書』に梅賾の上る所の孔氏傳、『詩』に毛公訓詁傳及鄭氏註、『春秋左傳』に杜預註を用ひ、遂に天下の權衡となり。此に至りて鄭康成服子慎の學、寢の微なり。是學術の第二變なり。

宋に至りて四書(の名)高く六經の上に出て、漢唐諸儒の(經)説注解は之を視ること弃髦の如く、元に至りて其の皇慶二年詔して『易』に程氏朱氏、『尚書』に蔡氏、『詩』に朱氏、『春秋』に三傳及及胡氏、『禮記』に古注疏、『四書』に朱氏章句集注を用ひ、明國亦之に因る。是れ學術の第三變なり。

(明末) 清朝に至りて俄然と反宋學術勃興し、程朱を譏彈するを以て能事となす。是れ學術の第四變なり。

而シテ阮堂か何故に漢學に歸し、鄭玄を尊信するか。彼に「漢儒家法説」ありて此に三ありと云ふ。即一守師説、二通小學、三以字解經、是なり。故に漢儒の經解は、先秦以來の古法を傳守し、孔子の正意は此に依りてのみ後世に之を窺ふを得となす。是れ、今日に於て(日支)學者の尋常茶飯の見解に過ぎすと雖、當時朝鮮の學界に在りては亦駭世の特見と謂ふを憚らす。鄭玄を尊信するも是意に外ならざるは、前に丁茶山の『易』説項に於て引ける彼の「與丁茶山書」に明なり。鄭氏の注は縱令今日より視て可疑ありとも、是皆師説(家法)なるか故に、妄

に一知半解の末世の見を以て之を（疑ひ之を）攻撃しすへきに非すとなす。故に「漢儒家法説」を結ひて曰く

「故家法精經學明、家法棄經學廢。謹授受研六經。家法不失、孔書乃明。」

然らば則、此の漢學の家法を通して觀得たる聖學は、如何なる學か。彼は之を實事求是と稱す。實事求是は『漢書』河間獻王に出て、顔師古は

「務得事實、每求真是也。」と注す。されば是語は（一方の）攷據派の正法眼藏たること勿論なり。

阮堂は「實事求是説」を作りて更に其の意味を擴張して聖學の本體を謂ふとなして

「夫聖賢之道、在于躬行、不尚空論。實者當求、虛者無據。」

と云ひ、實とは空理空論、徒に高遠に驚せて脚下の實踐躬行を遺るゝものと正に相反す（◎）るものとなす。（上面：◎同説「附後叙」にも

「三代之學、皆以實也。實者、道義也、德行也。」）

是に於てか程朱等か、訓詁の學か徒に字句の末義に没頭して聖人の心を領し得ず、解經萬卷、畢竟一介の氣節、一個道行の見るへきなきを舉言ふと（之に倒）逆想をなす。阮堂は、漢儒に在りても、宋儒の提唱する性道仁義等を説かざるに非ず、唯た時人皆知りて而して之を躬行するに力めしか故に、深く論するを要せざりしのみと。

「漢儒于經傳訓詁、皆有師承、備極精實。至于性道仁義等事、因爾時人々皆知、無庸深論。故不多推明。然偶有注釋、未嘗不實事求是也。」

故に漢學に於て、聖學の解釋と其の體認及實踐共に備はりて缺くる所なし。然るに晋に至りて人々好みて老莊虛無の學を講し、隋唐宋に至りて佛教、風の如く流行す。是に至りて（儒）學、此の影響を受けて學人相率きて空疎の論議に墮し、實事求是、復た尋ね難し。彼等は師承

を棄て小學を遺れ、字に據らず觀念に依りて經書を解す。是に至りて實事求是か事實に就て眞を求むるの意となる。

〔程朱彈譏・陸王攻撃〕

但た阮堂は、猶程朱を彈譏すること、清朝經師の如く無遠慮ならず、其尤攻撃するは陸王に在り。「實事求是説」に曰く

「自晉人講老莊虛無之學、便于惰學空疎之人而學術一變、至佛道大行而禪機所悟、至流于支離、不可究詰之境而學術又一變。此無他、與實事求是是一語、盡相反而已。兩宋儒者、闡明道學于性理等事、精而言之、實發古人所未發。惟陸王等派、又蹈空虛、引儒入釋、更甚于引釋入儒矣。」

然れど實に阮堂か朱子をも陸王と相差なく引儒入釋者となすこと、「理文辨」⁴³に朱子か（『論語』〔「吾道一以貫之」〕に）聖人之心渾然一理と解するを評して、殆と朱子釋氏『論語』に於て孔子の『論語』に非すと謂ふに見るへし。「私蔽辨」結尾に

「夫以理爲學、以道爲統、以心爲宗。探之茫茫、索之冥々。不若反求諸六經。」

と云ふに疑ふへからず。

又「格物説（辨）」を作りて格を至ると訓し、物理を窮むるには非ず。事物に至るにして即凡家國天下五倫の事、身を以て親しく其處に至りて而して之を履み實行するなりとす。故に格物は止至善と知止と皆同一義なりと辨せるも、理を尚ふ朱子學の根本を排撃せるなり。

〔禮：聖門に於ける普遍法門〕

是の如く阮堂か聖學を以て實學（に於て、至りて平易なり）と視るの結果、當然禮を以て聖門第一義（に於ける普遍法門）と認めて、仁のは即ち性、天道と同じく上達の法門に屬すとなすに至る。「禮堂説」一篇、彼の氣炎萬丈を見る。曰く

「論語、記孔子之言、備矣。但恒言禮、未嘗一言及理也。……釋氏者流、言心言性、極於

幽深微眇。適成其賢知之過。聖人之道、不如是也。其所以節心者、禮焉爾、不遠尋夫天地之先也。其所以節性者、亦禮焉爾、不移談夫理氣之辨也。是故冠昏飲射、有事可循也。揖讓升降、有儀可按也。豆籩鼎俎、有物可稽也。使天下之人、少而習焉、長而安焉。其秀者有所憑而入於善、頑者有所檢束而不敢爲惡、上者陶淑而底於成、下者亦漸漬而可以勉而至焉。聖人之道所以萬世不易者、此也。聖人之道所以別於異端者、亦此也。後儒熟聞、夫釋氏之言心言性、極其幽深微眇也、往往怖之、愧聖人之道以爲弗如。於是竊取其說而小變之、以鑿聖人之遺言、曰吾聖人固已有此幽深微眇之一境也。復從而闢之、曰彼之以心爲性、不如我之以理爲性也。嗚呼、以是爲尊聖人之道而不知適所以小聖人也。以是爲闢異端而不知陰入於異端也。」

又曰く

「顏淵問仁。子曰克己復禮爲仁。請問其目。曰非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。顏淵曰夫子循循然善誘人。博我以文、約我以禮。聖人舍禮、無以爲教也。賢人舍禮、無以爲學也。詩書博文也、執禮約禮也、孔子所雅言者也。仁者行之盛也、孔子所罕言者也。……夫仁根於性、而視聽言動則生於情者也。聖人不求諸理而求諸禮。蓋求諸理、必至於師心。求諸禮、始可以復性也。」

是に至りて彼の所謂實學の意義判然たり。彼は禮を以て聖學の尤普遍的にして尤重要視する法門なりとし、(習)禮の必ず實踐に須つか故に(禮を尊ぶ教學は)即ち實學なりとなすなり。

是に於て當然の結果として阮堂は、大に荀卿を(推)尊し聖宗の宗を傳へし者となす。卷五「與人」に「曾謂荀卿何如人耶。苟不可易也。不詳於荀而隨聲抹倒、即不過蘇氏輕薄之習。孔門之說禮樂、尚有一線不泯者、是誰之力也。戴記纂綴、即從荀而得之者。」

〔卓識なる佛教論〕

阮堂の實學主義は、佛教にも及びて、彼の近世罕なる通釋の學者を以て、恰も其の性理學者に對すると同様なる態度を以て當時朝鮮釋林の耆宿に臨みて、彼等か徒に空疎虛無なる禪理に馳せて佛教の眞乘を求めざるを誡めたり。卷五

「與白坡」「與草衣書」は皆此の消息に外ならず。

彼は朝鮮禪僧か或は祖師禪、如來禪、義理禪の三禪論を弄し、或は臨濟の三玄三要を論し、或は大惠の話頭に没頭して佛法の眞義に昧く、之に悟省するも眞僧の戒行に於て一分を加ふることなきを慨歎す。是れ、遠く既に朱子か佛法の批判に於て、禪宗を以て佛法中の異端と言へると同一趣意なりと雖、當時、佛書を繙くを以て惡臭に近くか如く思倣せる儒者間に在りて、此の卓識なる佛教論をなすは、尤異數となすべく、亦以て阮堂の學識風の博渉と卓識とにありしを證す。

「與白坡第三書」に禪教の歧るゝ所以を辨示曰く

「大槩禪教二門、俱不出於一心字。教門寬緩、禪門急截。佛法之東入中國、未及千年、教門已多藤葛。達磨西來、不得【第五册⇒第六册】不一掃以空之、不立文字、直指本心。此亦八萬四千方便中、隨時方便之一方便。譬之於醫方、如大承氣湯。當是時也、如南嶽馬祖諸人、無不氣吞巨海、力排須彌、足可以抵得大承氣一劑。自宋以後、人之根基、漸不如前。近則氣已衰竭、眞元大下。去達磨已又千有餘年、不得不有大醫王、隨時救人之更有一方便、然後又可以續命。若以大承氣一以試之於元氣大脱之後、無不立死者。今日山家不知此個道理、只以盲喝瞎棒、到頭殺人。寧非大可悲憫。必有一明眼人、一掃此話頭而空之、幢可以復起、慧燈可以再燃。若平生心細究、必有印契耳。」

「第一書」は更に具體的に禪人修行の方軌を示示曰く

「爲今之計、一切掃除從前葛藤、亟就師身上、回光反照。先去嘔癡二毒、次取四分五分律、羯磨毗尼等法、一以勘驗、庶或有現前光明。師今老矣。然吾聖人之言曰朝聞道夕死可矣、師家亦有放下屠刀立地成佛者。師之前路、尚未可量。至於格外向上一竅、又非文字語言所可喻破。試再思之、又重思之。」

阮堂、當時湖南隨一恐らく朝鮮禪林第一の學匠老宿、白坡其人を取扱ふこと小兒の如し。而して其の説く所、淵源あり、根據あり、易ふへからず。然れども如是立言の調子は、必しも對手方をして心服せしめ得る所にあらず。

僧侶は當時賤類の一なるか故に彼に對して反抗の言を酬ふへからずと雖、彼は此の調子を以て朝鮮儒學界を批評し、時の舊派の人々を觀ること宛ら白坡を視るか如し。彼か到底時流に反感を起さしめざるを得ざる所以なり。

彼の倡ふる經學に對して學人の多く反感を懷けるは、前引哲宗辛亥年彼の北青に配せらるゝトキの「兩司彈劾啓文」に

「其賦性奸毒、宅心回曲。薄有才藝、一是背經而亂常。工於揣摩、不出兇國而禍家。」

と云へるに見るべく、是れ、固より阮堂の學術漢學派なること、攻撃の第一原因なりと雖、阮堂の始終昂然として東方に與に學を語るべき人なしと云ふ態度の此か累をなせることなくんばあらず。

されは當時の傳統的朱子學者等は、なへて阮堂の經學に對して反對の立場を取り、其の學説に傾聴して以て知解を開新せんとする者あらず。畢竟阮堂の學は、清朝學術の輸入及其の理解と云ふ點に於て偉とすへきも、朝鮮末造の思想變動異的勢力として觀れば、微々として、遂に傳統的思想の堅壘内に攻入ること能はずして已めりと謂へり。是れ畢竟、朝鮮人の（尤著しき）特性の一たる思想上の固着性かに其の眞因を求めざるへからざる者なり。×

（上面：×而して朱子を極尊して攷據派を無用視するは、正祖大王の平生の主張なり。『弘齋全書』卷百六十二「日得録」文學二に

「今人之最稱博雅者、攷據辨證之學強半。就古人已成之語、鈔謄一過、作爲新見。此可以欺免園村學究、而一使汎濫者寓目、得不齒冷乎。大抵近來所謂名儒皆此類。爲學者、不可不擇術也。）」

〔阮堂學術に反對せる學界代表〕

今此に當時の阮堂の學術に反對せる學界の代表として老論の李敏徳洞山、南人の李源祚凝窩二氏の辨を擧ぐ。

〔老論の李敏徳洞山〕

洞山は徳水の李氏、澤堂植の七世孫なり。略ぼ阮堂と同時代に生存し、山林として優遇せられ、哲宗十二年には任鼓山と共に經筵官に除せらる。蓋し極選なり。李朝晩年の山林として擧ぐる所、洪梅山、李華西、宋錦谷〔大熙（來？）〕、趙肅齊〔秉憲〕、任鼓山、宋淵齋、田良齋等あり、皆老論に屬す。彼亦是の内に列すへし。故に李大王の二年祭酒宋來熙、金炳駿、趙秉憲、任憲晦と並に通政大夫を特授せられたり。◎（上面：◎李大王三年驪州の正寢に卒す。七十四歳。朝廷爲に葬需を給す。）

彼七十二歳〔李大王元年〕六月執義に除せらるゝや、攷據學派に屬する者等の往々説を著して朱子の説訓詁經訓經解を詆斥する者あるか爲に、文を著して之を揮斥せり。其の言ふ所、正に阮堂等の主張を對象とすること疑なし。曰く「聞世有妄人、該洽群書以攷證爲能、而摭拾異代無倫之言、恃爲獨知、而譏斥前世由來之言。人見其博覽、愼而和之、推以爲知、此大患也。將侮毀聖賢壞人心、豈細故耶。異端之害、自欺々人。其害似淺、而聖賢嚴斥辨正、視爲夷狄禽獸壞衰之禍者、夫豈過耶。彼其詆斥朱子訓詁之説、曰古有一説爲某人、又有一説爲某人、而朱子不知故不得於註而失於本義。此何等怪悖耶。又以爲河圖洛書、本無龍龜之出、而前世某人爲

之倡訛而某人爲之傳說。故朱子以爲聖人見圖書而畫卦演疇。此朱子未見、前世又有一人爲之辨、一人爲之斥、而誤信之也。若眞是龍龜之出則何不見於經書耶云々。此等怪妄之說、似不足掛齒牙、而世極昏迷、至於從信此流、則其禍不可不慮也。苟有識者夫人而知之矣。彼乃猥稱有名稱、自信爲獨知、將至於害世教而陷愚人、則亦不可不斥也。夫圖書出見孔子之言、而彼曰某人倡之而後某人辨之。然則彼所攷證者、朱子不得見乎。……如有似彼之妄、以爲律呂紀曆星文之說、不見經而可以詆斥、則彼將從信乎。醫藥種藝卜筮之方、不見經而可斥、則彼將不食而死乎。不究理而口誦考閱、則經不言而見於朱子之說、亦多矣。從信某也某也無根之說而自以爲知者、其意只在於斥朱子乎。放蕩自縱、々辭恢異而自異於程子者、蘇軾之流、意只在於自行自止、深疾義理之學也。然則程子朱子非有所嫌憎而爲其害於己、故加詆斥也。然則士可以斥彼者、豈私尊於程朱乎。爲學其道而慕其賢、而不可爲叛卒之徒、是天理之正也。」

立言の主意、攷據派の人々か義理の源頭を究めて以て修己治人の聖學に従事せんとせず、徒らに枝葉の訓詁に兀々として博覽泛觀を力め、偶々朱子の見得さりし古解に逢へば、得々として以て朱子の經義を攻撃するの（卑）陋を指斥する者にして、彼は既に朱子學を以て聖學の正統を得て道理の骨頭に於て一毫の錯なしと立つるか故に、攷據派の爲す所の如きは眞に無用の業たるのみなり。而して更に顧亭林等の朱子に對する反感に依りて妄りに朱子を詆斥するに倣ふる彼等、亦只朱子を排撃せんか爲に其説を立てる者に外ならずとなし。

此に明に攷據派は朱子派と兩立すへからざることを明言す。此の破邪的態度の牢乎たる、驚くべき者あり。

〔南人の李源祚凝窩〕

李源祚は星山李氏、李朝末南人の名人の一人、

官工曹判書に至る。『凝窩集』は道學に關する著述に富む。卷十一「集古録」に「僞古文十六言辨」あり、註に曰く

「秋史金正喜、謫大靜、著僞古文十六言說、送示。故作此辨。」

阮堂の此辨は、今の『尚書』今古文辨中には入らざるも、阮堂としては、此説は當然にして、又今日となりては支那學を治むる何人も以て之に異論なき所。又（前に茶山、之を絮説沔剩す所なく）『阮堂全集』卷五「與人書」中には明に此を以て題目となせる來教に答へて、是れ、既に前人の明晰、辨訖りて雲霧を開ける所なり。然るに猶此に

「今若只以萬世心學、舜禹相傳、斷然無疑等話、做得一大套而冒之曰、此必如是云爾則一懸空說去、曾非耳聞也目見也、又非口口相授也。有何證乎。」

と云ひて殆と一笑に附せんとす。但夫れ、朱子學に在りて此十六字は、道統の起源。禪宗に於ける拈華微笑と相似たり。此を以て僞古文となすは尤忍ひざる所。李凝窩は、是十六語の精微を極め、能く道學の端的を道破し、到底荀卿梅賾の輩の僞作し得べきに非ず、他の文或は朱子の指摘せるか如く僞古文たることあるへしと雖、此の十六字に至りては斷して以て疑を容るべきには非すとなす。

更に又阮堂か是語の僞作たるを言ひつゝ猶其の能く聖學の精微を著すと云ふ矛盾を責めて

「試以原書觀之、以荀子所論道德經爲十六言之所自出、而求於梅氏之手云。此求於言而不求於心之病也。觀於語精密相傳精言等語、可知。且既曰相傳精言、何待彙括成文。既曰生於作僞、何以不廢其言。前後相矛盾、言議不翅、燕郢可恠。」

斯くて凝窩は、漢學派攷證學派の學術全般に向て痛撃を加へて曰く

「孟子雖不說道說理、心之相傳、如合符契。若

以理道字之偶不見於古典而一切呵斥、則中庸之定理正道、亦出於程子之杜撰而不足爲思孟相授之要領耶。攷校（名）目、前所未有。特以近日清儒之學、專事攷證、較同異於白虎、發幽隱於丹鉛。其源出於漢儒之專門。故不得不以攷校爲學名、以明其非朱非陸、自傳其統。非明而借名於明、亦猶非朱而引重於朱耳。凌駕前輩、別立門戶、功名倍之、氣勢張焉。合經術文章而爲一誠謹矣。然終於本根上、缺却平穩工夫、聘雄辯而誇獨見、翻掀噉嚙、使人不敢開喙。即此氣像、已非儒家法門。雖說得寶花亂墮、非知道者所願聞也。未知辨僞書之功、果可以能補世教而明儒化耶。」

凝窩の辨の眞意も畢竟、洞山と殊る所なし。既に朱子學を以て聖學正統を得て義理の正を盡す者とし、學徒の工は、唯其の説經說道を眞實に理解し、之を實踐に進むるにありと決定すれば、『書經』の今古文を攷證して逐々此十六字の僞作に出るを辨するか如きは、眞に無用の業に屬せざる能はざるなり。假りて此十六字の僞作に出ること實なりとするも、朱子學徒としては依然、以て斯學の正法眼藏となして道學の起源を此におかざるへからされはなり。

〔朝鮮思想界の異端無用之學〕

阮堂の儒學が朝鮮思想界には受容れられず、殆ど異端無用之學の如くに思倣されしに拘らず、其の知己を清國學術最高級に多く有せるは前述の如し。是れ、彼の漢學の造詣の深く高く、既に悠然として清朝諸匠の最高水準に迄達せるか爲なるに外ならず。實に阮堂の私藏に拘る書籍は、今藤塚教授の前舉論文に挙げられし目録のみを以てするも能く其の富めるを示し、是外、彼の寓目せる者に至りては今悉く知る能はず。されは彼が權彝齋の代作として汪慈孟に送れる「海外墨緣」の一長篇には、清朝各經師の專治を擧げて縦横に之を（批）評して其の文辭と其の識見及知識と共に清儒をして後に〔目黨〕若

たらしむる者あり。宜なり、汪慈孟が敬服措かさりし事や『漢學會雜誌』第三卷第二號藤塚氏論文。是外、彼の書論、（畫）蘭法論等皆眼識千古を曠うするに足る。彼をして禹域に生れしめさりしを痛恨せざる能はず。 【終】

【附記】

この講義案の輸入は、2012年8月17日に終え、2013年3月に全冊の対照校勘を行った後、昨年（2012年）から最終の対照校勘を行った。不明な字も若干あり、今後、訂正箇所も新たに出てくるものと思われる。引き続き、対照校勘作業を行っていく。

注

¹ 李炳憲の中国訪問は『李炳憲全集』（亜細亞文化社、1989）所収「我歷抄」などによると、①1914.1~5 北京・香港、②1916.6~10 杭州、③1920.3~4 辛園（上海）、④1923.2~9 青島・曲阜、⑤1925.3~7 杭州、の合計5回である。ちなみに、彼は1924年8月に来日し、上野の帝國図書館蔵書を閲覽する。以下の〔補足〕などは、この全集による。

² 上面に「齊・韓・魯、排毛詩」とある。

³ 上面に「今文と謂ふは、景帝の子魯共王餘、宮室を治めて孔子の舊宅を毀て其壁中より古文經傳を得、後武帝の朝博士孔安國、之を讀みたり。皆蝌蚪の古文以て書かる『書經』『禮記』『論語』『孝經』なりと云ふ。後孔安國の古文學は、成帝に至りて廢され傳はらず、今の古文と謂ふは、異端後世の僞作を摺入す。而して◎右→◎馬融鄭玄多く之に據る故に、寧ろ秦代より正しく相傳へ來れる經師の今文の醇正なるに及はずと。是れ、今文派の主張なり。」とある。

⁴ 上面に「『山海經』以て伯益の作となす」とある。

⁵ これは、『儒教爲宗教哲學集中論』、『歴史教理錯綜談』「吾族四入中原論（一名七千年歴史正義）」、『蹈海叢談』第六論孔子爲東方之族孔教爲東方之教、に出る。

⁶ 赤色鉛筆による「上疏癖 崔益鉉、孫安民／華西一竹[?] -農岩淵源」のメモがある。

⁷ 後に見るように、『俟菴年譜』による追加の書き込みが多々ある。講義案作成中、入手でき、ここの「余は未見」を削除したのであろう。

⁸ 上面に「『與猶堂詩集』（第二卷）内

奉示木齋李先生森煥

稷下殘經半有無、吾師墜脈竟誰扶。頑雲蝕月長庚院、駭浪掀天砥柱孤。荀氏一門多俊士、管寧中歲作農夫。園丘薜々蒼松老、誰遣幽居入畫圖。」とある。

- ⁹ 追加記入の時削除するが、後、赤字「イキ」にて生かしている。
- ¹⁰ 張横渠が講義の際に敷いたもの。「阜比」ともいう。
- ¹¹ 横に「茅」とあり、上面に「茶山は芋栗は芋栗なるべしと云ふ。『雅言覺非』」とある。
- ¹² 『詩文集』第五卷に収録され、「三月十六日、游尹文學魯奎茶山書屋。公潤調息在此。因仍信宿。遂踰旬日、漸有終焉之志。聊述二篇示公潤。」とある
- ¹³ 上面に赤字にて「著書年代調査」とある。後に『俟菴年譜』によって調査が行われる。
- ¹⁴ 上面に「中庸策中、大學と中庸の關係を述ふる所、燃犀の達見あり。誠身之與大學不同者。臣以爲大學從誠之下手處説、此篇從誠之反己處説、所以不同也。」とある。
- ¹⁵ ここに省略された文は「夫暗室欺心、爲邪思妄念、爲奸淫、爲竊盜。厥明日正其衣冠、端坐修容、粹然無瑕君子也。官長莫之知、君王莫之察。終身行詐而不失當世之美名、索性造惡而能受後世之宗仰者、天下蓋比比矣。聖人以空言垂法、使天下之人、無故戒慎、無故恐懼、豈迂且闇哉。人性原自樂善、使之戒慎、猶之可也。夫恐懼爲物、非無故而可得者也。師教之而恐懼、是爲恐懼也。君令之而恐懼、是詐恐懼也。恐懼而可以詐僞、得之乎。暮行墟墓者、不期恐而自恐、知其有魅魍也。夜行山林者、不期懼而自懼、知其有虎豹也。」である。
- ¹⁶ 上面に「漢代解經（禮記）調査」とある。
- ¹⁷ 上面に「爲古文也」とある。
- ¹⁸ 第三冊後ろから上下 11 面にわたり、記されている。この第三冊作成中、大学図書館所蔵の『與猶堂集』を再調査し、また当初「未見」とした『俟菴年譜』の閲覧もでき、この與猶堂集の目次と著作年譜を書き込んだものと見られる。
- ¹⁹ 「易之象象及大象、惟取義於本卦。健順動巽陰明止説之德、天地雷風水火山澤之象、無不各如其本卦。義至明也。虞以卦之旁通釋之、雖極意彌縫、於經未必盡通。」とある。
- ²⁰ 関連する文が「括列表」の「互體表直説」に「伏體者。筮主於數、據其位而考其數。坎離之形、雖不現於其外、坎離之數、實伏其中。易有二觀。一曰卦德、二曰卦數。一至六卦德者、乾坤之所分賦也。卦數者、坎離之所占據也。六十四卦、其剛畫皆乾、其柔畫皆坤。則六十四卦、無一不函於乾坤之範圍也。六十四卦、其下卦皆離、一二三奇偶奇、其上卦皆坎、四五六偶奇偶。則六十四卦、無一不函於坎離之管轄也。若是者何也。天地水火、易之四柱也。故其分布諸卦而主其象數如此。○以之筮日則下卦爲畫。

故初爲日出、二爲日中、三爲日昃、上卦爲夜。夬九二以之筮月、則下卦爲時、震春而離夏。上卦爲月、兌在上、爲月幾望。皆以坎离之位也。説卦云离爲日、坎爲月。」とある。

- ²¹ 関連する原文は、「畔合者、婚媾之象也。故凡婚媾之卦、其少男少女、多一倒而一正亦有不然者。歸妹則艮墜自外至、故爲歸妹之象女家爲主人。漸則兌女自外至、故爲女歸之象婿家爲主人。如咸恒之類、雖亦男女俱存。其勢相順、不相畔合。但可爲夫婦正家之象、不可爲婚配行禮之象。故大過爻詞、以咸爲震兌之合下倒震、以恒爲巽艮之合上倒艮。此皆畔合之精義也。」となる。
- ²² 上面に「茶山（阮堂）は「易筮辨上」に於て、是等春秋時代筮官の私占古法、即三易に依る。九筮[春官に出つ]を知らず、肆に私に繇辭を造りて以て占法となすものにして、毫も周易の古法を證するに足らずとなす。」
[夫以聖人作易、而廬以供人之筮。吾疑焉。及觀春秋傳諸筮法、又與聖人作易、迥乎不同。吾益疑焉。春官筮人掌三易、以辨九筮之名。春秋時筮者、不知九筮、別爲筮法。謬愆虛妄、私造繇辭、以爲占法。…孔子所以韋編三絶、以明易之非徒卜筮之書而寡過之書也。春秋占法、大謬乎聖人。]とある。
- ²³ 上面に「50 本-1=49 49-1=48 48÷4=12 故に所剩必ず 4 也。」とある。
- ²⁴ 上面に以下のような書き込みがある。
「三變[第一回八樞に由りて内卦生ず。即一より八迄の數に八卦を配當しおけはなり。第二回八樞によりて外卦生ず。第三回四（六？）樞によりて夬之卦生ず。之に由りて判斷す。]六變[[中筮]第一回八樞によりて八卦の一、第二回八樞によりて八卦の一、六回八樞によりて六個八卦生ず。而沕各八卦に老陽老陰少陽少陰を定むるか故に、此六個の八卦を老陰陽少陰陽と畫して六畫の大卦を成し、其内、老陰陽は變交するか故に、此に之卦定まる。]九變筮法[四樞となし零策、一は老陽、二策は少陰、三策は少陽、四策は老陰となす。九樞する事に由りて十八爻を生じ、即、六の八卦となる。此内、老陰陽は變するか故に☱、☲、☳、☴、☵、☶之卦を見るべし。]茶山の筮法は、十有八遍に屬す。現日本の筮法には三變筮法[略筮]、六變筮法、九變筮法、十八變筮法及廿六變筮法の五法あり。朱子は十八變筮法に變り最經意に合し穩健なる筮法なりと稱せらる。茶山も筮の度數に於ては此に従へるなり。十八變筮法[四樞（三度）して其の零策を合して老陰陽少陰陽を定め一爻生ず。故に十八變沕六爻生ず]
- ²⁵ 上面に「四樞せらるゝか故に四倍也。されは數足らず。四樞の原理は四時に在ること本傳に所説の如し。」とある。
- ²⁶ 関連する文が「著卦傳」に「假令一筮之間、其卦遇乾而其初畫與第二畫、俱得老陽三掛皆奇日老陽、則筮人抽上韞藏筮器。取乾初九之策三十六枚四九三十六。乾九二之策三十六枚合爲七十二、合同滾轉和合之。亦四四樞之

勿分而爲二、取末後之策四枚。數回摩轉照前法、任抽其一信手取、以授卦者畫卦人。若是初九之策、則初爻變乾之姤。若是九二之策、則第二爻變爲同人。此所謂參伍以變也。○大衍之策、必用著莖。而此策或是竹筭、故經文至此、始用策字。筮字從竹。若始終皆用著莖、則不應從竹也。筭筭等從竹。蓋於竹策之上、各有標題。題乾初九者若干枚三十六。題乾九二者若干枚三十六。餘皆倣此也。若云不然、經文何以云乾之策幾何、坤之策幾何哉。天成沒字之策、混同藏之於著櫃之中而隱然號之曰乾之策坤之策、天下無此孟浪也。」とある。

²⁷ これは、おそらく『服部先生古稀祝賀記念論文集』（昭和11年、富山房）収録の高橋論文「朝鮮學者の土地平分説と共產説」による講義を行ったものと思われる。

²⁸ 上面に「西厓、英年時以書狀官赴燕。問答與大學生、其曰、王白爲儒宗。西厓斥曰、白沙見道未精、陽明亦禪學之換面者也。如薛文清一出於正也。月川亦斥白沙爲禪學、陽明爲頗僻。

宣祖壬辰明軍東援時、明學者之從軍者、時與朝鮮學人交談論學術。明人多主陸王、東土則反是、專主程朱。例則如宋經略應昌則王學也、如黃慎、李廷龜、柳夢寅等則東土也。

成渾依命草「答皇明主事袁黃書」斥言（奉）程朱不可改之理由。『海東名臣錄』黃慎條、『月沙集』大學講語條、『牛溪集』（卷之六雜著）答皇明兵部主事袁黃書」とある。

²⁹ この謄写本のソウル大学図書館収蔵実態は確認してある。

³⁰ 現在流通の影印本には「某頓首、往者既辱長牋、復以辨學一篇、指論動切、幸甚幸甚。來教有曰天下之理一也。理之所在、不以人而輕重。至矣。何以得聞斯義也。又謂僕之信於王氏之說、豈無源本、必有誠信而樂之者。不推原其所在、而徒觝斥之爲事、不能服其心。其於論人之情亦切矣。能無戚戚於中。某所願得而求效者。又孰加於此哉。…」とあり、下線部に見るように、高橋引用文と若干の齟齬がある。

³¹ この「而特以靜爲性耶」が現行影印本には無い。

³² ここは現行影印本に「性者無源」とある。

³³ ここの「若自其致乎本原者言之」は現行影印本には無い。

³⁴ この文は、「與閔彦暉論辨言正術書」からの引用と見られるが、現行影印本とは、相当の同異がある。

³⁵ 上の引用と同じ「與閔彦暉論辨言正術書」の「辨言曰惜乎。陽明氏死矣。止在犬爲司吠乎。」條の「牛可耕、馬可馳。鷄司晨、犬司吠。固所謂物理。然亦有理與非理而已矣。謂牛可耕而耕之於不當耕、謂馬可馳而馳之於不當馳、攘隣人之鷄、翫西旅之獮者。尚可謂之理乎。牛有時乎有騎者、馬有時乎有載者、鷄有時而烹、犬有時而皮、馬牛之適有歸放、鷄豚之或有不察。獨不可謂之理乎。凡於此等、必察眞至之義、極夫天理之正而後、方可謂之理也。夫所謂眞至之義、天理之正、果

在乎馬牛鷄犬而可求者耶。故天地萬物、凡可與於人事者、其理元未嘗有一切之定在物上、人可得以學之也。

其逐件條制、隨時命物、實惟在於吾之一心、豈有外於心而佗求之理哉。若徒見可耕可馳之在牛在馬、就而求之則實亦茫蕩無歸、正涉逐物之病。某恐聖賢所爲性理之學、不在是也。告子謂彼長而我長之、非有長於我也正是牛耕馬馳之意也。孟子引長馬之長長人之長、出於心之區別者喻之。且曰長者義乎、長之者義乎。此所謂天理也。其義之分明已如此、則何故必以爲外在也。先儒云羈勒之生、由於馬。斯固至論此明其非出於人之私智之謂。然因此而謂羈勒之理、不在於心、不可。何則知馬之可以羈勒而羈勒之者、誰耶。夫羈勒而制馬則心之理得也。如或有不中不明、妄羈勒而御牛者矣。是果有係於馬牛而然乎此孟子所謂行吾敬者也。是故老少朋友、天下之所同有而安懷信之之理、則惟有聖人之心之德能之。然則羈勒之生、固可謂由於焉、亦不可謂不出於吾心、明矣。由是言之、物理吾心、又安可以內外彼此分之耶。王氏所云在吾心萬事之理、於天地萬物之理、即一而已者。正謂是爾。老兄或莫之察乎。今日所論、本原在此。其他皆枝葉也。於本書中幸熟察。」にあり、下線部に見るように、相当の同異がある。

³⁶ 第四冊最後頁上面に「昭和十年十二月卅一日稿訖」とある。ちなみに、第五冊表紙に「昭和十一年一月五日」とある。

³⁷ 上面に「其尺牘の想、亦全然支那人に合し、「與彝齋書」の如き賞讃満口に到らざるなし。」とある。

³⁸ 阮堂は伯父の魯永に出自する。

³⁹ 上面に次のようなメモ書きがある。

「學術

一、參攷資料、一、學術變遷辨、一、漢學辨、實事求是一、宋明學指斥、聖學闡明（尊禮、尚荀子、清朝學術批判）、易學に對する前後不一致、書論畫論、佛教知識禪批判。

一、金阮堂經說の影響、朝鮮書畫鑑識一段進歩、與彝齋書可見。

濟州在裡の焦燥見於送彝齋書中。

尺牘大抵爲書畫文、爲道學者少。

張寅植の扶助 濟州之貳尹歟。」

⁴⁰ この引用文は『純祖實錄』31卷の1830年8月27日条にあるが、以下の文は出典不明。

⁴¹ 現行文集には「有書而一不見答…」と、「不」字がある。

⁴² ここに省略された文は「是茶之使而非書之使。茶甚於書耶。且審近日、連任一爐香、有甚勝緣、何不破除藤葛。一筈遠飛、共此茶緣也。」である。

⁴³ 全文は「聖人之心渾然一理。此義、最難理會、非淺學輩所可輕易下說也。當先定理字之爲何義、然後乃可的確。孔孟以來、理字云者、惟文理條理義理等數語而已。朱子曰理無情意計度造作、只是個潔淨空闊底世界、無

形迹。他却不會造作。若以此訓看之、聖人之心、以理究證、寧不難言而難曉也。又或有理字之他訓、或曰天曰性。而性天之義、又互相窒礙難曉焉。所以此說之極難理會也。今以在傳注中而妄引輕說、可乎。所以三家邨中、講高頭講章之冬烘先生、爲樵童牧豎說都都平丈、無非傳注之朱子說。而彼何以知心性理氣之爲何語也。是以冬烘謂之稗販朱子也。今所妄引、又一稗販朱子也。又與朱子所云此是釋氏論語、非孔氏論語者、不幸近之耳。」とある。